

共生の物語　～屍人と 響界種と守護竜と～

アウル スペランツァ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オラクルとある作戦に従事したアウルは事故により異世界、リインバウムへと転移させられてしまう

そこでも事件に巻き込まれ、成長していく少女を支えながら元の世界へと還る方法を探していく…

キャラの見た目はサモンナイト4のキャラを調べてください

あの奇抜な人達を文章のみで伝えられる自信がないのです(ω・)

目次

世界観&人物紹介

サモンナイト：世界観 | 1

登場人物紹介（本編1-8話迄）

33

本編

第一話 プロローグ | 42

第二話 日常① | 48

第三話 日常② | 61

第四話 日常③ | 72

第五話 大波乱の幕開け | 83

第六話 変わりゆく日々 | 99

第七話 将軍との邂逅 | 112

第八話 屍人VS将軍 | 128

第九話 屍人VS将軍（フェア視点）

134

第十話 話し合い | 148

第十一話 天使娘との出会い | 158

第十二話 御使いと御子 | 173

第十三話 天使娘は家出娘？ | 178

第十四話 教授との邂逅 | 194

第十五話 秘密の暴露 | 206

第十六話 ミルリーフの初めての散

歩、しかし… | 217

第十七話 第二の御使い | 227

第十八話 新たな敵 | 238

	第十九話	V S 獣の軍団	—	254
	第二十話	獣皇との邂逅	—	267
	第二十一話	屍人V S 獣皇	—	283
303	第二十二話	紅き手袋と少年剣士		
	第二十三話	將軍と黒騎士	—	314
	第二十四話	凍りついた湖	—	334
	第二十五話	不穏な勧誘	—	342
351	第二十六話	音色が運ぶ出会い		
	第二十七話	高潔なる騎士	—	361

世界観 & 人物紹介

サモンナイト：世界観

サモンナイトの舞台となる異世界「リインバウム」はいわゆる中世ファンタジーに似た世界であるが、召喚術の力による近代的な工場や鉄道なども見られる。リインバウムを取り巻くようにして4つの異世界が存在し、それぞれ「機界・ロレイラル」「鬼妖界・シルターン」「霊界・サプレス」「幻獣界・メイトルパ」と呼ばれ独自の文明を有しており、それぞれの世界は「輪廻転生の輪」でつながっているとされている。

また、上記の4つの異世界とは異なる、いくつもの「名も無き世界」の存在も確認されており、我々がいる世界もその内の一つである。

これらの世界は「エルゴ（界の意志）」と呼ばれる超常の力を持つ存在によって支えられており、それぞれの世界に「エルゴの守護者」と呼称されるエルゴに選ばれたその世界の住人または関連のあるものが存在する。

リインバウム

主に人間が暮らす世界。「選ばれた魂が集う楽園」とも、「転生の価値がなくなった魂がさまよう煉獄」とも呼ばれている。

豊富な魔法力（マナ）に満ちており、それを狙って4つの異世界からたびたび侵略を受けていた。侵略に対抗する手段として「送還術」「召喚術」が発達し、最終的には「エルゴの王」と呼ばれる英雄によって他の異世界との境界に結界が張られ、半永久的に異世界からの侵略を防ぐことに成功。その後、エルゴの王を中心とした王国が誕生するが、エルゴの王の死後、権力争いがもとで分裂し、現在は大陸中央の「聖王国」、北方の「旧王国」、西方の「帝国」の三国家が存在する（いずれも国家元首に「エルゴの王」の血統者を据え、国家の正当性を謳っている）。そのような理由で成立したゆえに、国家間の関係は極めて悪い。統治機構としての国家はあまり重要視されてはおらず、地方ごとの大都市を中心とした統治が為されている。

聖王国

「エルゴの王」の直系子孫を国王に据えているリンバウム最大の国家。立憲君主制を取り、王に委任された大臣が政を行っている（君臨すれども、統治せず）。召喚術を召喚士にしか使えない技術とすることで徹底的に管理し、安全を確保すると同時に富や権力を独占している。召喚師の派閥である「蒼の派閥」と「金の派閥」の総本部がある。王都はゼラム。

旧王国

聖王国の支配をよしとしなかった王国の軍人たちが、「エルゴの王」の庶子を担ぎ出し

て興した軍事国家。徹底した権威主義で知られ、国民を外から隔離したため幾度も内乱が勃発し、現在は衰退の一途をたどっている。聖王国を打倒し王国を復興させることを至上の目的としている。国権の最高機関は元老院。

国の成り立ちからして召喚術を快く思っていない者が多く、蒼の派閥や金の派閥の支部は存在しない。

帝国

旧王国の閉鎖的な体制に反発した者たちが、旧王国の王子を擁立し『皇帝』として興した新興国家。そのため聖王国とは比較的良好な関係を築いており、交易も行われている。召喚師の派閥が存在せず、召喚術は軍によつて嚴重に管理されている（蒼の派閥と金の派閥の支部は存在する）。帝都はウルゴラ。3つの国家の中では最も勢いがあり、一部の召還術を開放し、それを利用した産業を興すなどかなり進歩的な政策を行っている。

3つの国家の内でも各種都市の連携が非常に良く取れている。帝国の重要な施設を各都市に分散配置しており、軍学校や研究施設、陸軍海軍の中心地はそれぞれの都市の特色として現れている。

帝国のエリートとされる軍人や軍属は広く民間からも人材を採用しているためか、国民は非常に教育熱心であり、各地で退役軍人などが開いた私塾に子供たちを通わせる姿

が見られる。結果として、文化水準や識字率は他の2国と比べて圧倒的に高くなっている。

エルゴ（界の意志）

すべての世界の始祖、管理者、制裁者などと想定される超常の力をもつ存在。

いわゆる神、とは存在的に違い知識や魔力の流動体ともいえ、どうやら各世界ごとに分裂しているようである。世界に存在する全ての事象と繋がっているとされ、それらとエルゴを繋げているといわれる不可視の魔力の繋がりを「共界線（クリプス）」と呼ぶ。ラインバウムの伝承によれば最初のエルゴ（ラインバウムのエルゴ）より4つのエルゴが分かれ、そこから森羅万象が発生したとされている。

エルゴの守護者・

各世界の守り手としてエルゴに選ばれた存在。各世界ごとに一人ないしは二人おり、召喚世界の調整・維持ならびに世界の根幹を揺るがす存在に対する対抗手段として活動する。必ずしも「人」ではなく、エルゴが機械兵士に自由意志を持たせたものや竜といった存在も選ばれる。

幻獣界、鬼妖界と機界の守護者はラインバウムに訪れたこともある。霊界の守護者は「無色の派閥の乱」の際に行方不明となっている。

機界・ロレイラル・

機械兵士と呼ばれるロボットや、それに準ずる機械たちの世界。機械技術・情報科学が発達しており、機械が機械を作り出すことも行われている。高い技術レベルを誇るが、この世界の人類が起こした機界大戦という世界規模の戦争により荒廃し、生物が住めない世界となった。現在、ロレイラルの大地で活動するものはほとんどが機械であり、暴走した機械兵士などかつての文明の遺物が細々と稼働しているに過ぎない。

リインバウムやそれを取り巻く他の3つの世界と比べてマナが極めて少なく、そのため他の世界の豊富なマナを求めて侵略戦争を起こしたことがある。主な標的はリインバウムであり、エルゴの王以前の世界においては評判の良くない世界に位置づけられていた。

マナの乏しい世界ゆえか、ロレイラルには他の世界にあるような魔術・呪術の類は存在しない。

この世界の人間は融機人（ベイガー）という、機械と生身の肉体が分子レベルで融合した人類である。地上が先に述べた通りの有り様であるため、生き残った者たちは地下シエルターに避難し、冷凍睡眠を繰り返しながら細々と生き延びているらしいが、詳細は不明。一説によると戦火を逃れリインバウムに亡命した一族もいるらしい。

融機人は「高度な計算処理や幾何学図形の作図に長ける」「我々と同じような食物のほか、オイルや電気でも命を繋ぐことができる」など、人間と機械の中間的な性質を持ち、

その血液には祖先の記憶を代々受け継いでいるという。また、彼らはリンバウムのあらゆる病原体に対して免疫を持たないため、リンバウムで生活するためには特殊な鉱石を精製して作った薬が必要になる。

機械兵士とは戦闘用に開発されたロボットのことである。遠距離砲撃戦用、近接戦闘用、対多数殲滅戦用などさまざまな種類がロールアウトしている。機能中枢は人工知能（AI）であり、主人と認識した者の命令に盲従するよう設定されているが、バグやその他の不確定要素によりあたかも人格や感情を持つて行動するように見受けられる機体も存在する。

その他にも作業用機体などが存在し、特に人間の外見を模した外装を装備した機体は「機械人形（フラーゼン）」と呼称され、現在リンバウムでその存在が確認されているのは「看護用」「秘書型」「演劇用」であり、そのいずれもが女性を模した姿をしている。「彼女ら」は機械兵士とは違い、元々人間に近い場所で作業するために作られた存在であるため、周囲の人間の挙動を学習して人格を形成するプログラムを搭載しており、その動作環境によっては人間とほぼ変わらない程に豊かな感情表現を見せる者もいる。

鬼妖界・シルターン・

鬼や龍、妖怪たちが住む世界。その他に忍者、侍、神社、蕎麦、漢方など、文化・習俗について中世の日本や中国を思わせ、リンバウム以外では唯一人間の住む世界でも

ある（融機人や巫人を除いて）。そのため、メイトルパの住人に次いでリインバウムに帰化した者が多いのも特徴である。

「野は人の領分、山は妖怪の領分」として暗黙の了解がなされており、両者の対立は少ない。何かしら問題が起きた場合は、龍神や鬼神に仕える「道の者」と呼ばれる宮司（グウジ）や巫女（ミコ）が間に立って仲裁する。「鬼道」や「龍道」と呼ばれる陰陽術のよきな術体系が存在するが、詳細は不明。

大小様々な国家が絶えず争う戦乱の世であるといわれている。

かつて荒ぶる鬼神がリインバウムへ侵攻したこともある一方、悪魔王によつて侵略の危機に立たされたリインバウムに龍神や鬼神が救援の手を差し伸べたこともある。

「道の者」以外にも、この世界特有の戦闘術を習得した前述のシノビ、サムライなどと呼ばれる者も存在する。

鬼人・龍人

鬼神・龍神の血を引くシルターンの固有人種。身体能力・霊的能力の両面で人間（シルターン出身者）よりも優れており、妖術と呼ばれる術を使うこともある。

サムライ

シルターンの戦士階級に属する人間、およびそれに類する鬼人や龍人。刀を用いた精緻な剣術を操る剣士でその技術は総じて高い。

特に恐ろしいとされるのは「居合い」と呼ばれる剣技で、技量と気合によって対象を切断するのだが、熟達すると距離や硬度を問わずあらゆるものを断つと言われており、飛来する鋼の砲弾や巨大な城門を切断するサムライも存在する。

ニンジャ

シルターンの間諜・暗殺に長けた者たちの総称。シノビとも呼ばれる。サムライとは違い相手の虚をつく戦闘法を駆使する恐るべき戦士である。

剣術もさることながら、数々の忍術と呼ばれる不思議な術を用いることでも知られ、自身と同等の戦闘力を持った分身を呼び出す術や身代わりを使って相手の攻撃を回避する空蟬の術、障害物や高低差を無視した瞬間移動を行うサルトビの術などが知られる。

非情な暗殺者でもあり医学薬学にも精通している。優秀な間諜としても知られ、普段は一般市民として完全に溶け込んでいることが多い。

己が認めた主君の命令は絶対であり、いかなる非道も辞さない。また、ニンジャの裏切りは死を以って償われる。しかし、中にはその技術を私利私欲のために悪用する「外道」に堕ちたニンジャも存在する。

霊界・サプレス・

幽霊、悪魔、天使などの霊的な存在が住まう世界。かつてリンバウムに最大の危機

をもたらした大悪魔メルギトスや、メルギトスを封印したとされる豊穡の天使アルミネもこの世界出身である。この世界の住人たちは実体を持たず、リンバウムに召喚された時はマナによって自らの肉体を構成する。マナで構成された肉体は消耗が激しいため、長時間の実体化は難しいとされている。そのため彼らは昼間に休息をとり、魔力の満ちる月の出る夜間に活動する者がほとんどである。

魂の輝きを慈しみそれを育てていくことを至上の喜びとする天使と、怒りや悲しみなどの負の感情を好みそれを糧とする悪魔は敵対しており、はるか昔から争いが続く混沌とした世界でもある。加えて悪魔の中には他の世界への侵略を行う者が存在し、過去にリンバウムとメイトルパに対して侵攻が行われた。「奇跡」や「魔法」と呼ばれる術体系があるが、詳細は不明。

幻獣界・メイトルパ・

様々な幻獣や亜人たちが暮らす緑豊かな世界。亜人は同じ種族でまとまり、さらにいくつかの部族に分かれて基本的には相互不干渉の状態で暮らしている。かつてマナ枯らし（別名解魂病）という流行病によって亜人の先祖である人間は絶滅した。

労働力として召喚されることが多く、過酷な扱いに堪えかねて脱走した末にはぐれ召喚獣と化してしまう者も多い。

魔除けや邪悪な者を祓うことを得意とする「呪い（まじない）」という術がある（精霊

信仰のようなもの)が、特定の部族の者以外は使えないようである。

亜人とは、かつて原初の人間がメイトルパの生き物と契りを結んで生まれた存在で、獣と人間双方の特徴を持った種族である。種族によって似ている生き物やどの程度それらに似た姿を持つかは大きく異なり、人間に獣の耳や尾、翼などが生えた程度の「人間寄り」の種族から、獣が二足歩行をし言葉を話しているだけのようない「獣寄り」の種族までさまさま。「密林の呪い師」「ファース」「草原の覇者」「リオネル」「さまよう狩人」オルフル、「神秘なる眼」メトラル、「調停者」レビットの五つが最も古い歴史を持つ種族である。

かつて、サブレスの悪魔たちによって「魔獣侵食」が起こり、その際に多くの種族が滅亡するか、「魔獣」と化して悪魔の尖兵となってしまった。現在召喚される「魔獣」と呼ばれる存在は、彼らの末裔である。

名も無き世界・

現在の研究では詳細が判明していない世界。

生物が召喚されることはまれであり、道具類や石像・石版・水晶等が召喚される。派閥の実験によって稀にリンバウムの住人と変わらない人間が召喚されることもある。が、彼らも例外なく「召喚獣」扱いとされ、了見の狭い者から差別を受けることが多い。この世界から来たと主張する者たちによると「ニッポン」や「ステイツ」なる地名が

あるらしい。

ラインバウムの人間、またはラインバウムを巡る4つの世界から召喚された者は基本的に一つの属性の召喚術しか扱えないが、この世界の出身、またはその血を受け継ぐ者は、全ての属性の召喚術を扱えるという特徴がある。

召喚術・

召喚術（サモーンング）はラインバウムで発達した特殊な魔法。元々は送還術（パージング）と呼ばれる、異世界からの侵略者を元の世界に追いつ返し返す技術であったが、これを逆利用することで異世界から使役対象を呼び出し、その力を行使させる技術となった。召喚術を用いる者は召喚師、使役対象は人間であっても無生物であっても召喚獣と呼ぶ。召喚術が発展していくうち、逆に送還術は必要最低限のものを除き廃れていった。

召喚の基本原理は、サモナイト石と呼ばれる特殊な鉱石にマナを注ぎ込んで異世界との通路を開き、召喚対象の「真の名」を唱えて「誓約」によってラインバウムに呼び出す、という2つの段階に分かれる。サモナイト石には5種類（黒・赤・紫・緑・無色）が存在し、黒がロレイラル、赤がシルターン、紫がサプレス、緑がメイトルパ、無色が名も無き世界の存在をそれぞれ召喚することができる。このサモナイト石は、世界の地下を流れるマグマに含まれるマナが長い時間をかけて結晶化したものである。一度召喚

に使われたサモンナイト石には召喚された存在の真名または紋章のようなものが刻まれ、その存在をサモンナイト石が破壊されるか召喚対象の死亡・消滅及び誓約の解除がなされない限り何度でも呼び出すことができる。

召喚術の術式には、召喚対象と意思疎通を可能にするためにリインバウムの言語を会話可能にする魔法が組み込まれている。これは、あくまで使用する言語を魔法で変換しているに過ぎず、当然ながらリインバウムの言語の読解はできない。異なる世界から召喚された者同士の意思疎通も可能にしている。

基本的に人型の生物が使う言語にのみ適用されるようで、人と姿が大きくかけ離れた雷精霊タケシーのような召喚対象は、サブレスの言語が話せてもリインバウム言語での会話は不可能であった。

また、召喚術の基礎となった送還術も術の一部として組み込まれている。このため、召喚対象を送還できるのは原則として召喚した張本人のみとなっている。このため、召喚師が死亡すると召還獣は元の世界に還れないという深刻な問題にも繋がっている。召喚対象が召喚師に隷属せざるを得ない最大の理由はここにある。

召喚師は家名によってその出身と実力を証明し、その強大な威力と相まってある種の特権階級でもある。召喚師の組織を「派閥」と呼び、代表的なものとして「蒼の派閥」「金の派閥」「無色の派閥」が挙げられる。その他、特定の派閥に属することなく、独自に召

喚術を研究している召喚師の一族もいる（ノイラーム家、アフラーン家など）。

実は召喚術には大きな問題と危険性が存在している。召喚術はかつてエルゴの王が施した『異世界からのリインバウム侵攻を防ぐ結界』を破壊する働きがあり、召喚術が使われるたびにその結界の穴は大きくなり、通常的手段では穴を塞ぐことはできない。その結果、最終的には召喚術の乱用によつて結界が崩壊し、異世界からの侵略が再び起こることがほぼ確実となる。特に力のある悪魔の王であれば自力で世界を渡ることも可能であり、ある理由により異世界からの協力を得ることができなくなつたリインバウムの人間にはこれを防ぐ手段は存在しない。

逆にリインバウムの人間が4つの異世界及び名もなき世界に行くには、無限界廊に行く必要があるが、至源の泉など限られた場所でしか無限界廊の門を開くことが出来ないため、自由に4つの世界を行き来することは事実上不可能である。

召喚師

召喚術を使う者のうち、特に召喚術について専門的に学んだ者のことである。そのほとんどがいずれかの派閥に所属している。それ以外の召喚師を外道召喚師とも言う。帝国では召喚師は軍属となる。

聖王国では蒼の派閥と金の派閥があり、一人前の召喚師ともなると貴族並の地位が与えられる。

召喚師としての教育・研究はほとんどが家伝のものであり、嫡子及び養子として「家名」を与えられるものが多いが、一部にはそれ以外の方法で「家名」を得たり派閥の幹部の地位を得た者を「成り上がり」と称して蔑む風潮もある。

誓約（エンゲージ）

誓約とは異世界の者の名を読み取り縛ることである。条件は「元の世界に戻すこと」であり、誓約の際に召喚師の力が及ばなかったり間違った名前を読んだりすると暴発し、二重誓約（ギヤミング）や召喚師自身が呼び出した召喚獣によつて殺されるなど悲惨なことにもなりうる。真の名は召喚師たちにより厳重に守られている。

誓約は一種の呪いでもあり、召喚主の意に反する行動を取ると召喚対象に激痛を与え、という極めて非人道的な能力が備わっている場合もある。また、無理にこれを召喚対象を含めた他者が解除しようとするると召喚対象そのものが消滅する危険性をも秘めている。

二重誓約（ギヤミング）

召喚術の暴走により、誓約の力が弱まったはぐれ召喚獣に新たな誓約がかけられ呼び出してしまうこと。誓約がかけられているとはいえ、そのはぐれ召喚獣を元の世界に戻すことはできないようである。

護衛獣

召喚獣を送還せず、召喚師の身の警護をさせるもの。召喚師と召喚獣の信頼関係から成り立っていることが多い。

はぐれ召喚獣

召喚師のいない召喚獣をこう呼ぶ。その多くは戦闘中に呼び出されたが途中で召喚師が死んでしまった場合、呼び出されたはいいが召喚師を殺してしまった場合や逃げ出した場合などがある。

はぐれの末路はリンバウムの中でヒトとして生活していく者（シルターンの間人間など）、奴隸としてリンバウムで生きていく者、モンスターと化し人々を襲う者などに分けられるが、いずれの場合もリスクが高いことに変わりはない。

憑依召喚・召喚呪詛

召喚した存在を人間あるいはその他に「憑依」させることによって、身体能力の向上または低下を引き起こす。また対象を傀儡とするものや、憑依した相手の身体構造を変化させるものも存在し、鬼を憑かせて理性を持たない狂戦士に変える悪鬼憑きや死体に低級悪魔を憑依させることで術者の操り人形とする屍人兵、病に蝕まれながら死ぬこともない苦痛を与える病魔を憑かせる病魔の呪いなどがある。共に対象に召喚した存在を取り憑かせる術で両者の区別は不明。本来は禁術とされる部分が非常に多く、使用するのは主に外道召喚師や無色の派閥の構成員。

蒼の派閥

真理の探求を目的とした学究的な組織で、経済的・政治的な活動を極力避けている。新人召喚師の育成も積極的に行っている。

召喚術に対する考え方の相違から、金の派閥とは折り合いが悪い。聖王国の王都ゼラムに本部がある。

聖王国の建国に大きく関与していることもあり、建前上積極的に関わってはいないが、水面下では密接な関係にあるといえる。

総帥はエクス・プリマス・ドラウニー。

総帥エクスを中心とした上層部や『2』の主人公たちは他の召喚士とも友好的な一方、その他大勢の構成員は排他的で、特に金の派閥への敵意は強い。有力家系はドラウニー家、バスク家、ロランジュ家など。

金の派閥

召喚術による利益追求を第一とする実利主義的な組織。蒼の派閥と異なり経済的・政治的な活動を積極的に行っている。

蒼の派閥とは対照的に、召喚術は家系ごとの秘伝とされている。そのため各家系で得意とする召喚術は異なっている（マーン家はサプレス、ウォーデン家はメイトルパと違った具合）。

聖王都南西の港街フアナンに本部がある。

議長はフアミイ・マーンであり、彼女はマーン家の家長も務めている。

召喚術を完全に「商品」として扱っているため、呼び出した召喚獣での環境改善や農林水産業の活性化（そのまま食料にするなど）、工業の動力や産業の労働力（そのまま奴隷のように酷使することも多々ある）、果ては軍事力や兵器として召喚獣（異世界の道具は人間も含まれる）を提供する死の商人としての側面も持ち、功罪合わせてのリインバウム世界へ与える影響は絶大である。

営利団体として活動しているためか所属員は拝金主義的な考え方であることが多く、また政治にも関与するため、特権意識を強く持つて他者に高圧的な者も多く、一般市民からの支持は薄い。数は少ないが誠実で公正な者も在籍している。

有力家系はマーン家、ウォーデン家。

無色の派閥

蒼の派閥、金の派閥いずれの派閥にも属さぬ、『召喚術師を頂点とした世界』を目指す原理主義的な召喚師の集団。前者二つの派閥のように、まとまった組織ではない。

目的は同一ではないが、召喚術による世界刷新や国家転覆など、過激な思想を持った者が多い。

その発祥は古く、「王国」時代におけるエルゴの王の側近である召喚師ゼノビスを始祖

とし、重臣として活躍した召喚師たちが中心となつて起こしたとも言われている。そのため古くからの召喚師の風習を今に伝えている。召喚術を門外不出の秘伝として代々受け継ぐ家系が多いこともそのひとつであり、現在では失伝してしまった太古の術や得体の知れない強力な術を駆使する者も多い。目的のためなら手段を選ばず、非人道的な術の使用も平然と行う。

召喚術を一部一般開放した帝国を特に敵対視しており、帝国成立以降度々激戦を繰り広げている。要人やその家族に対する召喚呪詛を用いたテロを行ったり、その活動は苛烈で陰湿である。

大幹部であるセルボルト家の一派は『世界を滅ぼし自分たちにとって必要なものだけを召喚した新しい世界』を目指し、その破壊のために数多くの活動や研究を行っていた。

有力家系はセルボルト家、クラストフ家、コープス家など。

騎士・軍人・

騎士

聖王国・旧王国における軍務及び警備任務に就く人々の名称。

騎士の任命及び各騎士団への所属はその多くが家系によって決められているのが現状である。それゆえに己の出自を誇りに思うあまり尊大な態度をとる者も少なからず存在する。

前述の理由により、騎士の家系に生まれながらも才能または身体能力ゆえに騎士として認められなかったもの・何らかの理由で所属を解かれた者・能力がありながらも生まれが平民ゆえに騎士団に所属できなかった者などが生まれてしまう。彼らの中には破壊活動に身を落としてしまう者もいた。

現状の打開及びいざというときの抑止力として、元・聖王国トライドラ最後の生き残りでローエン砦守備隊長シャムロック及び数名の同志を中心として「権力に縛られない自由の剣」を旗頭に「巡りの大樹（リインバウム）自由騎士団」が結成され、その活動の域は広がりつつある。発足から数年足らずでありながら帝国の片田舎にまでその活躍や存在が伝えられるほどである。

この世界の騎士は標準的に重装甲の板金鎧と両手持ちの大剣で武装し戦う。そのための剣術が各地で研鑽されている。

特に名高いのは聖王国の盾と呼ばれたトライドラ騎士団の剣術で、長期に渡って旧王国のデグレアからの侵攻を防いできた実績と伝統を併せ持った精妙なもの。聖王家の王子を初めとしてトライドラ剣術を学べることは騎士や剣士にとってステータスとも言えた。

現在ではトライドラの領主イゴール以下全ての住人が鬼や屍人となったため、トライドラの剣術を伝えるものは数少なくなってしまった。

これに対していた旧王国側の騎士はやや異なった装備を用いている。基本的には大剣に重装鎧と変わらないが、騎士によつては長大な斧槍や両手持ちの大斧といった武装であることもある。

近年、騎士の中で特異な剣技を持つものが現れている。

サイジエント騎士団軍事顧問のラムダという人物が研鑽の末に鬼妖界シルターンのサムライが持つ『居合い』の術理を応用した強力な斬撃を完成させるに至った。

軍人

帝国軍における軍務及び警護任務に就く人々の名称。

騎士と違い求人への門戸は帝国内各都市の軍学校への入学という形で広く開かれているが、良家の子息になるほど上級仕官に就く可能性が高くなっている。

軍学校では戦闘技術・兵法・生存技術などのほかに召喚術も必修課程となっており、軍人ならば一般人よりも比較的高レベルの召喚がおこなえる。

陸軍・海軍などが存在するが、総兵員数・部隊規模・指揮系統などその全容は言及されていない。

とはいえ、小さな街道町にも駐在軍人を常駐させるなど、帝国各地で警察・治安維持活動を行っているのも軍人の業務となっている。

かつては女性軍人の数は極めて少数であったのだが、初の女性将軍であるアズリア・

レヴィノスの活躍から徐々にその数を増やしつつある。

帝国軍人の武装は他の国とは大幅に趣を異にしている。

騎士達のような重装の鎧の着用よりも、機動性に勝れた軽鎧の着用が標準的で、陣羽織のようなデザインの衣装で一目で軍人とわかるようになっていっている。

武器は騎士達と違ってバリエーションに富んでおり、標準的な片手剣や槍といった取り回しの良い物のほかに、格闘戦用の武器、投げナイフといったもので武装している軍人もいる。召喚術を専門とする士官は杖である事もある。

状況や用途に応じた確な装備で当たる柔軟性があるといえる。

海賊・盗賊・義賊及びそれに類する組織

海賊

海上及び港付近にて窃盗・強奪などを行う集団。また、それらとは異なり人跡未踏の海域や海上の遺跡などを探検する冒険家としての集団も海賊と呼ばれる。

三つの国家はどれも武装する大型船舶の民間所有を禁じており、例えば略奪行為を行わない類の海賊であっても処罰の対象となっている。

盗賊

荒野及び街道などにおいて窃盗・強奪などを行う集団。はぐれ召喚師などが所属する場合もある。全編に登場。

義賊

民衆の生活水準の向上などを大義名分として、非合法的な活動を行う集団。支配階級層に対してテロ活動を行うものもある。

「紅き手袋」

全容が謎に包まれた犯罪組織。窃盗・誘拐・強盗・暗殺など様々な非合法活動を多額の報酬と引き換えに請け負う。構成員の数や組織の重要メンバーの詳細は不明だが、どこから連れて来た子供を幼いうちから「教育」し、相応の能力と組織への恭順を教え込んだ者たちが多数実働要員として組み込まれている。また組織において一人前と認められた者には二つ名が与えられ、任務時のコードネームとしても用いられる（珊瑚の毒蛇や茨の君など）。名の由来は依頼を受ける組織の代理人がはめている暗殺対象者の返り血に染まったような真紅の手袋から。無色の派閥と協力関係にあるらしく、彼らの要請に応じて人員を貸し出すこともあるようだが、これも詳しいことは不明。

勿論非合法の犯罪組織であるのだが、実際に彼らを利用／依頼を行うのは有力者や貴族といった富裕層であることも忘れてはならない。

響界種（アロザイド）

異世界の者同士の間生まれの子は一般的に「響界種（アロザイド）」と呼ばれている。響界種は親の持つ能力を受け継いでおり、それと同等かそれ以上の力を有している。た

だし、その能力が覚醒するのは大人になってからであり、それまでは普通の子供と変わらない。これらには大きな危険も存在し、親の能力が余りに強力で、普通の人間と変わらぬ肉体を持つ響界種は己の魔力に肉体が耐えきれず破壊され死に至ることもある。親がどのような存在であるかによって「半魔」、「半精霊」などの名称がつく場合もある。リインバウムに大きく関わる伝説の人物

誓約者（リンカー）

四界すべての召喚術に精通し、誓約による束縛ではなく信頼によって召喚獣を使役する「召喚師を越えた究極の召喚師」。通常の召喚術は誓約によって強制的に召喚獣を従わせることで成り立っているが、誓約者が使う召喚術は召喚獣と心を通わせることで彼らの助力を得るものである。初代誓約者は「エルゴの王」と呼ばれ、エルゴ（界の意志）から強大な恩恵を受けるようになった。彼はその力を駆使し、リインバウムへ侵攻していた異界の住人の侵入を防ぐ結界を張り巡らせ平和をもたらした。

調律者（ロウラー）

「エルゴの王」出現以前に最強と謳われていた召喚師の家系、クレスメント家の尊称。その強大な魔力は「運命をも律する」と言われるほどで、召喚術、召喚獣に関するさまざまな研究を行っていたとされる。クレスメントの一族は離散し、その末裔たちの行方は定かではないとされる。

クレスメントはまだリインバウムに結界が施されていないなかった時代の召喚師であり、侵攻してくる悪魔たちと戦いを繰り返していった。

悪魔の侵攻を知りえた最大の理由はクレスメント一族がサプレスの悪魔王メルギトスのリインバウム侵略の助力としてリインバウム側から召喚の門を開く見返りに、より強力な魔力と一族の安泰を契約したことがきっかけである。

与えられた強大な魔力を元にメルギトスの召喚が目前に迫ったところで、罪深さと恐ろしさに耐えられなくなったクレスメント一族は門を封鎖し、結果的に騙されたことに怒り狂ったメルギトスが復讐を誓い、自力で門を開く前にその対応に迫られていたのである。

メルギトス襲来の警告を数世代に渡って行い、多数の召喚師やシルターンの鬼神・龍神やサプレスの天使達といった協力者と連携しこれを迎撃する事に何とかこぎつけていたが、決定的な切り札が存在せず、戦局は不透明だった。

クレスメントは悪魔たちに対抗するため、亡命してきた融機人の一族・ライル一族の協力の元、召喚獣をレイラルの技術で改造し、誓約とプログラムの二重の拘束で完全に自意識を失った召喚兵器「ゲイル」を生み出した。だがその代償に悪魔の侵攻を共に食い止めていた異界の住人の信頼を失い、彼らは自分の世界へと帰還してしまった。メルギトスとの決戦においてクレスメントは召喚兵器となった天使アルミネを暴走させ、

軍勢ごとメルギトスを封印することに成功した。だがその力を恐れた召喚師たちはクレスメントの力とライル一族の知識を封じ（実際にはメルギトスとの戦いの最中に魔力と知識を『血識』として奪われて無力化されてしまったため召喚師たちが手を下したわけではない）、その事後処理を行った召喚師たちが蒼の派閥の起源となった（全ての罪をクレスメント一族とライル一族に背負わせて追放し侵略を防いだという功績は抹消し、自分たちの手柄とした上でのことである）。

適格者

「共界線（クリプス）」を人為的に制御することで世界の全てを支配し、界の意思（エルゴ）に成り代わろうとするための制御機構の中核をなす人物を「核識」と呼ぶ。その「核識」の力と意思の断片を封印した、サモナイト鉱石から鍛えて作成された二振りの魔剣「碧の賢帝（シャルトス）」、「紅の暴君（キルスレス）」に、「核識」となりうる魂の資質と強い意志により選ばれ所持者となった人間を適格者と呼ぶ。

魔剣本来の意思の強さでその力を増す性質に加えて、共界線（クリプス）から強大な力を引き出し、それを行使することが出来るが、その代償として封印された「核識」の意識が使用者の精神を蝕んでいくという弊害がある。

後に、碧の賢帝は破壊された後に「果てしなき蒼（ウイスタリアス）」へと生まれ変わり、封印された「核識」の意識に代わり使用者の意志の強さで力が増すようになった。ま

た、「不滅の炎（フォイアルディア）」と呼ばれる同様の魔剣も登場している。物語終盤に主人公の手によって「紅の暴君」は半壊した。

適格者は遺跡から送られる強大な魔力によって心身を強化されており、四界の召喚術が行使できる魔力適性、高度な知識（現在では失伝した召喚術の秘儀など）、事実上不老に近い寿命、遺跡の全機能を制御する能力などを獲得しており、抜剣覚醒と呼ばれる状態になることでその全能力を発揮する。

抜剣者（セイバー）

「救い、切り開く者」の意。「果てしなき蒼」または「不滅の炎」の持ち主がこの名で呼ばれる。

伐剣者

「紅の暴君」の適格者の称号。物語の進行具合によっては「碧の賢帝」の適格者がこの称号で呼ばれることもあり得る。

伝説及び貴重なアイテム・存在・

魔剣

「碧の賢帝（シャルトス）」、「紅の暴君（キルスレス）」、「果てしなき蒼（ウイスタリアス）」、「不滅の炎（フォイアルディア）」の四本が存在する、もしくは存在すると推察される一種の宝剣。小説版では魔剣の修復を行ったウイゼルの手によって創られた「紫紺の蛇刀

（バルバリア）が登場している。

無色の派閥の始祖であるゼノビスの指示によって製造されたと言うこと以外はそのほとんどが謎に包まれている。かつては無色の派閥によって管理・封印されていたが、何者かによって持ち出されたらしい。

伝説のエルゴの王の所有した「至源の剣」の伝承を参考に製造された、高純度サモナイト石を加工した武器である。

本来は「封印の剣」と呼ばれたサモナイトソードであり、その目的は名の通り強力な力を持った存在を封印することである。この封印を行った対象の強大すぎる魔力と意識が剣の中に飽和してしまい、適格者と呼ばれる人物以外の手ではまともに扱えない代物になってしまっている。

同時に『碧の賢帝』『紅の暴君』は忘れられた島の遺跡の全機能を制御することも出来る。

サモナイトソードが本来持つ特質も備えており、持ち主の精神力や魔力によってその強度や切れ味を天井知らずで増強することが出来る。しかし、その反面所有者の精神状態が不安定な時は「なまくら刀にも劣る」性能しか出せず容易く破壊される危険性もある。

『碧の賢帝』『紅の暴君』はその内部に封印された忘れられた島の遺跡の意思・魔力と一

体化したことによって人知を越えた威力を得るに至っているが、遺跡の魔力や意識と同調できる人間（＝適格者）以外にはその力を引き出せなくなってしまうている。

しかも、遺跡の意思の正体とは憎しみと悲しみ、苦痛や怨念といった負の感情、それらをもたらずこの世の全てへの否定・破壊・支配衝動そのものであり、魔剣の力を引き出せば引き出すほどそれらに取り込まれてしまい、最終的には一体化してしまう。

『果てしなき蒼』は戦闘によって破壊された『碧の賢帝』を修復した剣で「神剣の匠」として伝説的に名高いウイゼル・カリバーンが鍛造したものだ。

『碧の賢帝』とは違い純粋に所有者の魔力・精神力を核にその能力を振るえる様になっており、遺跡の意志に介在されず『碧の賢帝』の全ての能力を引き出すことが出来る。遺跡から引き出した魔力に所有者の力を上乘せするためか元となった魔剣より強力である。『不滅の炎』は幻獣界に伝えられる聖なる炎の名が由来になっており、半壊した「紅の暴君」から新たに生まれた魔剣。外見は「紅き暴君」と大まかな形は同一であるが、細かい部分に差異がある。

サモンナイトソード

サモンナイト石を鍛えて製造された一種の宝剣。上記の魔剣と重複する部分も多いが詳細不明。

『I』に登場する剣はウイゼルの作品。破壊された碧の賢帝を修復する際にその構造を

見極めたといわれるので、この剣は魔剣の複製品である可能性が高い。

所有者にこれといった資格はなく、持ち主の身体能力や魔力を増強する能力を備えているが、その構造のベースとなった『碧の賢帝』と比べると大幅に性能は下である。

サモナイトソードには所有者の魔力や精神力を刃に伝道させ、その切れ味や刀身の強度を増強させる能力がある。元々は非力な召喚師であつても絶大な物理攻撃力を与えるために作られていた剣であるがその製法は失伝して久しい。

至源の剣（しげんのつるぎ）

小説版に登場する聖王家の人間が代々継承する宝剣。魔剣と同じくサモナイト石で出来た刀身を持つ。

至竜

高い知性と魔力を兼ね備え、「竜」へと「至」った存在。厳しい苦難や特別な儀式を経て、魂を磨き、高い生命力と魔力を獲得した者は、元の種族（人間、天使など）を問わず、自然にこの至竜へとその姿を変えらるという。ラインバウムやその異世界に伝わる伝説や物語に登場する竜の多くは、この至竜であると考えられている。一説によると、エルフは具現化した際に「魂殻（シエル）」と呼ばれる仮の肉体を得るが、その力を最も強く引き出せるのが「竜」の姿であるといわれる。

亜竜

「竜」に「至る」途中の段階を指す。龍人の一族も「亜竜」とされる。シルターンでは至竜と区別するために「竜」と「龍」という字を用いている。至竜には及ばないものの非常に優れた能力を持ち、それぞれの世界においても特別な存在としてその地位を確立している種族が多い。

墮竜

至竜に成りうる資質を持つにもかかわらず、魂の力が弱かったり儀式に失敗したりしたことで、至竜に成り損なったもの。世界に害悪をもたらす危険な存在とされている。

ゲイル

機界ロレイラルの技術によって肉体を改造され、機械兵器となった召喚獣。かつてラインバウムで最も強大な勢力を持っていた召喚師の一族が、ロレイラルから亡命してきたと言われる者たちから彼らの保護と引き換えにその技術を手に入れたことで、多くの召喚獣が一族によってゲイルに改造されたという。召喚兵器とも呼ばれる。

召喚獣鉄道

メイトルパの召喚獣に客車を繋ぎさせる形の移動手段。金の派閥の出資によって建設が進められているが、開通には至っていない。

融機強化兵（ゆうききょうかへい）

ゲイル計画を参考にして発足して行われていた強化兵計画。素体となる人間の肉体

をロレイラルの技術によって機械化し、さらに4つの世界の研究から得られた技術を投入することで、戦闘能力を強化、帝国の戦力として育成するのが目的。帝国の強化兵実験施設で研究が行われていた。研究は秘密裏に行われていたが、ある時何者かによって襲撃を受けたことでそれ以降は実験は滞っているらしい。その事故によって2名が生き残っている。

精霊

天使の系譜にも悪魔の系譜にも連ならない霊的存在の総称。

無限界廊

世界の狭間にあるという特別な空間。リンバウムを巡る4つの世界でさまざまな戦いを試練として受けることが出来る。

4つの世界に属した魔力が集う場所でしか無限界廊に入るための門を召喚出来ない。

悪魔王

霊界サプレスに存在する悪魔達の中で特に力の強い存在を指す。魔王とも言う。個体によって力の差が大きく、悪魔王達の中でも明確に強弱の差があるというが、リンバウムの存在にとつてはどれも危険極まりないことに違いはない。

一般の悪魔とは桁外れに強大であり、悪魔王の中には自力で異世界への門を開いて他の世界を侵略しようとする者が確認され、メイトルパやリンバウムのように悪魔に匹

敵するような強大な存在がいない世界に度々侵攻している。

最大の特徴は『源罪（カスラ）』というものを操ることが出来ることにある。これは視覚的には「黒い風」のように見えるが悪意の魔力そのものであり、これに触れた生物・無生物を問わず侵食し他者に害を及ぼすようになる。

浸食を受けたものは暗い欲望や憎悪を増幅させ、不和を呼び、争いを起こし、さらに多くの憎悪と飽くことのない欲望の連鎖を周囲に巻き起こすことになる。こうして起きた暗い感情や流された血はそのまま悪魔達の糧となり、その存在をより強大なものへと変貌させていく。

この『源罪』が一度巻き起こればリンバウムの中であっても事実上、悪魔は不滅の存在として永續できるのである。

かつて平和な楽園であったリンバウムが今日のように争いが絶えない世界になったのはこれによるものだといわれている。また、傀儡戦争の終盤において悪魔王メルギトスが源罪を放出したことが記録されており、多方面に甚大な被害を引き起こしている。

登場人物紹介（本編18話迄）

アウル・スペランツァ

性別：女

年齢：23

武器：何でも（主に徒手とナイフ）

今作の主人公

オラクルでの作戦中の事故によりリインバウムへと転移してしまった

忘れじの面影亭の雇われ店長であるフェアに引き取られて以来そこで居候をするこ
とになる

街から店への道の整備を行ったりフェアの仕事の半分ほど肩代わりすることで恩を
返している

い 戦闘に於いては一对一も対多数にも対応でき、雑兵が群がったところで意味を為さな
い

敵のリーダー格と一人で渡り合うことも可能

人の身にして屍の性質を宿し、呪いを使うことが可能

屍特有の膂力に加え不死身に近い再生能力を有するが、未練を消失した状態で致命傷を受けるか脳を潰されると死ぬ

元の世界へと戻ることを目的としているため召喚術を学びたいと思っているが理由があつて上手くいっていない様子

フェア

性別：女

年齢：15

武器：何でも（主に剣と槍）

原作主人公

宿場町トレイユの町外れにある宿屋兼食堂「忘れじの面影亭」の雇われ店長。父は双子の妹を連れてふらりと旅に出たまま行方が分からなくなつたらしく、彼を反面教師に普通で平穏な暮らしを望むようになり、よくその事を口にかけている。

妹想いの優しい面倒見の良い性格のだが、父であるケンタロウによつて一人取り残されたことから父を酷く嫌悪し（バカ親父と呼ぶこともしばしば）、同時に誰かを見捨てたり放置したりすることに強烈な抵抗を持つようにもなつた。育つた環境ゆえにしつかりしているように見えるが、母が恋しい時もある。

ミルリーフ（竜の子）

性別：女

年齢：0

武器：杖

流星として落ちてきた虹色の卵から生まれた竜の子。最初に卵を見つけたフェアを親だと思いついてしまう。人間体に変身でき、御使いたちが持つ先代の守護竜の遺産を継承することで成長していく。

ミルリーフはピンク色の竜の子で、フェアを「ママ」と呼んで甘える甘えん坊で泣き虫などところもある

リシエル・ブロンクス

性別：女

年齢：14

武器：杖

主人公の幼なじみ。町の名士でもある金の派閥の召喚師、テイラー・ブロンクスの娘でルシアンの姉。

性格は負けず嫌いで活動的。トラブルメーカーでもあり、よくフェアやルシアンを巻き込む。父と同じく機界の召喚師ではあるが、まだ派閥には属していない。父のことを「金儲けのことしか考えていない」と反発している。

ルシアン・ブロンクス

性別：男

年齢：13

武器：片手剣と盾

リシエルの弟でフェアの幼なじみ。真面目でおとなしい性格の少年で、行動的な姉のフォローをすることが多い。フェアに密かに想いを寄せている（フェア以外にはバレバレル）

姉とは違い召喚術の素質がなかったため、代わりに剣術を習っており軍学校に進学して立派な上級軍人になろうとしている。

しかし本人の優しすぎる気質や体格に優れていないことからあまり強くはなれていない

テイラー・ブロンクス

性別：男

年齢：分かんない（、ω、）…

武器：杖

金の派閥に所属している機界の召喚師で、リシエルとルシアンの父。フェアが店長を務める「宿屋・忘れじの面影亭」のオーナーでもある。

過去の出来事からフェアの父であるケンタロウを嫌っており、それゆえ彼の子供であるフェアにもやや辛く当たることがある。しかしフェアが宿屋の経営で良い結果を出した時は偏見にとらわれずに正當に評価し、それに見合った報酬を与えるなど、公平で誠実な一面もある。

ポムニツト

性別：女

年齢：分かんない（、ω、）：

武器：？

ブロンクス家に雇われているメイド。リシエルとルシアン^{ルシアン}の教育係で、リシエルの奔放な行動には手を焼いている。

他人の恋愛話にはかなりの興味を示し、すぐに首を突っ込んだりするところもある。

グラツド

性別：男

年齢：20代前半

武器：槍

宿場町トレイユに駐在する帝国軍陸戦隊の軍人。

気さくで面倒見が良い「気のいいあんちゃん」的な性格の持ち主で、フェアやブロンクス姉弟からは実の兄のように慕われている。ミントに惚れており、本人は隠しているつもりだが彼女を前にするとあからさまに動揺することも多いため、ミントを除く周囲の人々には完全にばれてしまっている模様。傀儡戦争に参加した経験がある。傀儡戦争で武勲を上げ帝国初の女将軍となったアズリア・レヴィノスに憧れており、彼女が指揮する部隊「紫電」に入隊することが夢。フェアと同年代の妹がいるらしい。

ミント・ジュレツプ

性別：女

年齢：20代前半

武器：杖

町外れの一軒家で暮らしている蒼の派閥の幻獣界の召喚師。

おっとりとした性格で、フェアやブロンクス姉弟のお姉さんの存在。ミモザ・ロランジュの後輩にあたる。第二作の主人公やネスティの先輩でもあり、お互い面識がある。

主な研究分野は異界の植物。研究の一端として自宅の菜園で野菜を栽培しており、フェアが経営する宿屋やセクターの私塾にそれらを卸している。

セクター

性別：男

年齢：分かんない（，ω，）…
武器：？

フェアやブロンクス姉弟が通っていた私塾の先生。足が不自由らしく、日常生活に支障をきたしている。

退役軍人で、怪我はその頃に負ったもの

リビエル

性別：女

年齢：分かんない（，ω，）…

武器：杖

霊界サプレス出身の天使。語尾に「ですわ」を付けるなどのお嬢様口調で喋る。

知識の天使を自称するが、まだまだ見習い。理屈っぽくうんちくを語るのが好きで、比喩を用いた皮肉をよく言う。見た目は少女だが、かなりの年月を生きているらしい。プリンなどの甘いものに目がない。

セイロン

性別：男

年齢：分かんない（，ω，）…

武器：拳

鬼妖界シルターンから来た龍人族の青年。ストラ（気功のようなもの）と格闘術の使い手で、蹴り技は大岩をも砕くほどの威力を持つ。

高貴な出自ゆえに尊大な態度をとることがあるが、本来は義理人情に厚い熱血漢。責任感も強く、御使いとしての使命に縛られた言動を取ることもあるが、基本的には気さくで親しみやすい青年である。意外と常識人でもありリビエルやアロエリを窘める時も多い。薬や料理の知識も豊富で、中でもシルターン独自の漢方を用いた薬膳料理が得意。

アロエリ

性別：女

年齢：20代前半

武器：弓

幻獣界メイトルパの有翼の亜人・セルフアン族の女戦士。インディアンを思わせる姿をした弓使い。

「戦士として生きると決めた時から女である事を捨てた」と本人は語り、男っぽい性格で一人称は「オレ」だが、本来は「私」であり言葉遣いも女性らしい喋り方。口調については兄であるクラウレの言い付けらしい。生真面目であるゆえに思い込みが激しく、自他共に厳しい。自分たちの祖先の過去から、フェアをはじめとした人間たちを嫌ってお

り、時には周囲とぶつかりあう事もあるが、根は優しい。またフェアたちと触れ合うた
びに精神的にも成長していく。

本編

第一話 プロローグ

「ん……？」

微かに差し込む朝日に意識が覚醒していくのを感じる

真つ白いシーツの敷かれたベッドから身を起こすと軽く伸びをする

カーテンを開け、たつぷりと朝日を浴びることで完全に目を覚ました

朝の支度をするため私は部屋を出て階段を降り、洗面所で顔を洗いに行く

着替えるため部屋へ戻ろうと洗面所を出ると、一人の少女と鉢合わせた

「おはよう、アウルさん。相変わらず朝早いね」

「おはようございませす。貴女も早いではないですか」

「私はまあ…慣れっこだからね」

少し憂いを帯びた顔をしながら少女はそう言った

彼女の名前はフェア

忘れじの面影亭という宿屋兼食事処を一人で切り盛りしている15歳の少女だ

私は現在この宿屋で厄介になっている

「私は着替えてきますね」

「うん、終わったら玄関に来てね。待つてるから」

「ええ、なるべく急ぎます」

私は自分に宛がわれた部屋へと戻りながら今の境遇について考える

今私がいるのは地球でもなければオラクルにある惑星のどれでもない

ここはリインバウムという世界で、地球やオラクルとはまた別の宇宙であるようだ

なぜ私がこんなところにいるのか、それはアークスとして従事したとある作戦中に起きた事故による

火継の持つ具現武装「天叢雲」の能力を分析し、深遠なる闇を完全に消し去る算段のついたアークスは二人の守護輝士と私の三人で作戦を決行した

守護輝士の二人がフォトンを扱い深遠なる闇からDF【仮面】を切り離し救う

その前後で守護輝士に降りかかる火の粉を払い、切り離された深遠なる闇を二人と協力して消し去るのが私の役目だ

作戦は順調に進み、消耗した深遠なる闇から【仮面】を切り離そうと守護輝士の二人がフォトンを送り込んでいる最中に予想外のことが起こった

二人が送り込んでいるフォトンが強力な力により弾かれ、深遠なる闇が時空干渉を行い空間ごとどこかへ転移しようとしたのだ

その際深遠なる闇が守護輝士のマトイに襲い掛かったのを同じく守護輝士のミシャーが助けるが、その代わりに深遠なる闇に捕まってしまった

そして私がミシャーを助けようと跳躍し、彼女を捕まえた腕に攻撃をしようとした瞬間に空間転移が発動

私と、そしておそろくミシャーはその転移に巻き込まれて何処かへ飛ばされてしまった

私はここリンbaumに飛ばされたが、どうやらミシャーはまた違う場所へと飛ばされたのか近くにはいなかった

リンbaumへとたどり着いた私は中空に投げ出されており、そのまま落下して受け身も取れずに地面に激突してしまった

強引な転移による影響なのか平衡感覚が失われ、身体を自由に動かすことがままならなかったせいだ

流石に気を失ってしまった私は近くにあった宿屋、忘れじの面影亭の店長であるフェアによって発見されて保護された

そしてフェアと、その幼馴染のリシエルとルシアンという姉弟に事情を説明したところ召喚事故だろうと言われた

リンbaumでは隣接する四つの異世界から異形の者を召喚し、使役する術が広く流

布されている

しかし私はその四つの異世界の何処にも属さない「名もなき世界」と呼ばれる場所から召喚されたというのだ

名もなき世界は研究が進んでおらず、ほとんど何も分かっていないせいで事故によって召喚された者は元の世界へ還ることが出来ないようだ

つまり私は元の世界へ還れず、ここリインバウムで生きる他はないとのこと

それでも私は諦めなかった

諦められるはずがなかった

せっかく妹と再会も出来てこれからも地球を守っていこうという矢先にこんなことがあったのだ

何が何でも還るつもりでいる

部屋へと戻り着替えた私はフェアの待つ玄関へと向かった

「お待たせしました」

「全然待つてないよ、じゃあいこっか」

そうして私達は出発した

しようとした、のだが

「おーいっ！おっきろー！！」

外からやかましい声が聞こえてきた

私達がまだ部屋に居ると思つての大声なのか、玄関にいる私達には耳が痛いほどのうるさい

「起きろ起きろーっ！フェア！アウル！朝だぞおーーー！！」

この大声はフェアの幼馴染のリシエルのものだ

とすれば弟のルシアンもいるだろう

二人はこの忘れじの面影亭のある町、トレイユで一番の名家であり実質的な取締役である召喚士ブロンクス家の姉弟だ

ルシアンが宥めようとしているが大して効果はなく、リシエルはさらに騒ぎ立てようとする

このまま放っておくわけにもいかなないので私達は玄関を出た

「あら、二人とも起きてたんなら返事しなさいよね」

「あんまりにもうるさいからげんなりして返事する気にもならなかつたのよ…」

「おはようございます、アウルさん。朝から姉さんがすいません」

「おはようございます。貴方の責任ではありませんし、気にしなくていいですよ」

私達はそれぞれ思い思いに挨拶をした

「さ、せつかく早くに起きたんだからさっさと仕入れに行っちゃいませよ」

「そうね、そうしましょうか」

フェアの言葉を切つ掛けに私達は出発した

私達がこんなにも朝早く家を出るのはとある家に野菜をもらいにいく為だ

ブロンクスの二人は子供ながら働くフェアを手伝う為に家を抜け出してまで来ているようだ

：まあその後に出されるフェアの朝ご飯を食べることも目的なのだろうが

私はフェアの家に居候している以上何もしないわけにもいかず、こうして手伝っている

話の花を咲かせながら私達は目的に向けて歩いてく

そうしながらも私は頭の中では元の世界に戻る方法を模索している

彼女達とのんびり過ごすのも悪くはないのだがやはり私にはやるべきこともあるし戻りたい

そんなことを考えながら歩いている私はこの後とんでもない事件に巻き込まれることになるとは露とも知らなかったのである

第二話 日常①

店から出た私達は坂道を下り、溜池へと着いた

とても澄んでいてきれいな水が溜まっており、街の人々の生活用水となっている

住民の憩いの場ともなっているが、朝日が昇ったばかりのこの時間では人の姿は殆ど見られない

軽く談笑しながら歩いていると向こうから青年が歩いてきた

「いよう、悪ガキども！今日も三人お揃いだな。アウルさんもご一緒でしたか」

彼の名前はグラッド

この街の駐在兵士で帝国軍人らしい

帝国と言うのはここリインバウムにある国の一つだ

他には聖王国と旧王国の二つがあるらしいが旧王国は傀儡戦争と呼ばれる戦争によつて実質的な壊滅状態にあるようだ

そして帝国軍人は帝国の有する軍勢力であり、陸軍と海軍に分かれている

剣や槍を手に戦う者だけではなく、召喚術を専門とする者達もいる

グラッドは細身だが、陸軍所属の槍を専門とする肉体派だ

今はこの街の駐在兵士として警察のようなことをしている

「悪ガキだなんて酷い言い様じゃないの、グラッド兄ちゃん」

「この街で起こる事件の大半はお前から絡みなんだぞ？その度に駆り出される俺の身にもなってくれよ」

「あ、あれはリシエルが勝手に……！」

「連帯責任だ」

「う……っ」

どうやらこのトレイユは平和な街のようだがそれでも事件は起こるらしい

しかしそれがこの三人の起こす悪戯のようなもので大半を占めるといふのだから世話がない

「ははは……グラッドさんは朝の見回りですか？」

「ええ、そうですね。アウルさんはフェアの手伝いですか？」

「はい、行き倒れてた私を介抱してくれた上に居候させて貰っていますからね。何もしないわけにはいきませんよ」

「それは……そうですね。しかしアウルさんも大変ですよね、旅の途中で行き倒れた上に記憶までないとは……」

そう、私はフェア、リシエル、ルシアンの三人以外には自身の出自に関してのことを

話していない

何故なら名もなき世界からの召喚獣は貴重な研究対象であり、心無い召喚士達にそれが知られれば捕らえられ研究されるのが目に見えているからだ

その為他の人には旅人であり、旅の途中で行き倒れていてそこをフェアに拾われた、ということにしている

記憶に関しては過去を詮索されないようにする為の詭弁だ

カバーストリーを用意しても良いのだが単純に面倒なのと余程作り込まないと矛盾が生じてそこからバレてしまう危険性がある

「にしてもグラッドさんも大変よねえ、毎朝毎朝飽きもせずこうして見回りしなきゃいけないなんて」

「一日三回の見回りは駐在兵士の日課だからな！それにこうして見回ることによって平和が保たれるんなら良いことじゃないか」

「そうよ、リシエル。人生平和が一番！こつこつと真つ当に生きる、これに尽きるよ」

「こだわりだもんねえ、フェアさんの」

「分かってないわね、乙女には刺激が必要なのよ。じゃないとすぐに枯れちゃっておばさんになっちゃうわ！」

「だからって毎度毎度事件を起こすのは勘弁してくれよ…いつも謝ってばかりのポム

ニットさんが可哀想だろ」

「うう…」

リシエルは言葉に詰まった

ポムニットとはブロンクス家のメイドでリシエルとルシアンとの教育係でもある

そのせいか何か事件を起こす度に方々に頭を下げて回っているらしい

確かに不憫である

「うううう…もう知らないっ！行くわよ、フェア!!」

「わ、ちよつと…腕を引っ張らないでよおー!」

リシエルはフェアの腕を引いて先にずかずかと歩いて行ってしまった

後に残された私とルシアンは苦笑いを浮かべるしかなかった

「うはあ…怒らせちゃったか」

「すいません、グラッドさん。姉さんも分かってるんですけど…」

「ははは…良いさ、あの年頃の女の子は何かと難しいもんだ。俺の妹も同じくらいだから分かるさ」

「ですがいつまでもあのままというわけにも…」

「まあそうですね…」

「おーい！置いてくわよー!!」

「ほら、呼んでるし行つてやりな！アウルさん、あいつらをよろしくお願いします」
「ええ、任せてください」

そう言つて私達はフエアトリシエルの後を追つた

二人と合流した私達はそのまま目的地である家に向かつた
ちよつとした坂を登るとそこにはとある一軒家がある

その家には立派な菜園があり、様々な野菜が育てられている

蒼の派閥という組織に属している召喚士であるミント・ジュレップの家だ

蒼の派閥というのは召喚士で構成された組織であり、最も大きな組織の一つでもある
召喚術を研究し、世の中の真理を解き明かすことを目的に活動している組織だ

そしてミントは異世界の野菜を研究しており、フエアはその研究成果である新鮮な野菜を貰つて食堂で使っている

私とブロンクス姉弟はその野菜を運ぶ手伝いをするのだ

「おはよう、ミントお姉ちゃん！今日の分の野菜もらいに来たよ」

「おはよう、三人とも。アウルさんもおはようございます」

「おはようございます」

「へへへ、オヤカタもおつはよー♪」

「ムイツー！」

『オヤカタ』というのはミントの召喚した護衛獣で『テテ』という種類の小型の幻獣だ
庭の警邏をしていて『ムイ』と鳴く

ミントはオヤカタと完全に意思疎通をすることが出来るがこれは召喚術に通訳の術
のようなものが組み込まれている為である

それもそのはず、召喚しても意思疎通が出来なければ何の指示もすることが出来ない
ので意味がない

フエアヤリシエル、ルシアンもオヤカタと軽い意思疎通が出来るがこれは長年の触れ
合いの賜物らしい

ちなみに護衛獣とは文字通り護衛をする為に召喚された召喚獣で、召喚主に付き添い
その周辺の警護をするのが本来の目的である

「お野菜はいつものところに置いてるからね」

「はい、行きましょアウルさん」

「ええ」

私達は家の裏側に回り、そこで冷やしてある野菜を持ってきた野菜籠に入れていく

私はかなり大きな籠三つに野菜を傷付かないように詰めていくと一つを頭に乗せ、残
りの二つを両手に一つずつ持った

「相変わらず…なんていうか、圧巻よね」

「うん、そうだね…力もそうだけどバランス感覚がすごいよね」

「あれは私にも真似出来ないしね」

三人はそれを見て苦笑しながら好き勝手なことを言う

初めて見た時は開いた口が塞がらないという状態になっていた

ミントなんて「へ???」という顔になって暫く放心していて少し面白かった

「うーん、今日の分は特に美味しそうね!」

籠に詰めた野菜の一つを手に取り、フエアが言う

その顔は笑顔だ

「でしよでしょ? 自分でも大成功かもって思ってたんだ」

そう返すミントの顔も笑顔で嬉しそうなのが伝わってくる

「今回は何を変えたの?」

「うーん、特に何かを変えたってわけじゃなくて土を研究した成果が出てきたって感じ

かなあ」

その会話を聞いていたルシアンが口を開く

「ミントさんってほんとに土いじりが好きだよね」

「そりゃそうでしょ、だってそれが仕事なんだから」

リシエルがそう返すがミントがやんわりと否定とも肯定ともつかないことをいう

「仕事半分、趣味半分ってどこかしらねえ。好きだからこそ続けられるって部分はあるかも」

「なるほど…」

「あーあ、同じ召喚士なのにあたしのパパとは全然違うんだもんなあ。口を開けばお金だ利益だって…ほんつとサイテー！」

「まあまあ…リシエルちゃんのお父さんが属しているのは金の派閥、お金を稼ぐことが目的だから仕方がないよ」

金の派閥はミントの言った通り金銭を稼ぐことを目的とした召喚士の組織で、蒼の派閥と同じく最も大きな組織の一つである

いくなれば蒼の派閥は研究機関であり、金の派閥は企業だ

「あたしはキライだもん、お金の計算ばつかしててさ…離れて暮らしてるママのことなんてこれっぽっちも考えてないし…」

「リシエルちゃん…」

リシエルは暗い声で俯き、そう言った

それに対してミントはなんと声をかけていいのか分からず名前を呼ぶことしか出来ない
ない

リシエルは天真爛漫でお転婆な性格をしているが寂しさは感じているのだろう

そのせいか教育係のポムニットに母親の姿を少しだけ重ねて過度に甘えているのか
もしれない

「みんなー、なにやってるのー？帰るよー！ー！」

少し話し込み過ぎたのかその場を少し離れていたフェアから声がかかる

朝の仕込みもあるしこれ以上長居するのも良くないだろう

朝ご飯もまだなのでお腹も空いている

「もうっ！分かってるわよー！」

「さようなら、ミントさん。オヤカタもまたね」

「ムイムイ」

「では、私も失礼しますね。お野菜、いつもありがとうございます」

「いえいえ♪宿のお仕事頑張ってくださいね？」

「ええ、頑張ります！少しでも彼女の負担を軽くしてあげたいですしね」

軽く会釈して来た道を戻る

もちろん頭に乗せた籠も、その中身も落とさない

いつもより多く時間を喰ってしまったこともあり、私達は少し急ぎ足で宿屋へと戻つ
た

店に戻った私は貰ってきた野菜の入った籠をフェアに任せると、店内の掃除を始めた床、机、椅子、窓などなど様々な個所を綺麗にしていく

ルシアンは観葉植物の植わっている鉢植えや小さいながらも綺麗な花を咲かせている花瓶の手入れを丁寧にしていく

フェアは貰ってきた野菜を種類毎に分けて水場で冷やしておくとそのまま朝ご飯の準備をテキパキと進める

リシエルは……リシエルは椅子にどっかりと座りテーブルを叩いて朝ご飯の催促をしている

手伝いに来たのではないのだろうか？

「ねえ〜ご飯はやく〜!」

「はいはい、もうちよつとで出来るから待っててねー」

「もう待てない〜お腹ペコペコで死にそう〜」

「はい、お待たせ!二人も出来たよー!」

「待ってましたっ!」

「わあ、美味しそうだなあ!」

「ほら、アウルさんも早く座って座って!」

「はいはい、今行きますよ。私も正直フェアの料理は他の何を後回しにしても食べた

いのですからね」

「ちよつと、それは言い過ぎだよ…」

フェアは顔を少し赤くして照れている

しかし私の言ったことは言い過ぎでも冗談でもない

フェアの作る料理は今まで食べたどんなものよりも段違いに美味しく、彼女の料理の虜になっていると言つても良かった

こういうのを胃袋を掴まれると言うのだったか

皆が席に着くと、手を合わせて食前の挨拶をする

こういう風習は私のいた世界と似たものが多く、馴染むのに苦はなかった

「いただきます！」

今日の朝食はクロワッサン（自家製）、目玉焼き、野菜スープだ

パンを個人で作るのは凄く大変だし専用の機械もないこの世界ではその苦労はさらに増すにも関わらず、その出来は素晴らしいの一言でサクサクとふわふわが見事に調和を取っていて美味しいどころか噛んでいて楽しいとすら思える

目玉焼きは絶妙な焼き加減で白身は存在感がありつつ、主張が強すぎない

黄身は固焼きよりの半熟で、しっかりとした食感とトロリとした食感が共存している
そして目玉焼きと言えば塩か醤油か、などの議論があるがここではそんなことはまず

起きない

何故ならフェア特製のソースがかかっており、これこそが完成された目玉焼きにかけるべきものであると言わざるを得ないほど合っているのだ

野菜スープもこれまた絶品でスープを一口飲めば優しい味わいが口中に広がり、野菜はシャキシャキとした食感を残しつつ柔らかくなっておりとても食べやすい

今でこそ安定した生活が出来るが：幼い頃から極限状態で生き続け、酷い時は虫や木の根すらも食糧とせざるを得なかった私はこのフェアの料理に惚れ込んでしまっている

そのせいか私は一度フェアの料理を食べ始めると夢中になってしまい黙々と食べ続けてしまう

「相変わらず凄い食べっぷりよねー。こっちの声も聞こえないくらい夢中になっちゃってまあ」

「フェアさんの料理とっても美味しいもんねえ。街の人達もワザワザここまで食べに来るくらいだし」

「もうっ、やめてよ。でもアウルさんの食べてる姿って見て嬉しくなるから私も作り甲斐があるよ」

褒められたフェアは照れつつ満更でない様子だ

それから完全に完食した私は皆の分の食器等の後片付けを引き受ける

これも毎朝の恒例行事のようなものだ

そのまま仕事の準備はしつつもゆったりとした朝の時間を過ごしたのだが：

それはバタバタという足音と共に破られるのだった

第三話 日常②

「見つけましたわよ!!」

扉を勢い良く開けて開口一番大きな声で怒鳴りながら、女性が入ってきた

アウルと同じ紫の長髪に紅い両目をしておりメイド服を着込んだ彼女はブロンクス家のメイド、ポムニットだった

「げっ…ポムニット……」

その姿を認めたリシエルがゲンナリした様子で呟く

リシエル自身はポムニットのが好きだし容赦なく甘えていたりするが、今この状況では会いたくはなかった

何故なら今ポムニットは怒っており、こういう時の彼女は口うるさくて敵わないからだ

「お二人共、朝早くから御屋敷を抜け出しただけでは飽き足らず他所様で朝ご飯を頂いちやうとは何事ですか!? 特にお嬢様! 貴女はいずれブロンクス家の家督を継ぎ当主となられる御方です、その自覚を持って日々を過ごすべきであり——」

そのまま長々と説教をしようとするポムニットを見てリシエルは明らかに嫌な顔を

しているしルシアンも困り顔だ

しかしその説教は長くは続かなかつた

「ですからじでっ——げほっこほっ……」

…噎せたのだ

「もう、慣れないことするから…はい、お水」

そう言つてフェアが背中を擦りながらコップに入つた水を渡す

それを受け取つたポムニットは両手でコップを持ち、こんな状況にも関わらず上品に水を飲んだ

流石というべきなのだろうか

「はあく…ありがとうございます、生き返りましたあ…」

そうお礼を言つてコップを返した

その顔は穏やかなもので苦しさが消えたことを表していた、のだが

「じゃなくつて!!」

先程とは一変して顔を顰めると今度はフェアに対して苦言を言い始めた

「フェアさん、貴女もどうして甘やかしてしまふのですか!」

「え、わたし!?!」

「そうです、貴女から言つていただければお嬢様もお坊ちやまも聞いて下さりますのに

…このままだとまた旦那様に叱られてしまいます……」

ポムニツトの目には涙が溜まっている

彼女も自らの責務と我が子のように面倒を見てきた二人を甘えさせたい気持ちで板挟みになっていて辛いのだろう

その様子を見かねたフェアがリシエルの方を向いた

「ねえ、リシエル？」

「…分かったわよ。戻れば良いんでしょ戻れば」

その言葉を聞いたポムニツトは少し顔が明るくなり

「そうですそうです、今ならまだ旦那様には内緒に——」

「私に隠し事とはどういう見だ、ポムニツト!!」

高圧的な声が響き、ポムニツトの顔はまた暗くなってしまうた

現れたのはテイラー・ブロンクス

ブロンクス家の現当主であり、リシエルとルシアン父親だ

因みに忘れじの面影亭のオーナーで、フェアの雇い主兼保護者だ

「だ、旦那様……」

「お前には後でたっぷり説教をしてやる。今はそれよりも——」

テイラーはフェアに向き直ると顔を顰めた

「フェア、貴様何様のつまりだ？雇われ店長の分際でうちの娘らに仕事を手伝わせるとは」

「それは違うわ！」

「そうだよ、父さん！僕達が自分から手伝うってー」

「お前達は黙ってなさい！！」

リシエルとルシアンが反論するが、テイラーの一声により退けられる

「私は今こやつのお店長としての心構えを問うておるのだ。フェアよ、貴様と私の娘達が幼馴染みなのは不本意ながらも認めよう。しかし、貴様に店を任せる時に私は言っただけだ。大人として毅然とした態度を持つようと。そして貴様もそれを了承したかどうか」

「……すいません」

「なんだその態度は。なにか不満があるのか？」

「ありません」

「…ふんつ、都合の悪いことを言われるとすぐ反抗的な態度を取るのとは父親と同じだな」

「一緒にしないで！」

「…っ」

父親のことを言われた瞬間、フェアが激昂した

その怒気にテイラーも少し気圧される

「あんな連絡も超越さない無責任な奴とは違う！」

「…まあよかろう。そこまで言うなら働きによって証明してみせるのだ。帰るぞ、リシエル、ルシアン」

そう言うのとテイラーは店を出ていった

慌ててポムニットが後続く

「フエア…」

「ほら、行きなよ。また怒られちゃうよ？」

「ごめん…」

「いいの、気にしないで。リシエルは何も悪くないんだから」

「うん…」

暗い顔をしたリシエルをフエアが慰めるが、その表情が晴れることはなかった

フエアに嫌な思いをさせてしまった原因が自分にもあると思ひ、責任を感じているのだろう

しかしリシエルのことだ、少しすれば元気になってまた来るに違いない

「はあ…」

「お疲れ様です、フエア」

「うん、ありがと……」

机に突つ伏して溜息を吐くフェアは疲れただけではなく、軽い自己嫌悪の情も含まれているように感じる

おそらく父親のことを言われた途端冷静さを失った自分を恥じているのだろう

落ち着きのある大人になりたい、いやならなければならぬ彼女にとって先程の激昂は恥ずべきものなのだ

テイラーとのあのやり取りは私も何度か見ている、最初はテイラーのあまりの言い草に苦言を呈したのだがフェアによつて止められてしまつて以来はしないようにしている

ここまでフェアに影響を与えている父親……ケンタロウ氏はクズ野郎として各地で有名である

冒険者をしており、バカみたいに強い戦闘能力を以て様々な事件や紛争に介入して滅茶苦茶にしてきたらしい

それもアフターケア等を行うことは一切なかったため、場合によつては相当恨まれて
いる

そんな彼には子供が二人いる

一人はフェア、そしてもう一人がフェアの妹のエリカだ

妹のエリカは身体が弱い上に謎の病に冒されており、そのままでは死ぬことは明らかだった

だからケンタロウ氏はエリカの病を治す方法を見つける為に妹を連れて旅に出た

ここまでは良い、自分の娘を助けたいと思ひ行動に移すのは当然のことであるし何の問題もありはしない

問題なのは何故かその時にフェアを連れて行かなかったことだ

そのせいでフェアは5歳にしてこの広い家にたった一人で残されることとなり、とても寂しい思いをすることになった

普通に考えれば妹の病気の治療の為に姉を残したまま旅に出る、なんてことは有り得ないだろう

ここは異世界だから私の常識が全て通じる訳では無いが、この感覚はこの世界でも同じようである彼の行動を理解出来る者はいないらしい

そしてフェアはケンタロウ氏と交流のあったテイラーによって「一応」保護されるところとなった

しかしテイラーもケンタロウ氏によって多大に迷惑を掛けられたらしく、フェアへの態度は厳しいものがあつた

更にはケンタロウ氏によって不利益を被った者による報復が多々あつたのだ

ケンタロウ氏への恨みを本人ではなくその娘に返すなど許されることではない上にそんなことをしたところで意味は無い

だがそんなことを省みることが出来ないほどに憤慨しているのだ、ケンタロウ氏の被害者は

テイラーの介入とフェアの戦闘能力によって大事には至らなかつたようだがフェアの心への負担は凄まじいものがあつただろう

フェアはケンタロウ氏の血を濃く受け継いでいる上にケンタロウ氏によって物心着く前から戦い方を叩き込まれていたため既にある程度完成された強さを持っている

その修行も常軌を逸しており：例えば幼いフェアを滝の前まで連れて行くと剣を抜いた

そのまま離れた位置から剣を振るって滝をぶつた斬つたあと

「さあ、お前もやってみろ」

と言つてやらせたり：話に聞く限り滅茶苦茶にも程がある

私もやろうと思えばやれると思うが、剣を振るうのに慣れてきたばかり、それも4歳児にそんなこと出来るわけがないだろう

普通なら剣を振るえるようになれば次はその速度、正確性、持続性の強化を行う

それから技を教えて磨き、駆け引きを教えていくものだ

いきなり滝割りをやらせるなど…はつきり言つて修行を異常に急ぎすぎているとしか思えない

まるで教えられる時間がもうないことを分かつていたような…いや、考えたところでどうしようもない

結果としてフェアは幼い頃から一人で生きるしかなくなりそのせいで多大なストレスに晒され、彼女が無理にでも大人びようとしなければならぬ状況になったのに違ひはない

ケンタロウ氏に直接会つたことはないし、言葉も交わしていないので実際にどんな人物か断定することは出来ないが話に聞く全ての事柄が悪口でしかないのだ

マトモな人物ではないと判断するには十分過ぎる

「はあ…落ち込んでても仕方ないか。開店の準備をしよう、アウルさん！」
「…そうですね。では私は外の整備へ向かいますね」

「うん、お願いね」

そう言つてフェアは立ち上がり、厨房へと入っていく

私は外に出て店までの道の整備を始めた

はつきり言つてこの店は立地が恐ろしく悪い

ここトレイユは山に沿うように開発されておりその影響か坂道が多めだ

そして忘れじの面影亭があるのはそんなトレイユの中でも一番高所に位置しており、訪れる為にはそこそこ長い坂道を登らなくてはならない

街の入口や中心は栄えていて宿や飲食店も豊富にあるためわざわざここまで登ろうとは思わないだろう

それにも関わらずこの店が一定の収入を得ており、黒字の結果を出しているのは偏にフエアの料理が美味しすぎるのが原因である

しかしそれでもこの坂道は客の気持ちを店から遠ざけるのに十分だ

そこで私は毎日少しずつではあるがこの坂道の整備を行っている

許可はテイラーから貰った

一人でするしかないため作業の進捗は順調とは言えないが、それでも効果は出ているらしく客足が徐々に増えてきたとフエアは笑顔で言ってくれた

…疲れた笑顔ではあつたが

つと、そんな事を考えている時間はない

暫くすれば開店時刻となりそうなると店は客で溢れかえり、私もホール兼デシヤップ兼バツシング兼ラウンド兼三番チエツカーとして働かなければならない

フエアは厨房に籠ってひたすら料理を作り続けるが私が来る前はこれらの仕事も一

人でこなしていたとのこと

大変なんていうレベルではない

ともかく時間もない私はせつせと道の整備に取り掛かるのだった

第四話 日常③

開店と同時に客が入りだし、そこからはラツシユの如く客が来て恐ろしく忙しい

なんせ何時間にも渡つて客が全く途絶えることなく満席を維持し続けるのだ

それをフェアは一人で料理を作らなければならないし、私は私でそれらの客の注文、片付け、清掃などをやり続ける

どれくらい忙しいかと言うとマトモに昼食を食べることが出来ないくらいだ

朝にしつかりとしたものを食べるのはその為でもある

そして15時頃になってやつと客の姿が見えなくなり、ちよつとした軽食を食べることが出来る

ここであつたり食べたいところだがそうすると夜に響くから軽めにするとのことだ
という訳で私達は遅めの昼食を摂つているところだ

「お疲れ様、アウルさん」

「お疲れ様です。いつもながら凄くお客さんが来ますね」

「うん、大変だけど嬉しい限りだよ。お陰でなんとかやっていけてるしね」

なんとも逞しいものである

しかし昼を過ぎると客は殆ど来なくなる

夕食を外で食べることはあまりないそうだ

その為ここからはゆっくり出来る

すると食べ終わったフェアが立ち上がり、軽くストレッチを始めた

恐らくは、「アレ」だろう

「食器は私が片付けておきますね」

「え、いいの？」

「ええ、アレをやるのでしよう？早くしたくて身体が疼いてるのが分かりますよ」

「うっ…じゃあお願いしてもいいかな？」

「ええ、任せてください」

「ありがとう！じゃあ行ってくるね」

そう言ってフェアは裏庭へと走っていった

アレ、というのは稽古のことだ

フェアはケンタロウ氏から戦闘を叩き込まれたせいか今でも鍛錬を続けている

彼女曰く、習慣付いてしまつてやらないと調子が悪くなるとのこと

二人分の食器を片付けた私は店番をしつつこれから先どうするかを考えていた

これから先のこと…つまりは如何にして元の世界へ還るかだ

私がかこへ来たのは間違いなく深遠なる闇の時空干渉に巻き込まれたことによる

しかしこちらの世界では召喚術というもので呼ばれたという

となれば召喚術に熟知することが出来れば元の世界へ還るヒントが見つかるかもしれない

しかし今のところそれは叶わない

何故か

それを説明するにはまず召喚術について説明する必要がある

召喚術とはリインバウムを取り巻く五つの異世界から異形の者を呼び出す術

その五つの異世界はそれぞれ「機界ロレイラル」「鬼妖界シルターン」「霊界サプレス」

「幻獣界メイトルパ」と呼ばれる

召喚術を用いる者を「召喚士」、呼び出された者は無生物だろうと人間だろうと「召喚獣」と呼称する

召喚の基本原理は「サモナイト石」と呼ばれる特殊な鉱石にマナと呼ばれる力を注ぎ込むことで異世界との通路を開き、召喚対象の「真の名」を唱えて「誓約」によってリインバウムに呼び出すという二つの段階に別れる

このサモナイト石は地下を流れるマグマに含まれるマナが長い時間をかけて結晶化したものである

一度召喚に使われたサモナイト石には召喚された存在の真の名、又は紋章が刻まれておりその存在をサモナイト石が壊れる、召喚対象の死亡又は消滅、あとは滅多にないことだが誓約の解除がなされない限りは何度でも呼び出すことが可能だ

召喚術の術式には召喚対象と意思疎通を可能にするためにリンバウムの言語を会話可能にするものも含まれている

しかしこれはあくまで自動翻訳のようなものであるため、召喚対象はリンバウムの文字の読み書きは出来ない

ただ異なる世界から召喚された者同士の意味疎通は可能だ

次に五つの異世界のことだ

ロレイラルは機械兵士や機械人形、又は工専用重機のようなものや大量破壊兵器のようなものまでありそれら呼び出すことが出来る

シルターンは古の日本のような世界で、鬼や妖怪に人間が存在しておりそれらの召喚が可能

サプレスは精神世界でありそこに住む住人は実態を持たない

リンバウムに呼び出された際はマナによって肉体を形成する

そしてそこから呼び出されるのは幽霊、天使、悪魔といった者達である
件の傀儡戦争もここから来た悪魔王によって引き起こされたものらしい

メイトルパは様々な幻獣や妖精、巫人が暮らす緑豊かな世界

かつては巫人の祖先となった人間もいたらしいが、「mana枯らし」と呼ばれる病によって絶滅したらしい

主に巫人が労働力として召喚されている

そして名も無き世界だが：ここははつきり言って未知の領域だ

まだ何も分かつてはおおらず主に道具類や石像、水晶といったものが召喚されるだけ

ラインバウムに住む者と変わりない人間が召喚されることもあるらしいがそれらは基本的に秘匿されている

私がそれを知っているのは私自身がそうであるからだけではなく、ミントが派閥の先輩繋がりで名も無き世界から来た人間のことを知っていたからである

しかしその全てが事故によるものであるため結局は何も分かかっていないのである

そして私が興味を持っているのは召喚術の「異世界の者を元の世界へ還す」術式だ

召喚獣を元の世界へ還せるのは召喚した召喚士本人だけであり、私には恐らく召喚士が存在しないため私を還せる者はいない

しかしもしかしたら：ルールの穴を付くようなやり方で自分の力で還ることが出来るかもしれない、と思っているのだ

だがそう上手くいくことはなかった

まず召喚術には相性があり、扱える属性には個人差がある

それを調べる実験をした結果私に扱えるのは霊属性、つまり霊界サプレスのみしかし私の周囲には機属性のテイラーとリシエル、獣属性のミントしかいないルシアンも霊属性らしいが召喚士としての才能がなかったため剣士として修練を詰んでいる

いずれは帝国軍人になるのが夢らしいが、召喚術に関しては頼りに出来ない

そして召喚士は自分の得意な属性を専門に研究するため別属性の知識は皆無と言つてもいい

つまり私は召喚術の基礎知識だけは得られてもいざそれを行使するととなると頼れる人がいないのだ

その為目下の目標は霊属性の召喚士を探すこと、なのだがそれもそう易々とは行かない

理由の一つは何故召喚術を学ぶのかという目的が言えないこと

馬鹿正直に名も無き世界から来て還る方法を模索したいので教えてください、なんて言えませんが召喚獣ということで差別を受けるだろう

召喚術には強制術という無理矢理言うことを聞かせる術式があるため、召喚獣は軒並み差別されているのだ

そして帝国では召喚術はオープンではあるが、誰でも彼でも学べる訳では無い

それに無闇に召喚術を行使しようとすれば忽ちテイラーの聞く所となる

そうなれば召喚獣として売られたり、良くても軟禁、あるいは監視がつくだろう

無論黙って身柄をどうこうされるつもりはない

全力で抵抗はするが、場合によつては帝国軍そのものを相手にしないといけなくなる

かもしれない

そうなればより一層召喚術を学ぶ機会は減り、還れる可能性は減る

それどころか犯罪者として隠れながら生きなければならなくなる可能性すらある

そんなのは御免だ

暗い考えに陥っていると複数人の気配と足音が聞こえてきた

これは…まあ、あの三人だろう

私は立ち上がって玄関を開けた

「いらつしやいませ」

「…っ！もう、びつくりさせないでよね。心臓止まるかと思つたじゃない」

「ごめんなさい、貴女達の気配がしたので」

「…地味に凄いわね、あんた」

そんなやり取りをしながらリシエル、ルシアン、ポムニットの三人を中に迎え入れた

それから軽く談笑をする

「そう言えばフェアは？何やってるのよ」

「いつもの通りですよ」

「はあ…お店のこと放つたらかして何やってんだか」

「まあまあ、店番は私がしますし大丈夫ですよ」

「そうだけど…このままじゃあいつどんどん強くなっちゃって男寄り付かなくなっちゃうわよ」

「そんな程度のこととで離れる男なんて最初から関わらない方が良いでしょう」

「…案外手厳しいわね、アウル」

「うくん、アウルさんもフェアさんも遅いですがわよねえ。どうしたら私もそう強く在れるのでしょうか？」

「ポムニットさんは今のままで良いよ。僕達は今のポムニットさんが好きだから」

「あら、ありがとうございますお坊ちやま」

「取り敢えずルシアン、あんたフェアのとこ行きなさい」

「ええ!?!き、急になんなのさ姉さん」

ルシエルの発言も唐突だが、何故そこで顔を赤くして急に慌て出すのだルシアンは

…ああ、なるほど

「急も何も…最初から二人を誘いに来たんだし、フェアが別の場所に居るんなら誰か行かなきゃじゃないの」

「それは、そうだけど…」

「何よあんた…嫌なの？」

「そ、そんなこと…！うん、分かった。行ってくるよ」

少し乱暴な物言いに聞こえるがこれでこの姉弟は上手くやっている

それに誘いに来た、という事はやはり…

「それで、何処に行くんです？」

「あら、察しが良いわね。今夜星を見に行きましょう！」

「ふむ…素敵ですね。ポムニツトさんは？」

「私はここで店番をしておきますわ」

「よろしいので？そんな仲間外れみたいなの…」

「良いんですよ、貴女には感謝していますし」

「私に？」

「ええ、ですともですとも！貴女が来てからフェアさんの顔から疲れが取れて明るくなりましたから。私にとってはフェアさんもお嬢様とお坊ちやまと同じくらい大切な方です、そんなフェアさんの負担をとて減らしてくれた貴女には感謝してますの」

「そうでしたか…私はちゃんと彼女の助けになれているんですね」

「そりやそうよ、あんたフェアがやってた仕事の半分くらい代わりにやってる上に道の整備までしてるんでしょ？良くもまあそこまでやれるわよ」

そうして話していたら件のフェアとルシアンが戻ってきた

フェアは普通だがルシアンの方は顔が少し赤く、どこかそわそわしていて落ち着きがない

二人が戻ってきたことで話を中断して出かける準備を始めた

フェアは剣を腰に刺し、ルシアンは剣と左手に装着した盾の具合を確かめる

リシエルは長杖とサモナイト石…機属性のもので、大型ドリルであるドリトルと腕にワイヤーで繋がれた鉄球を装着したチェンボルという召喚獣を呼び出すものを持っている

そして私はフルタングのコンバットナイフをシースに入れ、そのシースを脚に固定した

そしてそれが見えないように黒のロングコートを羽織る

ボトムスも黒いしトップスも黒字に暗い紫色のデザインが入ったもので、全体的に黒い

手には指ぬきの施されたレザーグローブをしているから余計である

出掛ける準備、と言うよりも戦いの準備のように見えるがこの世界ではこれが普通である

駐在兵士等が取り締まってはいるものの、街から離れた洞窟や山岳には野盗が屯していたりする

星を見るのだから当然夜、そうなると襲われる危険も上がる

だからこれはそういった事態に対処するための装備だ

正直言うとな私はただの野盗如きに武装する必要もないのだが…これにはフェア達を安心させる意義もあるのでしない訳にもいかない

そうして準備を終えた私達は星見の丘と呼ばれる場所へ向けて出発した

第五話 大波乱の幕開け

「綺麗ですね…」

「うん、ほんとに…」

街を出て「星見の丘」と呼ばれる場所に來た私達は星空を見上げていた

そこには無数の星が散りばめられていて、そのどれもが美しくも儂く光を灯していた
元の世界の都市部では最早見られることになくなった空がそこにはあった

当然綺麗な星空を眺められる場所はいくらでもあるのだが、この星空は地球とはまた違った雰囲気がある

「どうよ、来てよかつたでしょ?」

「うん、そうね…ありがと、リシエル」

「お礼なら私じゃなくてルシアンに言うことね。あの子が言い出したんだから」

「ちよ、ちよつと姉さん!それは秘密にしてつて…」

「…そつか。ありがとね、ルシアン」

「う、うん…」

お礼を言うフェアの顔はとても嬉しそうだつた

ルシアンも頬を染めており、秘密をバラされたのも結果的にいい方向に働いたのか笑顔だ

…性別的に表情が逆な気もするが

乙女か、己は

「偶にはさ、こーやって何も考えずに星を眺めて嫌なこと忘れちゃいませよ。こういう時間だつて大切なはずよ」

「そうだね…ありがとう、みんな」

そう言つてフェアは座つて星を眺め始めた

私達もそれに倣つて思い思いに座る

私はフェアの右隣に座つたのだが、それ故に彼女の右手首に付いている腕輪が目に入つた

翠色で優しげに光っているその腕輪はとても綺麗なのだが、どう見ても外すことが出来ないサイズだ

何処か一部分を開いて着脱するタイプのものかとも思ったがそういった機構も全くない

フェアに拾われた当初気になって聞いてみたところ、あの腕輪は父親であるケンタロウ氏が旅に出る直前にフェアに付けたものらしい

つまりは5歳の頃から付けていることになる

普通はサイズが合わなくなるはずだが、何故かあの腕輪はフェアの手首のサイズに合わせて大きさが変わっているらしい

それも服を着るのに邪魔にならず、尚且つ決して抜くことが出来ないという絶妙な具合に

何度も壊そうとしたようだが鋸でも傷一つ付かないから諦めたとのこと

私の予想だとあの腕輪にはかなり強力な力が封じ込められている

何か…不思議な力を感じるのだ

私には分からない、未知の力が

悪意は感じられないのでそこまで気にしなくても良いだろうが警戒はしておこう

最悪の場合フェアに何かしらの悪影響が出るかもしれない

「あ、見て！流れ星よ!!」

「ほんとだ…ってなんか多くくない?」

「きつと流星雨なんだよ。綺麗だなあ…」

その声に改めて空を見てみると確かにいくつもの流れ星で空が煌めいていた

…ん?

一つだけなにか形、というか明らかに大きさが違うような…

疑問を感じたその直後だった

とてつもない音が響き渡り、地面が少し揺れた

「な、なによ今の!?!」

「あつちの方から音がしたよ!」

「…行つてみましょう!」

「流星に見て見ぬ振りには出来ませんしね、今のは」

私達は音の発生源へと向かう

するとそこには小規模なクレーターが出来上がっていた

隕石の衝突?

いや、そうであればこんな小規模で済むわけがない

さつきまで私達がいた場所からさほど離れてもいないし、本当に隕石の衝突なら私達

は死んでいるはずだ

そして落ちてきたのはどう見ても卵にしか見えない物体だった

「あれを見て!」

「何あれ…卵?」

「そんな、卵は光らないし今の衝撃で割れないはずが…!」

「そんなこと言つたつてそれ以外になんて言つたら良いのよ!!」

「ひとまず落ち着いて下さい。慌てたって何も解決しませんよ」

「そ、そうよね…」

「取り敢えず、どうする?」

「あんた、確かめて来なさいよ」

「わ、わたし!?!」

「なによ、嫌なの?」

「嫌って言うか…何か良くないものだったら危なくない?」

「私もフェアに賛成です。得体の知れないものに不用意に近付くのはきけ…ん?」

言い終える前に卵型の物体に変化が生じた

ひびが入り、より一層強く光りだす

「あわわわ…」

ルシアンは完全にパニックになっているようだ

こんな状況なら仕方がないだろう

それから光が収まるとそこには…何かの生物がいた

まさか本当にあれば卵で、今孵化したのか?

だとするとなんて頑丈な卵なのだろうか…

「え、なにあれ…」

「戻った…のかな」

「何でも良いじゃない、可愛いんだから！ほら、こっちおいで〜」

リシエルがしゃがんで手招きするとその生物は飛んで（浮遊して？）リシエルの腕の中に納まった

「ピイツ〜」

「あはは、甘えてきてるよ。かわいいー！」

リシエルはその生物を撫でて可愛がることに夢中になっている

確かに可愛いけど…なんの生物なのだろうか

「この子って、もしかして竜なのかな」

「言われてみると確かに竜っぽいかも…」

「これが…竜？」

フェアとルシアンが竜かもしれないと言うが私には竜に見えなかった

全体的に丸みを帯びていて角のようなものはあるもの、羽は手と一体化しているよ
うだし鱗もなくてすべすべしている

こちらの世界での竜はこんな感じなのだろうか？

そんなことを考えていると複数人の気配を感じた

それも悪意を持っている人間のものだ

感じた方を向くと十人を越える集団がこちらに向かつて来ている

「どうしたの、アウルさん？」

「何者かがこちらに向かつてきています。しかも悪意を持っていますね」

「なんですつて!!？」

「ピギイツ!!」

竜の子(?)も反応した

やって来た集団は揃いの鎧と剣を装備していて、明らかに堅気の者ではない

それに野盗の類でも、ない

正規軍から離反した者達か…もしくは犯罪組織の手先か

「その竜の子をこちらに渡してもらおうか。それは我らのものだ」

リーダーと思しき人物が高圧的に要求を口にした

この男も竜の子と言っていたことからこの子は竜で間違いないらしい

「ちよつと、いきなりやって来て何言つてんのよ!」

「…まずは説明してちょうだい。この子は何なのか、何故空から卵の状態で落ちてきたのか…そして何故貴方達が自分のものだと言えるのか」

「そうですよ、事情を説明してくれなきゃ何も…」

リシエルの突っかかり、フェアの正論とルシアンの同調に対して男の答えは

「……。」

黙って剣を抜いた

渡さなければ殺す、と…単純明快だ

男の構えに可笑しな所は見当たらない

正統派の構えから察するに、正規の軍に所属していた経歴があると見て間違いないだろう

「な、なによ…剣なんか抜いて…。」

リシエルがまだ突つかかろうとするが、剣を見て怖気ついている

ルシアンも冷や汗を流しているし、この場で落ち着いているのは私とフェアだけか

頼もしいが不憫でならない

「…何するつもり？」

腰の剣に手をやりつつ威圧するフェア

しかし男は怯むことはなかった

「死ねええええ！」

リシエルに向かって剣を振り下ろして来た

「いやああああ!!！」

構えよし、剣筋よし、迷いのなさも問題はない

そのまま放っておけば剣はリシエルを左肩から右腰にかけて斬り裂き、鮮血を吹き出しつつリシエルは倒れるだろう

もしくはフェアがリシエルを守り、男を倒すかのどちらかだ

そのまま放っておけば、だが

「は……？」

理解不能な現象が起きたことで男の思考は半ば停止した

男だけではない、男の剣を受け止めようとしたフェアですらあまりの出来事に開いた口が塞がらないようだ

男の剣を親指と人差し指、中指で摘んで止めた私はそのまま指に力を籠める

剣に罅が入り、その直後折れた

「い、い、い、い、殺せえええい!!み、皆殺しにしるお!!」

未だ放心している男を蹴飛ばすと、やっと正気が戻ったのか悲鳴のような命令を出した

その命令に他の男共とフェア達も動き出し、各々武器を構えた

ざっと数えて15人

先程の男は腰が抜けたのか、立ち上がれていない

他の者も腰が引けている

さて、どうするか…

「フェア、リシエル、ルシアン。貴方達はその子を守ってあげていて下さい。もしも敵が来たらルシアンが盾で抑えてる間にフェアの剣、もしくはリシエルの召喚術で倒して下さい」

「色々と聞きたいことはあるけど…分かった、任せて！」

「なんとかやってみせるわ！」

「が、頑張ります…！」

三者三様の返事を聞いた私は竜の子を任せ、敵に突っ込んで行った

？・？・？・？・？・？・フェア視点？・？・？・？・？・？

アウルさんが敵に突っ込んで行ってから少し経った

敵が来る様子はないからさっきの事を考えてみる

アウルさんは元の世界で戦いを生業としてるって言った

だから戦える力があることは分かっていた、それに一緒にお風呂入った時に身体を見たけどもの凄く鍛えられていた

腹筋も割れてたし腕も脚も引き締まっっていて細身ながら筋肉質で、その…正直見蕩れちゃった

なんて言うか、野性的でしなやかな猫科動物を彷彿とさせる身体だった

そんな身体からもアウルさんが強いんだろうなっということも分かった、けど……

戦っているアウルさんを見る

鎧を着て剣を持った男14人を一方的にボコボコにしている

しかも素手で

ナイフ持つてるのに使わないのかな…いや、きっと必要ないんだ

ある者は拳打で吹っ飛ばされ、またある者は回し蹴りでなぎ倒されている

って、鎧凹んでない？

嘘でしょ、どんな膂力してんのよ…

「ねえ…フエア……」

リシエルが引きつった笑顔をしながら声をかけてきた

「…なに？」

「あの人…何者なの？」

「…分かんない、元々戦いの中で生きてきたって言ってたけど」

「僕も、あんな風に…」

ルシアンは真剣な顔をしてじっとアウルさんを、その動きを見てる

強くなりたいたって日頃から言ってるし憧れに似たものを感じているのかな？

チクリ、と胸に痛みが走った

なに、この感じ…

初めての感情に戸惑う

それがいけなかった

「クソがああああ!?!」

アウルさんに剣を折られた男がショックから復帰したのか素手でこちらに向かってきた

しまった!

慌てて剣を抜こうとしたけど動揺してたせい、手が滑って剣を落とすしちやった
仕方がないからそのまま徒手で対応する

突き出された腕を横に避けて男の顔に掌底を当てる

「がっ……!」

一撃目は何とか凌げたけど、次も上手くいくかな…

「フエア!大丈夫!」

「フエアさん!」

「来ちゃダメ!!」

よく見ると男の目は血走っていてどう見てもマトモな精神状態じゃない、発狂してる

こういう奴は何をしてくるか本当に分からなくて厄介なんだ

だからせめて攻撃対象を私一人に絞りたい

何とか落ち着きを取り戻して剣を拾って構える

斬るわけにも行かないから剣の腹を頭に当てて気絶させよう

間合いを測って…もう少し…:…って、え?

急に男の身体が少しだけ宙に浮いた

後ろに背の高い人が立ってる

アウルさんだ

どうやら後ろから首を掴んで持ち上げているみたい

鎧着てるから相当重はずなんだけど…

そのまま絞めて一瞬で気を失わせた

そして手を離して開放する

「ごめんなさい、まさかこの人が動けるとは思ってた……」

「ううん、大丈夫だよ。幸い怪我もないし」

「それなら良かったです」

ホッと胸を撫で下ろすアウルさん

とても穏やかな表情でさっきまで無双してた人とは……って他の男達はどうなったんだろう

そう思ってたアウルさんの後ろを見てみると

「うっひゃあ〜…圧巻ねえ」

「すごい……」

大勢いた男達が全員気絶していた

しかも殆どの鎧は少し損壊してるし、剣も粗方折られてた

その様子を見たリシエルがアウルさんと私の間に立った

まるで私を庇うみたいに…どうして？

「ねえアウル、あんた強すぎない？何者なの？」

「ただの人間ですよ。産まれた時から戦いを叩き込まれてはいますけどね」

「それって…フェアさんと似てる」

「そうね、似てるわ。でもそれにしたって規格外過ぎるわよ。フェアだつてかなり強いけど、この人のそれはちよつとレベルが違うわ。だつて普通ならこんなこと出来つこないもの」

リシエルが厳しい顔をしてアウルさんを見てる

なるほど、そういうことね…

付き合いが長いから分かる、これはアウルさんを疑っているんだ

リシエルは何だかんだ言つて私をかなり気にかけてくれている

もしかしたらヤバい存在かもしれないアウルさんが私の傍にすることに危機感を感じてるんだと思う

だけど

「リシエル、アウルさんが別世界の人だつてこと忘れてない？」

「あ…そつか、そうだったわね。宇宙？とかなんとかが違うつて言つてたし、あたし達の常識とか感覚が通じるとも限らないわよね」

「それもそうでしたね」

「…なんであんたが納得してるのよ」

少し呆れたように言うと、リシエルは笑顔に戻つた

どうやら納得してくれたみたいだ

私としては色々と助けてくれるアウルさんを疑いたくないし、リシエルやルシアンと
険悪になつて欲しくもない

これは私の甘さなのかもしれないけれど：私はアウルさんを信じたい
この人はきつと良い人だ

何かヤバげな力を持つていたとしても、私達の敵になつたりはしない
この人となら、どんなことだつて乗り越えられる

そう信じたいんだ

そんなことを思いながら私は皆と一緒に帰るのだつた

第六話 変わりゆく日々

「いったあああああああああああああああいいい!?!」

「んう!?!」

翌朝、私は凄まじい叫び声で目を覚ました

フェアの声であるのは間違いないのだが、なんなんだあの絶叫は…

もしかしたら窮地かもしれない

昨日は結局あの竜の子を連れて帰ってフェアと一緒に部屋で寝かせた

その竜の子の仕業か、もしくは敵が来たか…恐らくは前者だ

いくら寝てても敵意のある者の接近に気付かない訳がないし、もし私に気付かせないほどの実力者ならそもそもフェアが声をあげることも出来ないほど鮮やかに殺して竜の子を奪っていくだろう

だからフェアは無事…と考えて良いだろうが、そしたら今度は何があったのか気になる

万が一にも緊急事態かもしれないのでタンクトップとジャージというだらしない姿を気にせずフェアの部屋へ向かった

フエアの部屋の前まで来るとフエアが部屋から出てくるところだった

「あ、アウルさくらん!」

「おおっと……ど、どうしたのですか?」

部屋から出たフエアが私を認めるとしがみついて来る

流石に予期出来てなかった私は驚きつつも受け止めた

「な、なんかね?なんかね?起きたら竜の子がいなくてね?さらになんか知らない子がいてね?ものすつごい力で噛まれて……」

「落ち着きなさい」

「ひゃっ……!」

明らかにパニックになっていたので両手で頬を摘んで軽く伸ばした

ん、ぶにぶにして中々触り心地が良い

暫く摘んで遊んでいたらフエアから抗議の目線を感じたので離れた

「落ち着きましたか?」

「う、うん……落ち着いたけどなんか恥ずかしい。私の顔で遊ばないでよ」

フエアが批難してくるがそんな頬をぷっくり膨らませながらだと可愛いだけだ

これは中々に弄り甲斐が……つとそんなことを言ってる場合ではなかった

「それで、何があったのです?」

「あ、うん……えつとね」

そう言つてフェアは難しい顔をしながら話し始めた

「昨日はあの後竜の子を連れて帰つて来て取り敢えず私と一緒に寝たでしょ？それで朝起きたら、その……知らない女の子がいて……思いつきり腕を噛まれたの」

「ふむ……」

「あ、その目は信じてないでしょ」

「そうですね……少し突拍子も無さすぎるのでこの目で見ないと信じられないですね」
「それもそつか。じゃあ、開けるよ……」

取り敢えず部屋を見て確かめることにした私達はフェアの部屋へと入った

そして布団を捲ると……そこに居たのは紛れもなく昨日

拾つた竜の子だった

「……。」

「竜の子、ですね」

「ほ、ほんとだよ？本当にさつきは知らない女の子がいて思いつきり……わひやつ」
「落ち着いて下さい」

再びパニックになりかけたフェアの両頬を今度は片手で掴み、中央に寄せる

うむ、やはり触り心地が良い

少し堪能してから離すとフェアは「うう〜…」と唸った

「今ある事実を並べると、フェアは先程見知らぬ女の子に腕を噛まれた。その歯形も残っている。しかしここには童の子しか居らず、その女の子の姿は見当たらない…」

「アウルさんはどう考えてるの?」

「可能性としては三つ。一つ目は単純にフェアが寝惚けていた可能性。現状を見るとこれが一番有り得そうなことです」

「でも…」

「分かってますよ。あくまでも可能性の話です。二つ目に何処かから見知らぬ召喚獣が侵入して噛むだけ噛んで出ていった可能性。この場合だと霊界の召喚獣…特に吸血鬼の類の仕業である可能性が高いですね。とは言えフェアに何の症状も出ていないため確率的には低いでしょう」

「な、なるほど…」

「最後に三つ目。これも確率的には低いですが…幻術の類をこの子が使った可能性。それによってフェアにはこの子が人間に見えた、と」

「そんなことこの子に出来るの?」

「昨日のリシエルの話を聞く限りでは出来ないこともなさそうです」

竜とは召喚術に於ける永遠のテーマでもあり、研究が殆ど進んでいない分野であるらしい

何でも高等な竜は人間より遥かに高い知能と魔力を備えており、捕獲することは疎かその姿を見ることがすら叶わないというのだ

低級の竜であれば獣属性の召喚術で呼び出すことは可能のようだが、先日この子を手に入れるためにあんな武装した輩が襲ってきたことを考えるとこの子は高等な竜なのだろう

そして研究の進んでいない、何も分かっていない高等な竜であれば人智を超えたことをやってのけても不思議はない…というのが三つ目の可能性の根拠である

あくまでも推測に過ぎないが…

「そっか、そう考えることも…」

「おーい！フエア、アウルさーん。無事ですさかー！」

外から大きな声が聞こえてきた

この声はグラッドのものだろうか

恐らくは先程の大声を聞いて駆けつけて来たのだろう

私達は玄関を出てグラッドと対面した

「おはよう、グラッド兄ちゃん」

「おはようございます」

「おう、おはようフェア。それにアウ…うおっ!？」

私を見たグラッドが何やら動揺した

何故そうなるのか分からない私を見たフェアが慌てた様子で

「ちよっ、アウルさん！格好が…何か羽織ってきて!!」

「ん？ああ…」

と言ったことで把握した

今の私は下はジャージを履いているが上はタンクトップ一枚だ

カップが付いたものとはいえ、かなり無防備な格好である

どうやらこれが原因のようだ

見るとグラッドは顔を赤くして背けているし、フェアは私を宿の中に戻そうと押してくる

下着や裸なら羞恥心も沸くが、このくらい別に気にならないんだけど…それを言ったところで聞く耳はなさそうだ

仕方なく私は宿に戻って身嗜みを整えてから外に出た

するとフェアはムスツとしていてグラッドは何か可哀想な人を見る目になっていた

「アウルさん、こいつも何かと大変ですのでどうか支えてやって下さい。本官もなるべ

く気にかけるようにしますので」

「ちよつと、私は大丈夫だつてば！」

「大丈夫じゃない奴は皆そう言うんだよ。じゃあな、仕事熱心なのも良いけどちゃんと休みも取れよ」

そう言つてグラッドは爽やかな笑みで去つていった

：私の返事も聞かずに去るのはどうなのだろう

それは良いとして何があつたのかフェアに聞くと、どうやら今朝の大声のことを説明する為に竜の子のことも話してしまつたらしい

襲つてきた男達のこととは伏せたのでそこは追及されなかつたが、どうやら信じてもらえずああして心配されてしまつたと

まあ普通すぎるくらい普通の話だが、そんな事を気にしている時間はあまりない

今日もいつもと同じように朝の仕事をしなければならぬのだ

その時にミントに少しだけ相談して、必要であれば時間のある昼過ぎ以降にゆっくりと話をしよう

そう決めて私達は野菜を貰うためにミントの家に向かうのだった

「おっそいわね、お腹空いちやっただじやない。何やってたのよ?」

ミントの家から宿に戻って来るとリシエルが中に入り込んで椅子に座っていた

勝手に上がっておいて遅いと言い、さらにご飯の催促とは…相変わらず図々しい娘だ

だが不思議と不快に感じない

「ちよつと色々あつてね…ルシアンは?」

「あの子なら二階の掃除とベッドメイキングやつてるわ。ほんとマメよねえ」

「そんな事も出来たんですね、彼は」

私は彼の器用さに感心すると同時にそれが原因で姉にこき使われるのかもしれないという憐憫の思いを感じた

ここだけ聞くとリシエルが凄く嫌な奴に思えるが、決してそのようなことは無い

人を氣遣う心を持っているし、何よりルシアンのフェアへの氣持ちに氣付いて（とうかバレバレ）いてなんとかフェアと良い仲にさせてあげようと奔走していたりもする
それにフェアやルシアンもリシエルのことを全く嫌っておらず寧ろ大切な友人、姉として快く想っているくらいだ

ただ少しがさつで言い方がキツイところがあるだけで、基本的には所謂「良いやつ」なのだ

その後フェアは料理を始めて私はホールの掃除を、戻ってきたルシアンは花瓶等の手

入れといつも通りの作業をこなして朝食を摂る

今朝の朝食はモンテイクリフト（フレンチトーストにチーズやベーコン等を挟んで焼いたサンドイッチのようなもの）にキャベツとアンチョビのソテー、そして私の淹れた珈琲だ

モンテイクリフトは外はカリッとして中はトロトロ、フレンチトーストの甘みにチーズとベーコンの塩味がベストマッチしている

キャベツとアンチョビのソテーも柔らかさとしゃキシヤキが共存したキャベツの自然な甘さが素晴らしい

そしてそんな甘さがココの深い珈琲を引き立ててくれる

私は珈琲を淹れるのが得意だ

自分で言うのもあれだが、フェアの作る料理にとっても合っていて芳醇な香りが意識を覚醒させると同時に安らぎをも与えてくれる

フェアの作る料理を食べているこの時間は至福の一時であり、何にも替え難い時間だ
因みに竜の子もフェアの料理に夢中になって「あんたらなんか似てるわね」とりシエルに半ば呆れられながら言われたのはどうでもいい事である

食べる幸せを思う存分に堪能した私はいつも通り皆の食器の片付けを始めた

テーブルではフェア達が今後どうしていくかを話している

話を聞くに一度ミントの元へ連れて行って獸属性の召喚士（専門は植物なのでこまで頼りになるかは未知数）としての意見を聞き、方針を固めるようだ

本心では自分達で面倒を見たいようだが、大きくなるとそうもいかないだろうし何より竜の子を拾ったことに対する責任を取ろうとする意思が感じられた

まだ子供だというのに立派なものである

そこらの大人よりも大人だ

しかしそれが親に見捨てられたことによつて形成され、そんな幼馴染みをずっと傍で見ってきたからこそそのものだと思つとやはり不憫だ

そんなことを思っていると気配と共にバタバタと足音が聞こえてきた

この足音は…まずい！

「おじやまいたしまゝす！」

「やばっ！ちよつとルシアン、その子を隠しなさい！！」

「ええっ?!急に言われても…あれ?」

私は素早く竜の子を抱き上げると跳躍し、そのまま店内の角の天井に足を突っ張つて張り付いた

あまりの行動に一瞬フエア達は呆氣に取られたが、意図をすぐに理解して軽く手を合わせてから玄関の方を向いた

因みにリシエルだけはサムズアップだった…どうでもいいか
そして慌ただしい客は姿を現した

紫髪にメイド服、ポムニットだ

「やはりこちらにおいででしたわね、お嬢様にお坊ちやま」

「はいはい、言いたいことは分かっているわよ。戻れば良いんですよ」

「分かっているのなら初めから抜け出さないで下さいまし！」

「それは無理ね！ポムニットだって分かっているでしょ？」

「開き直らないで下さいましっ!!」

「わ、悪かったから。もう帰るよ、ポムニットさん」

「もうっ…ああ、それとは別に要件が」

「要件？」

「ええ。フェアさん、実は旦那様がお呼びなのです。お昼のお仕事の後でいらして下さい

い」

「私を？」

「どうせまた利益がどうのこうのって難癖付けるつもりよ」

「まあ一応黒字ってだけだし、アウルさんが来てから収益も上がったけど…それでもあの人の満足するレベルでは無いしなあ」

「そう言えばなのですけれど…そのアウルさんはどちらに？先程から姿が見えませんが」

「ああくえつとねえ…ちよつと道の整備に必要なものを調達しに行くつて言つて出掛けただわよお」

リシエル…中々上手い返したがそんなわざとらしく言つたら怪しすぎるだろう…

ほら、ポムニツトも訝しんでるじゃないか

「…それならよろしいのですけど。さ、お嬢様、お坊ちやま」

「分かつてるわ。それじゃ、またねフェア！」

「朝ご飯ご馳走様、フェアさん！」

「それでは、失礼致しますわ」

ふう、やつと行つたか

「もう降りてきて良いよ、アウルさん」

「そうですね。よつと…」

「相変わらず凄い身体能力だね…どうやつたらそんなになれるの？」

「うーん、産まれてからずっと戦いの中で生きてきましたからね。そんな環境で過ごせば誰でもこうなりますよ」

「そんなものなのかな」

「そんなものです」

まあ実際にはなれない者の方が多いが、なれない者は死ぬだけだ

しかし厄介なことになった

昼の仕事が終わったらフェアはテイラーの元へ行かなければならない

その話とやらがどれだけかかるか分からないが、場合によってはミントの所へ行く日をズラさなければならなくなるだろう

そうすると方針を固めるのが遅れる

その遅れが致命傷となり、敵の手に堕ちる可能性もある

些か警戒しすぎだが、しておいて損はない

それに次の戦いが目の前まで迫っているような気がしてならないのだ

こういう時の勘は当たるものである

けれど、そうやって警戒ばかりもしていられない

色々あつたがもうすぐ開店の時間だ

さつさと準備をしなければ間に合わなくなるだろう

こうして私は来たる二つの戦いに備えるのだった

第七話 將軍との邂逅

昼の仕事が一段落し、片付けも済んだ所で思わぬ来客があつた

なんとポムニツトがまた訪れたのだ

彼女はメイドとしての仕事かなりの量あるため、用もなくここに來ることは殆どな

い

ということは何かある、それもテイラー絡みの厄介なものが

「どうしたの、ポムニツトさん。迎えに来てくれたの？」

「いえ、そうではなくてですね…アウルさん、旦那様が貴女も來るようにと」

どうやら私の勤は当たつたようである

「私も？どうしてまた…」

「さあ…聞きたいことがあるとしか」

「そうですか…分かりました」

「ついでですし、私をご案内しますね」

「お心遣い、感謝致します」

「もう、そんな畏まらないで下さいまし」

敢えて大仰に感謝の意を述べるとポムニツトは困ったような笑みを浮かべた
竜の子を一人（一頭？）で残していくことになるが仕方がない

ここで残ると言っても理由を言えないからだ

彼女は立場的にテイラーに隠し事をするわけにはいかなないので竜の子のことを話せばほぼ確実にテイラーの耳に入るだろう

そうなればテイラーが多少強引にでも竜の子を手に入れ、利益の為に利用するのは目に見えている

だからリスクが高くても今は竜の子を残して行くしかない

そうして私とフェアはポムニツトの後に続いてブロンクス家に向かうのだった

？・？・？・？・？・フェア視点？・？・？・？・？・？

テイラーさんにたっぷりと利益のことでネチネチと言われた私は急いで家に向かっていた

アウルさんは今テイラーさんと話をしている

てつきり一緒に話を聞くものと思ってたけれど、別々に話をするみたいだった

そして私の隣にはリシエルとルシアンがいる

二人は私が竜の子を連れて来ると思っていたみたいだけど、そんなこと出来るわけないじゃない

ともかく竜の子のことが心配だから割と本気で走る

そして家に着いた私達は中を見て回ったけど何処にも竜の子はいなかった

「ちよつと！いないじゃないのよ、どうするの!？」

「分からないわよ！それに仕方ないじゃない、連れて行くわけにはいかなかったんだからあ!!」

「二人とも落ち着いてよ！そんなこと言い合っても何にもならないでしょ？」

「そうだけど……!」

「……そうだよね、ごめんルシアン。リシエルも今はこれからどうするかに集中しよう?」

「……仕方ないわね、分かったわ」

それから私達は手分けて竜の子を探すことにした

ルシアンはもしも竜の子が戻ってきた際に備えて残ることになった

私は溜池、水道橋、商店街と探していったけど見つからなかった

途中でグラッド兄ちゃんに会って、事情を説明したら「俺が見つけてやる」と言ってくれてくれた

今朝は竜の子のことを全く信用してくれなかったけど、今回は私がかかなり真剣だったのもあつてか信用してくれたみたい

それからも暫く探し続けたんだけど見つからなかった

焦りと心配する気持ちでいっぱいになった私は気が付くと私塾の近くに来ていた

ここは私やりシエル、ルシアンが小さい頃に色々と学んだ場所だ

この私塾の先生はセクターという名前で、元帝国軍人だったの

怪我で引退したらしくて杖をついている

セクター先生は温厚な人で教え方がとっても上手だ

子供の話を真剣に聞いてくれて親身になってアドバイスをくれる、そんなとても良い人だ

もしかしたら竜の子のことも信じてくれるかもしれない

そんな事を考えてたら後ろから声を掛けられた

「おや、懐かしいね。フェアくんじゃないか」

「わっ……セクター先生」

「驚かせてしまったみたいだね。すまない」

「ううん、いいのいいの」

記憶にある通りの穏やかな笑みに落ち着いた声

先生と少し話しただけで私は焦りが鎮まる

昔からそうだった

どれだけ慌てていても、先生と話すだけで落ち着きを取り戻せるの

「それで、どうしたんだい？わざわざこんな所まで」

「えっと、それは…」

先生に話したいと思っていたけれど、いざその時になると躊躇った

これはいわば人（童）探し、怪我で足が不自由な先生に協力してもらおうわけにはいかないからね

「…？」

「ううん、なんでもないの！久しぶりに先生と話したくなっちゃってさ。元気出たよ」

「そうかい？それなら良かった。宿屋の仕事は大変だろうし、また話したくなったらいつでもおいで。私には話を聞くくらいしか出来ないけど、それで良ければ喜んで君の力になるよ」

「うん、ありがとうセクター先生！それじゃあ、またね！」

「ああ、また会えるのを楽しみにしているよ」

セクター先生と別れた私は溜池に向かった

するとそこにリシエルがいた

「リシエル! どう、見つかった?」

「ううん、見つからないわ。でも大丈夫よ!」

「え、どうして?」

「ミントさんに相談したらオヤカタを貸してくれたわ。匂いを辿れるかもって!」

そう言われて足元を見てみるとミントさんの護衛獣のオヤカタがちよこんといた

「あ、なるほど! さっすがミントさん」

「ちよつとあたしは?」

「はいはい、リシエルもすごいわよ」

「いまいち誠意が感じられないわね…ま、いいわ。そんなこと言ってる場合でもないしね」

「そうだね。オヤカタ、分かる?」

「ムイイ…ムイツムイ!」

オヤカタが強く反応してある方向を指し示した

「見つけたのね!!」

「さっそく行こう!」

私とリシエルはテコテコと走っていくオヤカタに付いて行った

「もう、オヤカタあ…」

「ムイイ…」

リシエルは明らかに落胆してる

それもそのはず、オヤカタに付いて行った先は私の家だったんだもの

一応中も見えてきたけど戻ってきてないみたいだし、事情を知ったポムニットさんにちよつとだけ怒られちゃった

てことでもう一度探しに行こうってなった時、来客があつた

「フエアー！」

「アウルさん、グラッド兄ちゃん！見つかったの!？」

アウルさんとグラッド兄ちゃんだった

「いや、そつちはまだなんだが…その途中で具合が悪そうにしている子がいてな。すまないが、ベッドを貸してやってくれないか？」

「そつか、残念だけどそれも言つてらんないね。良いよ…つて」

なんとなくアウルさんの背に負われてる子を見た時、私に電流が走った

この子は…！

「どうしたのですか、フエア？」

「そ、その子だよ！私が今朝言ってた思いっ切り噛んで来た子だよ!!」
「な、なんだって!!」

皆が驚く中（アウルさんは割と冷静に見えた）その子供の身体が光りだして、目を開けていられなくなった

光が収まって目を開けるとそこには：

「おや、竜の子ですね」

「「ええ〜!?!」」

驚きの声が木霊した

?・??・?・??・?・アウル視点?・??・?・??・?

ぐったりとしていた竜の子をひとまずミントの家へと運び、診てもらおうことにした私達は今ジュレップ宅の別室にてミントが診察を終えるのを待っている

暫くするとミントが額を拭いながらやって来た

「ふう…」

「ミントお姉ちゃん、あの子の様子は!?!」

「今は寝かせて安静にしてあるわ」

「それで、あの子はどんな病気なの!？」

「病気じゃないよ。ただ頑張り過ぎて体力を過剰に消耗しちやっただけ。だからゆっくりと寝かせてあげれば大丈夫だよ」

「良かったあ…」

フェアにリシエル、ルシアンの三人はそれを聞いてとても安堵したようだ

そこへ明らかに頬を紅くしたグラッドが質問をする

「それで、ミントさん。あの子はいったい何なのでしょう？人間に変身する召喚獣なんて聞いたことがありませんし…」

「あの子は間違いなく竜の子ですね。それもかなり珍しい…少なくとも普通は街に出てくるような子ではありません」

「な、なるほど…」

頬が紅いどころか少し挙動不審にすらなっている

…ミントに好意を持っているのがバレバレである

ミントは色白で金髪碧眼、可愛らしい顔立ちに巨乳で更に性格も穏やかで茶目っ気もあり可愛らしいというモテ要素を詰め込めるだけ詰め込んだ正しく「男の理想の女性」であるから仕方の無いことだとは思うが

實際ミントに好意を寄せているのはグラッドだけではないし、この街の男の大半がそうであると言つても過言ではない

「それにしてもびつくりよね。まさか人の姿になつちやうなんて、全然知らなかつたわ」

「仕方がないよ。そもそも普通の竜は人に変身なんてしないもの」

「どういうこと？お姉ちゃん」

「うんとね、それを説明するにはまず『亜竜』と『至竜』について話さないといけないね」
「ありゆう？しりゆう？」

「うん。まず亜竜はね、身体的に竜の特性を備えているもの。鱗や翼があつたり、力が強くて炎を吐いたりとかね」

「獣属性のワイバーンとか？」

「そうそう。そういう如何にも竜、つて感じなのが亜竜かな」
「なるほど…」

「それでは、至竜と言うのは？」

「亜竜の特性に加えて高い知性と魔力を持っているの。人間よりも遥かに長生きで、年老いた至竜はあらゆる知識を有していると言われているわ。それらを用いて人には不可能な、理解出来ない奇跡を起こせるらしいの」

「じゃあこの子が人間の姿になってたのって…」

「うん…きつと至竜の力なんだと思う。けど、どんなに凄くつてもまだまだ産まれたばかりの子供。だから無理して力を使いすぎると…」

「バテて倒れちゃった、てことね」

「そうなるね」

「そっか…」

「取り敢えず今日は私がこの子のことを診るね。回復したらまた明日の朝連れて帰ってあげて」

「うん、分かった。色々ありがとね、ミントお姉ちゃん」

「ううん、良いの。文献でしか見ることの出来ない至竜をこの目で見られて私もちょっと舞い上がってるし」

「それじゃあまたね、ミントさん」

「あの子のこと、お願いします」

「では、私も失礼させてもらいますね」

「ほ、本官もこれにて通常業務に戻らせていただきます」

フェアに続いてリシエルとルシアン、それに私もミントの家を後にすることにした。グラッドも見回りに戻るようだが、名残惜しいのが手に取るように分かる

これだけあからさまなのにミントが気付く様子は全くない
教養はとて深いが、こういうことには凄く鈍感らしい

宿への道を進む途中、徐ろにルシアンが口を開いた

「それにしても…あんなに凄い子だったなんてね。そりや悪党達が欲しがらるわけだよ」

「その事なんだけどさ、皆昨日の彼奴らのことは話した？」

リシエルの問いにフェアとルシアンは否定の意を示した

「話してないよ。それを話したらきつとあの子を取り上げられちゃう」

「そうだよね、私も同じ考えだよ」

「そうよね…安心したわ」

「安心してる場合ではありませんよ、三人とも」

「「え？」」

「見つけたぞ！お前達だな、昨日邪魔した子供達というのは」

2 mは軽く越えているであろう大男が全身に鎧を着込み、巨大な戦斧を手にとって声をかけてきた

その後ろには同じ鎧を身に付けた集団がいる

明らかに軍属、もしくは元軍属の者達だ

昨日の奴らとは着ている鎧が違うが、繋がりがあるかもしれない

「そして貴公か、我輩の部下を叩きのめした滅法強い女というのは」

繋がりにあるどころか部下か

こいつが親玉…というわけでもなさそうだ

彼等は騎士か兵士か、どちらにせよ言い方は悪いが目的を達するための手駒である可能性が高い

そうだとすればそれを扱う者が裏にいるはずだ

「…だつたらどうだと言うのです？」

「まずは先日の部下達の非礼を詫びよう。そちらの子らが対話を望んだというのにいきなり剣を向けるなど騎士の風上にも置けん」

「ふむ…」

そう言つて軽く頭を下げてくる

意外だった

てつきり私は彼等もいきなり襲いかかつてくると思つていたが、どうやら騎士としての誇りを持っているようだ

「だがな、部下をやられて鎧も剣も滅茶苦茶にされた以上詫びるだけというわけにはいかぬ。それにあの竜の子は我等には必要なものなのだ。素直に渡してくれば決して

危害は加えぬ……だがあくまでも抵抗するのなら」

そこまで言ううと大男は戦斧を構える

それが合図なのか後ろにいた者達も剣や槍を構えて陣形を取った

「力づくで奪わせてもらおうぞ!!」

先程までの威圧的ながらも穏やかな雰囲気は一瞬で消え失せ、凄まじい気合いと共に闘気が放たれる

「くっ……」

余りにもこの闘気にフエアでさえ二の足を踏んでいる

私は受け流せたが、屍達やオラクルでの創造神との戦いを経験してなければ当てられていたかもしれない

それほどのものだった

この大男を相手しながら他の者達も制圧し、フエア達を護るのは呪いの力を最大限使用しなければ……屍化しなければ不可能だ

大男は私が倒すとして、その他はフエア達にやつてもらおうしかない

しかし今動けそうなのはフエアしかない

リシエルとルシアンは声も出せなくなっている

このままではどうしようもないので私は優しきで包んだ闘気を発し、その闘気を用い

てフェア達を囲んだ

そうして相手の鬪気から守って三人に聞く

「動けそうですか、皆さん？」

「うん、ありがとうアウルさん。お陰でなんとかやれそうだよ」

「さつきまで指も動かせなかつたけど、急にやる気が湧いてきたわ。心地良くて安心感すら覚えるけど、あんたがやったの？」

「ええ、そうです。ルシアンはどうですか？戦えますか？」

「はい、やれます！」

リシエルが杖とサモナイト石、ルシアンは剣と盾を構える

フェアは武器を携帯していなかつたので私のナイフを貸した
すぐにも敵から武器を奪ってそれを使うことだろう

それまでの繋ぎになれば良い

彼女等が戦えることを確認した私は大男の元へと歩いていく

「私達に降伏の意はありません。よって……」

「合戦だな。我が名はレンドラー、『剣の軍団』を率いる『將軍』だ。始める前に貴公の名を聞いておこう」

「私の名はアウル。今はあの子達の保護者のようなものです」

「ではアウルよ。悪いが全力で潰させてもらおうぞ！」

「望むところですよ！」

そして戦いの火蓋は切って落とされた

第八話 屍人VS將軍

「つえりやああああああ!!」

裂帛の気合と共に大上段から戦斧が振り下ろされる

空気を斬り裂き唸りを上げながら迫ってくる斧をサイドステップで回避する

流石にあれをマトモに食らったらタダでは済まない

いくら私の性質が屍となっていて未練を失わない限り不滅だとしても、人間の身であることに変わりはないのだ

レンドラーの攻撃を受ければ再生にかなりの時間を要するだろう

しかしそんな威力を持っている代わりに機動力は低いはずだ

顔以外の全身に頑強な鎧を着ていて、しかも身の丈を越えるほどの大斧を振り回している

軽い剣のように素早い斬り返しは出来ない…と思っていた

斧から逃れた私はそのままレンドラーに接近し、顔に蹴りを叩き込もうとした

昨日の奴らとは明らかに鎧の質が違って流石に凹ませるのは私にも出来ないし、この上からダメージを与えようとなるのかなり特殊な手法を用いなければならない

その點頭に兜は着けていないため、上手く決めれば一撃で倒せるだろう
そう思つての攻撃なのだが：

「なっ!？」

レンドラーは斧を振り下ろす挙動を途中で変化させ、私のいる方に向かつて横風に
閃してきた

それも片手で、だ

恐ろしい膂力と繊細な技術を両立させていた

片手を斧の上に置き、なんとか跳躍することで回避した

仕方なく一旦距離を取った私はどう攻めるか思案する

ただ突つ込むのではあの斧の餌食になるだけ、しかし回避したところでその方向に向
かつて再び斧が襲いかかってくる

「どうした？攻めてこないのか」

「どう攻めたものかと思ひましてね。思っていたよりもずっと強くて困ってるんです
よ」

「ふん、それは名譽なことだな」

軽口を叩く間も油断や隙が一切生じない

その後暫く攻防を繰り返したが、どれも決定打にはならなかった

この男は本当に強い、なるべく屍の力は使いたくないし、生身でどうやって倒すか……
こうなったら一瞬で背後を取って脳をふさぶり、失神させよう

流星に目で追えないほどの速度で後ろを取れば反応が遅れるだろう

そう決めた私は脚に力を込め、一気に背後へ回り込む

そのまま後頭部へ拳を突き出した……のだが

「甘いわ!!」

「くうっ……!」

脇の下から斧の柄で突いてきた

目には見えていないはずなので気配だけを頼りに私の正確な位置を把握しているよ

うだ

避けるのが間に合わないため柄を掴んで止める

全力で押さえつけなければ私の腹に突き刺さるのではないか、そう思えるほどの威力
があつた

すると今度は柄を振り上げ、前方に向かって振り下ろした

全力で掴んでいた私は当然の如く地面に叩きつけられた

レンドラーの身長に斧の柄の長さも相まって3 m強の高さから彼の腕力によって高
速で落下した私の身体には凄まじい力がかかる

普通なら背骨は粉碎骨折し、臓器も折れた骨が突き刺さったりして絶対に無事では済まない

余裕で死ぬ

そう…普通ならば

しかし私には屍の再生能力があるし、産まれた時から強靱な肉体へとなるよう修行させられてもいた

更に屍化したことで防御力は上乘せされている

そしてこの事はこちらの世界では誰にも話していない

そもそも私が召喚獣だと知っているのはフェア、リシエル、ルシアの三人だけだ

私が特異な力を持っているなど考えつきはしないだろう

レンドラーも私の口から溢れる血を見て私が瀕死だと確信したようだ

表情が相手を打ち負かした者のそれになっている

この血が私がわざと舌を噛み切ったことによる血だとは気付いていない（舌はその直後に再生している）

本当に相手が死んだのか確認をして来ない

「我輩の勝ちだな。なかなか強かったぞ、アウルよ。出来ることなら貴公とはもっと長く戦いたかったがな…」

だからそうやって油断して背を向けるのだ

闘気すらも霧散したレンドラーに向かって跳躍からの踵落としを決める

脳天に直撃した一撃でレンドラーは崩れ落ちた

「がはあっ……！何故だ……何故、死んでいない!? 確実に殺したはずで、あろう!!」

「次からは相手が死んだかどうか、きちんと確認することを勧めます。もしくは首でも落としてから構えを解くべきでしたね」

「……貴公は、何者だ？」

「ただの居候ですよ。今はね」

「そうか……殺さぬのか？」

「貴方を殺す理由がありませんから。貴方はどうしようもない屑でもなければ、死ぬことでは救われない終わった者でもありませんから」

「それ以外の者は殺さぬということか、なるほどな」

そう言うのとレンドラーは立ち上がり、数歩ほどフェア達の方へ歩いた

あれを喰らって立ち上がれるのか……かなり回復が早いな

流石にまだ戦闘は難しいだろうが、こんな鎧を着て普通に立って歩ける時点でおかし

い

頭から血も出てるといいうのに

戦っているフェアを見ていたレンドラーは訝しげな顔をしている

「どうしたのです?」

「あの小娘の動きだが…何処かで見たような…もしや」

「彼女を知っているのですか?」

「いや、小娘のことは知らん。だがあの動きは知っている。アウルよ、あやつの父親は冒険者などしておらぬか?」

「それを私から言うことは出来ません。本人に確認して下さい」

「そうか、ならばそうするか」

そうして私達はフェア達の戦闘を見ることにした

とは言え私とレンドラーが戦ってる間にフェア達の優勢で進んでいたし、いつの間にか乱入したグラッドとミントの加勢で勝負は決したようだ

レンドラーとフェアが向かい合う

私は近くにあった木に背中を預けて事の成り行きを見守ることにした
その選択が間違っていたことを知るはその直後のことだった

第九話 屍人VS將軍（フェア視点）

アウルさんがあのでっかいおじさんを相手してくれるみたいだから私達で他の人達と戦うことになった

剣兵が三人、槍兵一人、弓兵が二人で大剣を持ったのが一人

中でもあの大剣を持ったのは他の人とは気迫が違う、きつと一番強い

流石に私でも力の押し合いになったら勝てないかな…

「それでフェア、これからどうするの?」

緊張した面持ちでリシエルが聞いてくる

「そうね…基本的には私が前衛で大暴れするからリシエルは召喚術で一人一人倒していつて欲しいの、出来る?」

「出来なくはないけど…今日持つてきてるのは溶接作業用のだけだからそんなに威力はないわ」

「そっか、じゃあ敵への牽制に使う方向で行こう。それで相手を怯ませてその隙に私が倒す。ルシアンはその盾を活かして基本リシエルの護衛、余裕があれば遊撃して欲しいけど…無茶はしないでね?」

「うん、分かった!」

ルシアンも気合十分みたい

だけど気合が入りすぎて無茶しないようにだけ気を回しとかないとね

「子供とて容赦はせんぞ!」

一番私達に近かった剣兵がそう言つて剣で斬りかかつてきた

容赦しないとは言つてるけど実際には斬るのではなく、剣の腹で叩こうとしているのが分かる

多分気迫と言葉で相手の戦意を挫いてお互いあまり怪我のないように捕縛しようとしてるんだろう

やっぱり昨日の奴らとは圧倒的に違う、実力もそうだけど何より精神が段違いだよ

でも大人しく殴られるわけにもいかないから振り下ろして来る剣の側面、今の状況なら刃にアウルさんから借りたナイフを当てて剣筋をずらした

「なっ!?!」

「やあっ!」

動揺して動きが一瞬止まった隙を狙つて左手の拳で横から顎を突いた

「うっ…」

呻き声を上げた敵は脳を揺らされて意識を保つていられなくなつて崩れ落ちる

そんな敵から剣を奪うとナイフをシースに戻した

アウルさんのナイフはかなり頑丈で手入れも行き届いているから斬れ味も凄いいし、持ち手はまるで手に吸い付くようで握り易い

更には振った時のガタツキなんかも一切ないから正直物凄く使い易いんだけど、やっぱりリーチが短いのは不利だ

敵には槍兵や弓兵がいるから本音を言えばもつと長物が欲しいけど、ないものは仕方がない

それに敵が手堅く坂や段差の上を陣取ってるから鹵獲にそんな時間もかけていられないのよね

早くしないと上から弓で射られるかもしれない、まずは速攻で弓兵を片付けるべきだね

「リシエル、ルシアン。私が合図したらその段差を駆け上がったあその弓兵に電撃戦を仕掛けるよ。私が奥の方をやるから二人は協力して手前のを頼むね」

「分かったわ、私の召喚術を見せてやるわ」

「う、うん！」

私は二人にしか聞こえないように小声で作戦を伝えると二人とも了承してくれた

一瞬でも気が逸れてくれたら行きやすいんだけど、中々の集中力でこつちを補足して

てタイミングが掴みづらい

そんな時、突如として大きな音が鳴った

どうやらレンドローって人があの大きな戦斧を地面に叩きつけた音みたい

その音で敵の注意が逸れたのに気が付いた私はそれを逃さないようにすぐに合図を出した

「今だ、行くよ！」

「まっかせなさああい！」

「やああああ！」

いきなり走って近寄ってきた私達に弓兵は慌てて矢を番えようとするけれどそれよりも早く私は奥の弓兵に接近して弓を剣で斬り裂いた

相手は信じられないものを見る顔をしてる

確かに弓兵がいた場所は距離こそさっきまで私達がいた場所に近いけど、結構な段差がいくつもあって登るのに時間がかかるから位置としては悪くない

けどこっちはちっちゃい頃からこの街で遊んできたし、リシエルの悪ふざけに付き合ってきた関係でこういう地形を素早く移動するには慣れてる

身体の動きを阻害する鎧もないし、虚を突けば遅れを取ることはない

弓を壊した後はアッパーで顎を打ち抜いて気絶させた

人を素早く気絶させるのに顎を狙うのは最適解の一つなのよね

「スタンビット！」

「ぐうう……！」

リシエルが召喚術をもう一人の弓兵に対して放ってる

溶接用のレーザーが鎧を焦がす

金属は熱伝導率が高いからきつと鎧の上からでも熱でダメージは与えられると思う

そして怯んだ隙をルシアンが剣と盾を使って殴ってるんだけど……イマイチ全力を出せてない

ルシアンは元々気が弱いのもあるけどそれ以上に優しすぎる性格が災いしてるみたい

「ああ、もう！こうやるの、よ!!」

「がっ！」

見かねたリシエルが持ってた杖で思いつき叩いて気絶させた

「情なんてかけてたらこっちがやられるわよ、しっかりしなさいルシアン！」

「う、うん……」

ルシアンのおことが心配だけど、近くにいた剣兵が突撃してきたから気をそつちに向け

る

真つ直ぐ突撃してくる相手には…ギリギリで避けてからその突撃の威力を利用して
顔面を叩く！

「ゲバアツ！」

鼻が折れたのか鼻血を出しながら仰向けに倒れる剣兵を後目にリシエル達の様子を
確認する

どうやら怪我もなく無事みたい

このまま残りも倒していきたくないんだけど…敵の雰囲気が変わった

これまでは子供を相手にしてることからある程度の油断とかなりの手加減があった

だからこそ速攻で弓兵を片付けることが出来たし、剣兵の二人も倒せた

だけど後の三人からはもうそんな油断は感じられない…

多分私達が油断出来る相手じゃないことに気付いたんだと思う

手加減はしてくれるだろうけどそれは死なない程度のもに変わるって思った方が
良いね

「どうしたのよ、このままやっちゃうわよ」

「ダメよ、リシエル。あいつらの空気が変わってる…きつとそこそこ本気で相手してく
るから、迂闊に攻められない」

「そんな…どうすればいいの？」

敵の方へ突撃しそうなリシエルを留めるとルシアンから不安そうな声があがった
敵を一人ずつ誘き出して三人で囲んで各個撃破…は無理ね

確かに誘い出せば出来るけど、多分そんな手にかかるほどもう甘くはないはず
あいつらも三人で固まってこつちをしつかりと見据えて隙がない

ホントにどうしよ…そう思ってた時だった

「デメエら！子供相手に何のつもりだ!!」

「大丈夫、みんな!」

「グラッド兄ちゃん、ミントお姉ちゃん!」

騒ぎを聞きつけてか、グラッド兄ちゃんとミントお姉ちゃんが加勢に来てくれた

グラッド兄ちゃんは普段こそ見回りなどの簡単な仕事や事務作業しかしてないけど、
軍で鍛えて一街任せるに相応しいと判断されてこの街に来ている

一見すると爽やかな好青年にしか見えないけど、その強さは頼りになる

ミントお姉ちゃんもほんわかおっとりしていて戦いとは無縁そうに見えるけど、蒼の
派閥に属する一流召喚士

召喚術に関する技能はかなり高くそれは戦闘でも発揮されるの（フェア達は知らないがミントには帝国の召喚術事情を監視し、不穏な動きが見られた場合は直ちに報告す

る任務もある。それだけ派閥から信頼されているのだ)

そんな二人が加勢してくれたからには百人力、こつちが圧倒的に優勢になった
「取り敢えず話は後で聞く。今はこいつらに集中するぞ!」

「うん、分かった!」

「リシエルちゃん、私に合わせてくれる?」

「合点よ!」

「僕は二人を守ります!」

「お願いね、ルシアン君」

私とグラッド兄ちゃんが前衛、リシエルとミントお姉ちゃんが後衛、そしてルシアン
が後衛の護衛及び遊撃となり陣形を組む

対して相手は大剣使いが前に出てきて剣兵と槍兵はその後ろで構えている

ギリギリと間を詰めていきお互いの間合いが重なった瞬間、前衛同士が動いた
「はあつ!」

気合と共にグラッド兄ちゃんが槍を突き出す

それを大剣使いは剣で防ぐと同時に踏み込み、横風で剣を振るおうとする
「やああ!」

そのままグラッド兄ちゃんが槍を突き込み倒そうとするが、流石にそれを許すほど敵は甘くはない

剣兵が大剣使いの後ろから飛び出して剣を振るってきたことでグラッド兄ちゃんは防御せざるを得なくなる

そこに敵の槍兵が攻撃しようとしてきた

「行くよ、リシエルちゃん！」

「まっかせなさい！」

しかしその槍兵に向けてリシエルとミントお姉ちゃんが召喚術を發動する

「スタンビット！」

「ブレイドボア！」

リシエルのスタンビットが槍兵の鎧を焦がし、怯ませた直後にミントお姉ちゃんの召喚術が炸裂する

ブレイドボアは獣属性の召喚獣で巨大な牙が横方向に向かつて生えているイノシシのような動物だ

身体もかなり大きく、そんなイノシシの全速力の突進を喰らった槍兵は吹っ飛ばされる

強力な召喚獣だけど私とグラッド兄ちゃんがすぐ近くにいる残りの敵には纏めて

吹っ飛ばす危険があるので使えない

これはブレイドボアに限らず殆どの召喚術は味方を巻き込まぬよう細心の注意を払わないといけないの

「ううっ……！」

大剣を抑えてた私が流石に力負けしてるのか徐々に押されてきちゃった

「フエア、俺と代われ！こっちを頼む！」

「分かったよ……つえりやあああ！」

「グッ……！」

私は力を振り絞って剣を振ることで大剣使いの姿勢を少しだけ崩せた

そのまま逃れてグラッド兄ちゃんが相手してた剣兵に突撃する

私に意識を向けた剣兵から離れてグラッド兄ちゃんは大剣使いと戦いを始めた

私は剣兵と戦ってるんだけど完全に油断がなくなつて中々決定打が打てない

その時後ろからリシエル達の魔力の高まりと走る足音が聞こえてきた

「フエアさん！」

ルシアンの名前を呼ぶ声を聞いて何をするのか分かった私は一度鏢迫り合いをするフリをして、それに乗ってきた剣兵が剣を合わせようとした瞬間に後ろに跳ぶ

相手の剣が空を斬って少しだけ体勢を崩したところに盾を前に構えたルシアンが突

撃した

それによって完全に体勢を崩して転倒した剣兵に向かって召喚術が放たれた

これでこの剣兵も戦闘不能、残りはあの大剣使いだけ！

「どりゃあああ！」

「ガハッ！あ、ぐ…！」

グラッド兄ちゃんの方を見ると槍の石突で大剣使いの頭を打つところだった

どうやら槍のリーチを活かして相手を近づけさせず、集中力を欠いて隙を見せた瞬間に叩き込んだみたい

あの大剣使いをたつた一人で倒すなんて、やっぱりグラッド兄ちゃんは強いや

その大剣使いは意識こそ保ってるもののもう戦闘行為は無理そうだった

「我輩の軍団が破られるとはな。思ったよりやるではないか。時にその小娘よ」

「え、わたし？」

急に声をかけられて少しキョトンとしてしまった

それがいけなかった

「ぜりゃあああ!!」

「なっ…！うぐう…！」

レンドラーがいきなり大斧を振るってきて、私はなんとか剣で受け止めた

…いや、受け止めさせられた

私を受けられるようにわざと速度とか威力を調整してる

何の為にそんなことしてるのか分からないけど、すごい技量…アウルさんにやられてるのにここまで出来るなんて

そのまま私は動けなかったんだけどアウルさんがすぐにレンドラーを蹴り飛ばして助けてくれた…え、蹴り飛ばした？

あれ鎧も含めたら多分200kgはあると思うんだけど

「…何のつもりです？レンドラー」

「なに、確かめたいことがあったのでな。しかしこれで確信出来たぞ」

尻餅を付いていた私をアウルさんが助け起こしながら問い質してる

レンドラーは何か確かめたかったみたいだけど、あれでいったい何を確かめるっていうの…？

そう思っていたらとんでもないことを言われた

「貴様…あの冒険者の娘だな!!」

「なあ…!」

「この人、お父さんを知ってる!？」

「あの人のこと…知ってるの?」

「知らないでか！我等の目的を根本からぶち壊した、張本人なのだからな!!」

「……。」

「何とも奇妙な縁だな。父と娘の双方と違う時、違う場所で相對することになるとは思わなかったぞ。安心しろ、貴様に復讐などはせん。だが我等には竜の子が必要なのだ、容赦なく行かせてもらおうぞ」

「…そう」

「小娘よ、名は？」

「…フェアよ」

「フェアか、覚えておこう。今回は引き下がってやる。しかし次は必ず竜の子をもらい受ける！」

そう言つてレンドラーは去つていった

私達が倒した騎士達もいつの間にか姿が見えなくなつていた

多分レンドラーの威風に皆の目が奪われてる時に退却したんだと思う

それも狙つてたのかな…

それにしても

「フェアちゃん？」

ミントお姉ちゃんが私を心配して声を掛けてくれてるけど、私には聞こえてなかった

今まで全く親らしいこともせず、無茶苦茶な修行を強要して一人だけ残して何処かに行つてそれから迷惑をかけられた人達から色々言われたり嫌がらせを受けたり：私の人生を壊して壊して壊して、それでもなんとか自分の力である程度安定した生活を手に入れたつていうのにそれすらも壊していくんだ……

よ……………！
どれだけ私に迷惑をかければ……怒らせれば……寂しい思いをさせれば気が済むつての

「お父さんさんの……お父さんの……」
「フエアちゃん!？」

「ぶわっかあああああ!!!」

私の魂からの叫びが街に木霊した

第十話 話し合い

前日の戦いから一夜明けた午後

店にはフエア、リシエル、ルシアン、グラッド、ミント、ポムニット、そしてアウルの七人が集まっていた

「それじゃあ、あの竜の子はお前らが最初に見つけた時から得体の知れん連中に狙われていたってことか」

「はい…」

集まった理由は勿論昨日のことについて、竜の子のことについて説明するため

「そんな危険な目にあっていらしたなんて…どうして隠すようなことをしたんですか?!」

いつも明るいポムニットも心配心と怒りを顕にしている

そんな彼女の様子に子供達は目を伏せていた

「アウルさんも、どうして止めてくれなかつたんです!」

「そうですね…一番の理由としてはこの子供達が竜の子を拾うことに対してしっかりと責

任を持ってやっていこうとしていたからです。子供の真摯さを大人の理屈でねじ曲げるなんて大嫌いですしね」

「だからって…危険な目に合わせていいわけがないじゃないですか!」

「竜の子を拾った時点ではそこまでの危険はないと判断していました。襲ってきた連中の練度は低い、私達には竜の子にどれほどの価値があるのかも分からない。当然このようなことが起こると予測出来るはずありません」

実際にはこうなる可能性は十分に予期していた

だが少し嘘を吐いてでも落ち着かせないと話も出来ないだろう

「ただ竜という存在が凄いものだという漠然とした理解だけは分かっていました。だから竜の子のことに關して詳しく知るため後日ミントさんを訪ねて話を聞き、これからのことを検討していく予定だったのです。それまでは騒ぎを広めて混乱を招かぬようにしようと思いました。昨日のような人達を寄せ付けないためにも」

「ですが実際に現れたじゃありませんか!!」

「極小規模の、かなり抑えられた人員が来ましたね。もしも隠していなければその騒ぎを聞きつけて確実に手に入れるため、もつと多くの戦闘員を導入していたでしょう。隠していたからこそあの程度で済んだのです」

「ですが…!」

「まあまあ、落ち着いて下さいポムニットさん。筋は通ってますし、彼女が皆を守ってくれたことも事実なんですから」

「むう…」

ミントに宥められて一応は納得してくれたいらしい

納得しきれていないのか未だ不満気な表情ではあったが、これでやっと落ち着いて話が出来る

責任の押し付け合いをするために集まったんじゃないのだから

「じゃあこれまでのことはこれで良いとしてだ、問題はこれから先どうするかだな」「ですねえ…」

「そもそも昨日の奴らはいったい何なのよ」

「少なくともその辺の野党とかじゃないのは確かだ。装備もそうだが特に戦い方が違う。有利な位置取りや状況に合わせて即座に陣形を組むなんて正規の軍でもなけりや無理だからな」

「それに最初に私達を襲った奴らとも繋がりがあるみたいだけど…全然似てなかったよ」

「部下と言っていましたか、それだと武器が違うのが不可解ですね。恐らく最初は別の軍団だったけど組織に属してからあのレンドラーが率いている剣の軍団の配下となっ

た、というところでしょうか」

「そうなる可他にも様々な軍団があると考えた方が良いでしょうね…そしてそれらを束ねる頭がいるはずですよ」

「僕達が会ったのは敵の一部でしかないってこと？」

「そういうことだ。それが殺しも厭わない犯罪組織だとしたら事態は最悪だ」

「犯罪組織!?滅茶苦茶物騒な相手じゃないですか!!」

「ああ…だからこそ俺は軍で保護してもらうべきだと思う」

「そうしたら…あの子は大丈夫なの？」

「勿論、軍が保護しさえすれば竜の子だって安心して…」

「嘘だ!!」

突然大声が響いた

何事かと思つて声の方を見るとルシアンが怒りを湛えた表情をしていた

困り顔は何度も見るが、怒っているのは初めてだ

「と、突然どうしたのよルシアン」

「僕は知ってる…本で読んだから知ってるんだ。帝国軍には珍しい生き物を研究する機関があつて、あの子はそこに連れてかれちゃうんだ!」

研究機関…そこに連れていかれるとなるとどう考えても確なことになるだろう

「そんなっ!」

「…本当なの? お兄ちゃん」

「そりゃ、まあ…放し飼いにするわけにもいかないし…。」

「そんなのあんまりじゃないの! 結局は酷いことされるんじゃない?!」

「落ち着いて、リシエルちゃん。竜はとっても貴重な研究資料なの…それは軍でも派閥でも変わらないわ…。」

「そうはさせない、そうならないように俺が掛け合う!」

「でも絶対じゃないんではよ!」

「可能性はないでしょうね。一街の駐在兵士が掛け合ったところで国が動くわけがない、ましてや今回は価値のありすぎる竜の子です。黙殺されるのがオチでしょう」

「酷すぎるわよ…! そんなの悪者に捕まると変わらないじゃない!!」

その言葉にミントとグラッドが息を飲んだ

自分達の属している組織が悪者と同じ扱いをされ、それを否定出来ない

「落ち着いて下さいまし、お嬢様」

「でも!」

「お嬢様が竜の子のことを気にかけていらつしやるのは分かります。ですが、私は大人に任せるべきだと思います」

「どうしてよ、ポムニツト!!」

「お嬢様達があの子を心配するのと同じように、私も皆さんのことが心配だからです」
「…っ」

長らく面倒を見続けてくれたポムニツトの真剣すぎる言葉にリシエルは何も言えなくなつてしまった

リシエルとしては竜の子のことを気に入って可愛がつているし、敵に奪われるのも軍や派閥に預けるのも同じく受け入れ難いこと

出来ることなら自分達で面倒を見たい、しかしそれが出来るのかと言われれば…普通に考えて厳しいだろう

「…アウルさんは、どうするおつもりで？」

グラッドが聞いてくる

「そうですね…私達で世話をしたいと思えます」

「え…?」

「何故、そう思うんです?」

「私は外道の行いが大の嫌いです。故に敵に奪われても軍や派閥に預けても研究の名の元に弄られ生物の尊厳など無視される、そんなこと許せるはずもないでしょう」

「それは、そうかもしれませんが…しかし!」

「もしも竜の子を研究機関に渡そうものなら私は全力で抵抗しますよ。国を敵に周そうと知ったことではありません。しかし、そうしないでくれるのならこの子達のこととは何があっても護ると誓います」

私の覚悟を感じたのか何も言えなくなってしまうたようだ

暫く沈黙が続く中、ミントが口を開く

「フエアちゃん、貴女はどうしたい?」

「え、わたし?」

「うん、大人達に任せられた方が良いと思う?それとも自分達で面倒を見たい?」

「私は…どつちも選べないよ」

「なによ、それ!」

フエアの答えにリシエルが食ってかかる

投げやりになっているように思ったのかもしれない

しかしフエアはそんな子ではないし、真剣な顔から察するに何か考えがあるのだろう
「ねえ、みんな。私達一番大事なことを見失ってないかな?大人に任せるにせよ、自分達で見るにせよ…大切なのはこの子がそれで幸せなのかってことだよ」

「…っ!」

「まずはどうすればこの子が幸せなのか…それを考えるのが拾ってきた私達の責任だと

思う。だから私には選べない、選ぶのは…」

言い終わる前に竜の子がフェアの元へ行き、しがみついた

決して離れないようにしっかりとくっつく竜の子を見て、もう結論は出ていたことを悟った

「…答えは最初から決まっていたみたいだね？」

「もう、こんなのまるで私達が悪者みたいじゃないですか」

「ははは、まあまあ」

ミント、ポムニット、グラッドが表情を崩して言い合う

「どうやら認めてくれたらしい」

「…それじゃあ！」

「うん、君達と一緒にいるのが良いみたいだしそれで良いんじゃないかな。私も出来る限り協力するよ」

「俺も協力するから遠慮なく頼れよ！」

「…仕方ないですわね。私も旦那様に知られないように致しますわ」

「やった、ポムニット大好き！」

「もう…」

一番渋っていたポムニットも納得したようだし、これで一件落着のようだ

その後ミント達はそれぞれの仕事に戻り、私達はこれからどうして行くかを相談した。これから先ずつとこの子の面倒を見ることは出来ない。小さいうちはともかく大きくなったら流石に隠せないし、そもそも人間とは寿命が違
いすぎる

色々話した結果、親竜を探しに行くことに決定した

どうして卵が降って来たのかは分からないが、卵がある以上親はいるはず

その親を見つけて引き渡すことさえ出来ればこの子の安全は保証されたようなもの。この子は私達と一緒にいたがるかもしれないが、その時はその時で考えればいい。少なくとも親を見つけることが悪手になることはないだろう

それにしても…

先程のフェアの言葉を思い返す

自分達の都合ではなくこの子にとって何が幸せなのかを考えるのが一番大事

自分の未熟を突き付けられたかのような衝撃を感じた

こんな簡単なことを失念していた私は人としてまだまだなんだろう

いい意味での人らしさ、これを私は学んでいかなければ

これからの予定を決めて決意を決めるフェア達を見ながら私は心の中で別の決意も固めていた

因みに夕食はフェアが妙に張り切って柔らかかくて存在感があらながらもしつこくなく喉を通り過ぎるステーキに濃厚でどこかホツとするような味わいのシチューなど、今まで以上に美味しいものであった

勿論リシエル達はブロンクス宅で夕食を摂るためこれを食べることは叶わない
私は少しばかりの優越感に浸るのだった

第十一話 天使娘との出会い

竜の子の親を探すと決めた翌日、私達は街の出口に近い広場に集まっていた

取り敢えず手掛かりを探すために竜の子を拾った場所に再び行くことにしたので

当然ながら敵…竜の子を狙う一団のみならず野盗やはぐれ召喚獣（召喚した者の元から逃げ出したりなどして野生化した召喚獣。基本的に人間を見ると襲いかかってくるため危険）も出現するため武装している

そんな中武器を持たない者が約二名、一人は私だ

私はそもそも武器を持たない方が得意だからいい、問題なのはもう一人だ

「で、どうしても着いてくるつもり？」

「当然ですわ！ブロンクス家のメイドたるもの、たとえば火の中槍の中でも着いていきますとも」

「でも、危険かもしれないんだよ？」

「なら尚更着いて行かないわけにはいきません！お二人に怪我をさせるなど以ての外です!!」

そう、ポムニットだ

彼女はメイドとしての能力は凄まじいのだが、如何せん戦いとは無縁だ

戦闘が予想される場所にはあまり連れていきたくないのだが…

「…はつきり言つて足手まといなのよ」

「えうう…」

いや、気持ちは分かるがそこまで言うことないだろうに…泣き顔になってしまった
じゃないか

「まあまあ、そう無碍にしてやるなって。お前達のことか心配で着いてきてくれてるんだぞ？」

「それは、分かつてるけど…」

「それに戦いに参加しなくても出来ることはあるんじゃないかな。怪我の手当とか応援とか」

「それもそうだね。よろしくね、ポムニツトさん」

「はい、全力でサポートいたしますわ！」

満面の笑みが咲いた

二元気を取り戻してくれたようだなによりだ

「もう、仕方ないわね…」

「ありがとう、ポムニツトさん！」

リシエルは呆れた調子で言ってるが、満更でもなさそうだ
素直じゃない娘だ

ルシアンみたいに素直になれば良いのに

「それじゃ、行くとするか！」

「「おー！」」

こうして私達は出発した

はぐれ召喚獣となったスライムなどに襲われたりはしたものの誰も怪我することなく目的地に着いた

というかあのスライムたちは脆すぎる

拳圧だけで吹き飛んで崩れるくらいなのにどうやって生きているのやら…

お陰で殺さないように手加減するのにかなり苦労させられた

それは兎も角、星見の丘に着いた私達は早速残留物を探し始めた

しかし何一つ残されてはいなかった

あるとすれば卵が落ちた跡のクレーターとその中心に疎らに残っていた卵の殻の欠

片のみ

剣などを持ち帰るのは分かるがなぜ卵まで…あの卵にも何か魔力が宿っているのだろうか？

「なくんにもないわね。拍子抜けだわ」

「何もないことも想定して来たんだから文句言わないの。それに分かったことだってあるよ」

「何が分かったつてのよ」

「ここで戦闘をしたにしては痕跡がなさすぎる。鎧を着てたんならその重量から足跡が出来ても良さそうなもんだ。なのにそれすらもないつてのは逆に不自然だな。自然に消えるほど日は経ってない」

「つまりは痕跡を消していった。それをすることの意味を分かっているし、実行出来るだけの余裕が敵にはあるの」

「なるほど…」

早々に飽きたリシエルにフェアとグラッドとミントが現状から把握出来ることを教えていた

ルシアンもそれを聞いている

ポムニツトは何故かレジャーシートを広げている

よく見ると大きめのバスケットもあり、中からは生野菜に加工肉、卵やパンの香りが漂っている

おそらくはサンドイッチだろう

更にエプロンの中から持ち運び用の大容量ポットまで取り出している

：ピクニックでもするつもりなのだろうか？

遊びに来たわけではないが、これ以上調べても何も無さそうだしここらで休憩を入れるのもありかもしれない

休むことで見えてくるものだってあるはずだ

そこまで考えて用意してきたのだろうか…ポムニットならそれも出来そうな気がする

「皆さん、調べるのはそれくらいにして一旦休憩しませんか？」

準備を終えたポムニットがみんなに声をかける

その言葉にみんな集まって休憩しだした

私もその中に入り、わいわいと楽しんだ

因みにポムニットさんの作ったサンドイッチはとても美味しかった

彼女の淹れた紅茶との相性が抜群で思わず舌鼓を打ってしまうほどだ

奥深さは流石にフェアの料理に及ばないが、それでも十分過ぎる

休憩も終わり、片付けも終わったところで私達は少し範囲を広げて搜索することにした

「…いや、しようとした

私の耳に複数の機械の駆動音が聞こえたのだ

「…リシエル、ちよつと良いですか？」

「ん？どうしたのよ、急に」

「ロレイラルから召喚される機械類ですが、こんなところで使用されたりしますか？」

「いや、しないわね。まあ土地を開発するとかなら可能性はなくてもないけど…そんな話も聞いてないし予定はないはずよ」

「なるほど、つまりこれは…」

「なによ、どうしたつてのよ」

「先程から機械の駆動音が聞こえます。それもそれなりに数がありますね」

「なんですつて!?!」

リシエルの大声に皆が反応してこつちに来た

事情を説明すると皆一様に驚いていたが信じてくれたらしく、私の先導で音の発生源

に向かうことになった

暫く歩くと大量の小さな機械が蠢いていた

何かを取り囲んでいるように見える

そしてその中でも人型で緑髪をした：機械人形かな？が目立つ
おそらく司令を出しているのはあの個体だろう

「ねえ、ちよつとただ事じゃなさそうよ」

「うん、そうだよね…」

「おい、あれを見ろ！あいつら女の子を囲んでるぞ」

「ど、どうしてそんなことに」

「詮索するのは後だよ！今は助けないと」

「そうですわ！手当はおまかせ下さいまし！」

どうやら囲まれているのは女の子のようだ

しかしその娘も普通の人間には見えない

と、そんなのは後で良いだろう

あの子を助けることにした私達は近付く

接近に気付いた相手の司令塔らしき個体が声を発する

「リビエル確保。But, 不確定要素アリ：ppprrrr」

電子音を鳴り響かせている

何をしてくるか分からない以上迂闊には近付けないな…

そんなことを思っているともまるで電子レンジで温めが完了した時のような音が聞こえてきた

「演算終了…結論、排除」

周囲のロボット達が不快な電子音を鳴り響かせたかと思うと、いきなり銃弾を撃ち込んできた

「わわわわわわ、撃ってきたぞー！」

「失礼、借りますよー！」

私は即座に近くにいたルシアン of 剣を鞘から引き抜くと、仲間 to 被弾する軌道の弾丸を弾き飛ばしていった

流石に素の状態 de 出来ることではないので少しだけ屍の力を使わざるを得ない見たところ銃弾を飛ばして来てるのは三体

弾を弾きつつ足で石を蹴り上げて左手で掴む

それから狙いを付けて指で弾く、命中したよう de 銃身の破壊に成功した

それを続けて全ての銃身を壊し終えてからルシアンに剣を返した

「相変わらず規格外だね…でもお陰で助かったよ、アウルさん！」

「たまげたな…何をどうしたらそんなことが」

「言ってる場合じゃないでしょ！とにかく今はあの娘を助けるわよ!!」

「そうね、やらなくっちゃ！」

「私は一先ず後ろに下がってますわ！」

「僕も…やってやる！」

気合いを入れた私達は機械の軍団に向かっていった

片腕に小型のドリルを装備したものやプロペラのようなもので浮遊しているもの、四本脚で動いて上部から金属棍のようなものを出して突き出して攻撃してくるものが何体もいる

四本脚のやつは銃を装備しているものもいたがそれはさつき私が壊した
まずは突き出されたドリルを躲けて上から拳を落とす

思っていたよりも頑丈ではないのか装甲が壊れ、配線が飛び出す
動かなくなったことを確認し、プロペラのついた機体を蹴り潰す

フェアとグラッドも問題なくロボット達を相手どっている

そんな中リシエルが苦々しい顔をしていた

「しまったわね…」

「どうしたの、姉さん」

「あいつらロレイラルの召喚獣だから私の召喚術が効きにくいなのよ。ほら、習ったでしょ？ 同じ世界の攻撃は威力が半減するって」

「そ、そっか…それじゃあ姉さんは戦い辛いの？」

「ええ、そうよ。でもやるっきゃないわね！」

そう、召喚術は同じ界…例えばロレイラルの召喚術をロレイラルから来た召喚獣に撃つと威力はかなり減る

シルターンの召喚術はシルターンの召喚獣には効きにくい

また、召喚術以外にも呪術や妖術といった特定の界の属性を持つ攻撃も同じ界の召喚獣には効きにくい

つまり今回機属性の召喚術を使うリシエルは相手にダメージを与え辛いのだ
「その分私がフォローするから大丈夫だよ。ブレイドボア！」

獣属性の召喚士であるミントが召喚術を放つと、あの時と同じ猪が二頭現れてロボット達三体を同時に潰した

流石は蒼の派閥の召喚士といったところか

「ううう……！」

苦しそうな声に顔を向けると、ルシアンがドリルによる攻撃を必死に盾で防いでいた一応身を守ることは出来ているがあれでは反撃は疎かはずれ防御を剥がされかねない

見かねた私は接近し、ドリルを突き付けているロボットに踵落としを喰らわせる

マトモに受けたロボットは黒煙を上げながら地面に埋まった

「大丈夫ですか、ルシアン？」

「は、はい……助かりました！」

「焦ることはありません。落ち着いてゆっくりと対処していきましょう」

「……はい」

少し元気がないがそれは後回しにせざるを得ない

本当は戦闘中に意気が沈まるのは大変よろしくないのだが、フェアやグラッドも一旦こちらに戻って来たしリシエルやミントもルシアンを気にかけている

ルシアンに何かあってもこれで守れるだろう

「味方ノ負傷過多、ヨツテ戦線ニ参加シマス」

それまで傍観していた人型の機械人形が戦況を見て自分も戦闘に参加することを決めたようだ

「ごつごつした右手の装甲が開いて変形し、あつという間に高速回転するドリルが現れた」

さつきまで相手していたロボットは少し小さかった上に動きも鈍いのでドリルと言えど大した驚異ではなかったが、この機械人形の動きは俊敏で下手をすればあのドリルで真芯を貫かれるだろう

「あいつの相手は私がいず、皆さんは残りの機械達をお願いします！」
「了解、まっかせなさい！」

指示に近いお願いをして私は緑髪の機械人形と相対した

どうでもいいことだが、フェア達にロボットと言っても通じなかった

「いや私のいた世界で使われていた言葉の一部は意味不明なものに聞こえるらしい」

そんなことを考えていると機械人形がドリルを突き出してきたので横に回避する

今までのものと変わらない単調な突きだが、この個体は思考能力が他のものより優れているので警戒を怠らないでおく

すると思った通り腕を振り回してドリルを当てようとして来た

しつかりと予期出来ていた私は後ろに跳んでそれを避ける

腕を振り回した遠心力で少し回転して見えた背中に蹴りを放とうとした…のだが

腰の辺りから尻尾のように伸びたコードをこちらに向けて伸ばしてきた
よく見ると先端はプラグになっておりそこからバチバチと電流が目に見えるほど流
れていた

あれを流されては流石に無傷では済まない

身体を後ろに倒して回避、そのまま地面すれすれの状態で後退する

体勢を元に戻すと、相手もしっかりとこちらを見据えていた

まさか自身についている電気コードを操って攻撃するとは：

その後も攻撃を試みるが、ドリルと電撃のコンビネーションが邪魔で近付けない

このまま膠着状態になるのも頂けないので勝負をかけるにいくことにした

まずは先程と同じように接近し、白兵戦を挑もうとする

しかし今度はかなり長い時間貼りついて回避もかなりギリギリにした

そうして準備を終えた私は距離を取る

「同じ事ノ Repeat edly, ソレハ通用シナイ」

「繰り返し？それはどうでしょうか」

「…？——ッ!？」

突然上から大量の石が断続的に降ってくる

私はただ接近戦をしようとしたわけではなく、この攻撃のために石を上空に蹴り上げ

ていたのだ

降り続ける石に何度も何度も打たれ続け、遂には両膝を付いた

流石に機械の装甲でも耐え切れなかったようだ

傷付き、黒煙も少し出ている

「想定外ノ、事態発生…撤退シマス」

そう発声した直後に強烈な光が放たれ、何も見えなくなってしまった

咄嗟に目を瞑りはしたが、目の前でやられたせいで閉じた瞼の上からでも痛みが走った

そのせいで数秒ほど視界を奪われてしまったので音で状況の把握に努める

どうやら本当に逃げていつているようだ

殲滅が目的ではないし、敵の一味かも分からないので放置で良いだろう

あの様子では暫く再起不能だろうし

それよりも襲われていた娘だ

ポムニットによって既に手当も済んでいるが、気を失っており目が覚める気配はない

そもそも人間用の手当で大丈夫なのかどうかすら分からない

この娘には腰の辺りから生えている一对の羽に加えて頭上に光る輪があるのだ

これは…

「ねえこの子って…」

「うん、間違いないと思う。見たのはこれが初めてだけど」

「じゃあやつぱり、アレ、なのよね？」

「だろうな。放っておくわけにもいかないし、一旦連れて帰ろう」

何処からどう見ても、天使だった

第十二話 御使いと御子

天使の娘を店に連れ帰り、取り敢えず使われてない客室に寝かせておいた

私達は一階であの娘が目覚めるのを待ったがその兆しがないのでグラッド、ミント、ポムニツトは各々の仕事へと戻っていった

暫くしてリシエルとルシアンが帰っても目を覚ますことはない

流星に心配になってきたが霊界の召喚術に知識のある者が身近にいないため何も出
来ない

明日まで待つても起きないなら少し考えなければならぬと思っていると上の階
から慌ただしい音がした

位置的にあの天使だろう

やつと起きたことにホツとしながら部屋へと向かう

因みにフエアは今入浴中なので軽く声をかけてから私一人で向かった

扉に手をかけて開ける

そこには落ち着きのない様子で部屋を見回している天使がいた

こちらの存在に気付いたので声をかけようとする

「それ以上近づかないで！大方監禁したつもりなのでしようけれど甘すぎるわ。こんな結果も何もない部屋に閉じ込めるなんて随分と見下げてくれるじゃない？」

「…まあそういう反応になっても仕方ないですよね」

一氣に捲し立てて来た

大量の口ポットに襲われ気を失い、目覚めると見知らぬ部屋に寝かされているのだから混乱もするだろう

好戦的な笑みを浮かべているがこれも恐怖を隠して自分を奮い立たせるためのものかもしれない

一先ず落ち着かせることが最重要だ

「落ち着いて下さい、私達は貴女をどうこうするつもりはありませんから」

「浅はかすぎる嘘をつくのね。そんなのに騙されると思っています？」

「現状を見れば貴女を監禁していたわけじゃないのは分かりますよね？多少話は伺いますが、それが済んだらご自由にして下さい構いません。とにかく私達は敵ではないので警戒を解いて下さい」

両手を上げて敵意がないことをアピールする

いつも以上に穏やかに話すよう気を付けてもいるのだが、あまり効果がないようだ
天使は敵意を納めることなく顔を険しくさせていく

「私を懐柔するおつもり？ お生憎様、そんな手には引つかかりませんわ。不肖リビエル、端くれとは言え御使いに名を連ねる者…敵の手に落ちるくらいならこの命諸共！」

そう言つて召喚術を放とうとする

名前はリビエルで役職（？）は御使いというらしい

私を敵だと思つているのならそんな簡単に情報を渡しちやいけないだろうに…なんて考えている場合ではない

湧き上がる魔力からそれなりの威力のものを撃とうとしている事が分かる

私はこれを受けても死ぬことはないが、フェアの店が損壊するのはただけない

私がこの身で全て受けて店へのダメージを無くす…いや、広範囲に及んだ場合それでは護れない

ならばリビエルの詠唱を中断させて召喚術の発動を止めるか

上手くやればそれでいいが、失敗すると召喚術の暴走を招きかねない

どうすれば良い…どうすればこの店を護ることが…なんてことを考えていたら急に竜の子が部屋に入ってきた

「ピィッ♪」

「え？ そ、そんな…貴方は…」

リビエルは顔を驚愕に染め、わなわなと震えている

そのお陰か召喚術は途中で消えてくれた

助かったが、これはどういう状況だ

おそらくは竜の子がリビエルにとって重要な存在なのだろうと思うが…

するとリビエルが泣きながら叫んだ

「(い)無事でいらしたのですね、みこさまああ!!」

…御子様？

となると竜の子は国の皇太子のような存在である可能性がある

ここで竜の子の関係者に出会えたのは運が良い、しっかりと話を聞く必要があるだろう

私はリビエルが落ち着くのを待つことにした

因みに入浴を終えたフェアがこちらに來た時、現状を見て「泣かせたの？アウルさん

…」とジト目で言ってきた

慌てて弁解すると「うそうそ、冗談だよ！」ととても良い笑顔で言われた

どうやらからかわれたようだ、まったくこのお茶目さんめ

落ち着いたリビエルをフェアが一階に連れていこうとしたが、あんなことがあつて疲れただろうしもう夜も更けて来ている

また明日皆が揃ってから話を聞いた方が良さだろうということになり、軽い自己紹介の後にご飯を食べて寝ることにした

余談だが、疲れてる時には糖分を摂るのが良いと私が言ったらフェアがデザートとして作り置きプリンを持って来てくれた

それを見たリビエルの顔の輝きようは尋常ではなかったし、一口食べた時の幸せそうな顔は見ていて飽きなかった

余程甘い物が好きなのだろう

…好き過ぎるかもしれないが

第十三話 天使娘は家出娘?

「拾った…ですつて?」

翌日、お昼すぎにみんなが揃ってリビエルに竜の子を拾った時のことから今までのことを説明した

先程のはそれを聞き終えたりリビエルの第一声だ

因みにポムニットはテイラーの元で仕事をしているので今回は一緒にいない

「信じられませんか。偶然にも程があります、何か裏があるとされた方が自然な程に」

「そんなこと言ったって本当にそうなんだから仕方ないじゃないの。なに、あたし達のこと疑ってんの?」

「ええ、これ以上ないくらい疑ってますわ」

「…この子ねえ」

「まあまあ、落ち着いて姉さん」

「どうやらリビエルは信じてくれないようだ」

「無理もない、逆の立場なら私だって容易には信じられないだろう」

しかしこれが事実であることに変わりはないし、証拠を見せることもまた出来ない

強いて言えば竜の子がフェアに懐いているのを見せて信用を得るくらいか

「信じられない気持ちは分かります。しかしこれは事実ですし、竜の子を拾ったことに責任を感じています。この子のことを考えて幸せになつて欲しいんです」

「……。」

「だからこの子のことを教えて欲しいのです。それと出来れば敵のことも知つていれば。護つていくためにもその情報があると助かります」

必死に説得する

リビエルは暫く目を瞑つており、目を開くとまづ竜の子を見た

竜の子はフェアの膝の上で気持ち良さそうに寝ている

そんな竜の子をフェアは撫でている

何処から見ても拉致監禁のようには見えない、人間とペットが心を通わせて甘えてい
るような光景

それを少しの間見ていたリビエルはこちらに視線を戻した

「…どうやら御子様を御守りして下さったことは確かなようですし、私も助けていただき
ましたしね。お話ししないのは不義理と言うものでしょう」

「…それじゃあ！」

「ええ、恩を仇で返すなんて真似も出来ませんしね。お話ししますわ」

「ありがとう、リビエルちゃん」

ルシアンが嬉しそうにお礼を言った

初対面の人に少し馴れ馴れしすぎるとは思うがリビエルは見た目がルシアンよりも更に幼く見える

街の子供と接するのと同じように見ているのだ

…だがリビエルは天使だ、見た目の通りの年齢とは限らない

それはともかく話してくれるようで助かった

これで今後のことをより深く考えることが出来る

そしてリビエルは話し始めた

「御子様のことを説明する前に、ラウスブルクという場所について説明しなければなりませんね」

「らうすぶるく?」

「妖精の古い言葉で『呼吸する城』ってという意味だね」

「その通りですわ」

「なんで城が呼吸なんかするんだ?」

「比喩表現ですわよ、そのまま受け取らないで下さいます?」

「うう…」

「実際に呼吸をしているのは城ではありませんの、その外周に沿うように植えられた『ラウスの命樹』と呼ばれる木ですの」

「別名『妖精樹』、妖精と深い関わりのある木だね」

「詳しいね、ミントお姉ちゃん」

「私の専門は幻獣界だし、先輩からちよびつと聞いたことがあつてね。ラウスの命樹は妖精の力を受けて不思議な現象を起こすことが出来るんだ。そしてその中でも代表的なのが…」

「限定的に異空間を作り出し、そこへ出入りすることが可能なことですわ」
「なんですって!?!」

異空間を作る…とんでもない能力だ

そしてそんな木が外周にいくつも植えられているということとは

「その木の能力を使って城全体を隠している?」

「ええ、そうですね。その様からラウスブルクは『隠れ里』と呼ばれていますの」

「ふへえ…すごいもんだなあ。しかしそれと竜の子がどう関わってくるんだ?」

「ラウスの命樹の力を以てしても異空間への扉を開くのは簡単なことではありませんの。それを可能とするのは古き妖精や至竜のみですわ」

「え、じゃああの子はもしかして元々はそのラウスブルクっていう城の…」

「その通りです。長きに渡りラウスブルクを御守り下さっている守護竜様の嫡子にあらせられますの。そして私はそんな御子様にお仕えする御使いですわ」

「!？」

「あの子ってそんな凄かったんだ…」

「なるほど、それであんなに躍起になって竜の子を手に入れようと…」

ラウスブルクにどれほどの価値があるか分からないが、きつと相当なものだろう

異空間へと出入りできる城、これだけでも魅力がありすぎる

その城の中心的存在である守護竜の子供を捕えられればラウスブルクを好きに出来る可能性はある

無論簡単には出来ることではない

つまり敵にはそれが出来るだけの戦力があるということ

これは思っていたよりも規模が大きいな…

「ちよつと待って！それじゃあやっぱりこの子にはちゃんと親がいるってことだよね？」

「つ！そうよ、そうだわ！それに貴女が御使いってことは迎えに来てくれたんでしょ？」

「え？ええ、そうですわね…」

「じゃあこれでこの子は無事なんだね！」

「良かったね、みんな♪」

子供達は寂しさがありながらも大喜びし、大人も安堵したような表情をしているしかしリビエルは浮かない顔だ

：いくらなんでも樂觀が過ぎるだろう

そんな単純な話ならそもそも子供をこんな所に落とす必要なんてない

おそらく守護竜は敗北したのだ

理由までは分からないが、敵がそれだけ強かったと見るべきだろう

状況次第ではこの街そのものを攻め滅ぼしにくるかもしれない

そうなると私でも対応しきれるか：いや、そんなことは流石に無理だ

大量の雑兵なら蹴散らせても一騎当千の兵が何人も何人も来たら押し切られる

だから警戒すべきはあのレンドラークラスの実力者があと何人いるのだ

その数によっては殲滅戦を仕掛けても：いや、彼女達にそんな凄惨な戦いは出来ないだろうしさせるべきではない

どうしたものか：私は喜ぶ皆を余所に一人考えていた

☆・☆・☆・☆・☆フェア視点☆・☆・☆・☆・☆

リビエルの話を聞いて安心した私達はそれぞれ仕事や日常に戻っていった

私も夜ご飯を作ろうと厨房に入る

そしてこれから作るぞ、つてとところで思い出した

そう言えば天使って人間と同じもの食べるのかな？

昨日はそんなことに気が回らなくて普通に作っちゃったし食べてくれたけど、出来れば美味しいって言って貰えるのも作りたい

好みとか、あとどうしても種族的に食べれないものがないかどうかを聞きに行った方が良いかな…うん、行こう！

思い立ったが吉日っていうしね

私はエプロンを外してリビエルに宛がった部屋へと向かった

階段を登って突き当たりの黄葉の間と言う部屋がリビエルに…ん？

よく見ると僅かに扉が開いていて中から声が漏れてる

なんだろうと思って近付くとそれが泣き声だっていうのが分かった

何を泣いてるの？ 悲しいことがあった？ 私が聞いてもいい話？

扉を開けるかどうか迷っていたら泣き声はだんだんとハッキリした言葉になっていった

「私が…私がすっかりしなくちゃ…：例えもう守護竜様がいなくても、帰る場所がなくても…：私は御使いなんだから。御使いとは御子様と里を守り、導く者。でも私は末端でちよつとした治癒しか出来ない未熟者…：他の御使い達ともはぐれて、私だけでこれからどうすれば…：」

…え？

何を、言ってるの？

守護竜がいない？ 帰る場所もない？

そんな…

気付けば私は扉を開けてリビエルに詰め寄っていた

「…っ！」

「ねえ、どういうことなの？ 帰る場所がないとか…」

「あなた、聞いて…：っ！」

「あ、ちよつと！」

リビエルは驚愕に顔を染めてから窓を開けてそこから飛んで行っちゃった

あの様子…嘘とか冗談じゃあない

そんな、まさか…ううん、そんなこと考えるよりあの子を探すのが先決！

まずはみんなに知らせないと

私は走ってみんなを呼びに行つた

まずはアウルさんから！

アウルさんと協力してみんなを集めた

因みにアウルさんに事情を説明すると「やはりそうでしたか…」と言っていた

どうやら状況やリビエルの表情などから察していたらしい

それならそうと言ってくれれば良いのに…

集まった時はみんな困惑していたけどリビエルを探しに街の外に出る頃にはしつかりとした表情になつてた

まずは星見の丘に行つてみたんだけど見つからなかった

時間も時間だしこのまま見つからないと暗くなつて余計探すのが困難になつちゃう

…なんとしてもすぐに見つけないと

「ピッピー！」

私焦っていると竜の子が何かに反応した

「どうしたの？」

「ピ IPP IPP IPP！」

「ちよ、ちよつとー！」

そのまま何処かに走っていくからみんな追いかける

すると街道沿いを少し外れた所にある水車小屋に辿り着いた

そこには

「おい、あそこー！」

「いましたわー！」

リビエルがいた

私達は急いで駆け寄るけど、大きめの水路に阻まれてすぐ近くまではいけなかった

大回りすれば橋もあるから行けるけど、今話をするにはこれくらいの距離がいいかも
しれない

「どうして…！」

「え？」

「どうして、追いかけてきたんですの？まだ隠してることだっただけありますのに」

「なんだ、そんなことね」

「そんなことって…」

「そんなの決まってるじゃない

それは…」

「心配だったからだよ」

「…!?!」

「貴女のことがか心配だったの、純粹にね」

「しんぱい…? 私のことを?」

「あつたりまえでしょ! フェアから話聞いたけど、あんな風に飛び出していったら心配になるに決まってるじゃない」

「事情は詳しく分からない、私達で力になれるかも分からない。でもさ、もしかしたら力になれるかもしれない。だから頼つてよ。それに…この子も貴女が傍にいた方が安心するだろうし」

「ピィィ…」

「御子、様…」

リビエルは俯いて何かを呟いてた

そして暫くすると顔を上げた

その顔はどこか晴れやかに見える

「貴女も物好きなお人間ですね。隠し事をしてた召喚獣のことを心配するなんて」

「なっ！あのねえ…」

「…でも、嬉しかったですわ。ありがとう、それとごめんなさい」

「…うん、いいのよ。さ、もう帰ろう？貴女飛べるんでしょ、こっちにおいでよ」

「そうはさせません！」

「え？」

「きゃあっ！」

突然知らない人の声が出たかと思うと何かが飛来してきてリビエルの横にある樽を破壊した

何!?

驚いた私はその飛んできた方向を見ると、昨日戦ったのと同じ機械達に青髪の機械人形、そして長杖を持った老人がいた

こんな時に…！

「ローレットよ、警告もなしに撃つものではない。我々は一応戦いに来たわけではないのじゃからな」

「ですが、教授…！」

「とにかく下がれ、話は儂がするわい」

「…分かりました」

あの青髪の機械人形…昨日の緑髪のとかなり似てる

というか髪とメガネをかけていること、そして装備してるのが銃なこと以外は全部一緒だった

もしかして…敵の一味?

私が剣を抜くとみんなそれに倣って各々武器を構えた

アウルさんも今回はあのナイフを持ってきてる

「いきなりすまなんだな、小娘がその者達の代表か?」

「そういうわけじゃないけど…それでいいわ」

「そうか、では単刀直入に聞こう。ここに居る娘と同じ個体を破壊したのはお主達か?」

「それは私がやりました」

アウルさんが私の横に立って答える

なんだろう、それだけなのにすごく頼もしい

「そうであったか。では次の質問じゃが…その竜の子をこちらに渡してはくれぬか?」

やっぱり…

「それは出来かねますね」

「うん、この子は渡せないよ」

「どうあつても、か？」

「うん、変わらないよ」

「そうか、ならば仕方があるまい。ローレットよ、好きにせい」

「分かりました、ありがとうございます教授」

そう言つてあの青髪の機械人形が前に出てくる

そして右腕をアウルさんに向けた

「貴方達は適当にやつておしまいなさい。私はあの方を始末します」

周囲の機械達に司令を出した後アウルさんに向けて発砲してきた

アウルさんはそれを僅かに横に逸れることで避けてる

髪の毛が数本舞つたけどそんなの気にしてる場合じゃない！

「ちよ、いきなり撃つてくるなんて卑怯じゃないの！」

「そんなこと言つてる場合じゃないよ、リシエル！」

「そうだ、あいつらも来るぞ！」

「やらなきや…僕だつてやらなくっちゃ…！」

「ルシアン君、思いつめないで。落ち着いて少しずつやつていこう」

ポムニットさんには早々に避難してもらつてみんな戦う覚悟を決める

そんな時だった

「ひ、いや……」

リビエルを何体かの機械が囲んでいた

しまった!

????????????????????
リビエルは戦う覚悟を決めていないみたいで尻餅を付いちやつてる

あのままじゃやられちゃう……!

するとアウルさんが跳躍した

え? つて思っているとそのまま水路を越えてリビエルにドリルを突き刺そうとしてい

た機械を真上から蹴り穿つ

あまりの威力に黒煙を上げながら地面に埋もれた

この水路を跳び越えるなんて……ううん、そんなことよりも今は目の前のこと

リビエルはアウルさんに任せておけばきつと大丈夫

だって……

「何を呆けているんですか、リビエル。しっかりしなさい!」

「えっ……」

「貴女はいつたい何者なのか、思い出しなさい!」

「私は…御使い。御使いは御子様と里を守る者…」

「なら、貴女が今すべきことは何ですか？」

「御子様を御守りするため、まずは目の前の敵を打破すること…！」

「分かったなら立ちなさい。立って、その矜恃に従いなさい！」

「言われるまでもありませんわ！」

ああして立ち上がらせてるんだから！

第十四話 教授との邂逅

ローレットと呼ばれる機械人形がその腕をこちらに向けてひたすらに発砲してくる
どうやらこの個体はドリルではなく銃になっているようだ

一発一発はそれなりに威力が高いようだがフルオートで弾幕を作ることはい出来ないらしい

ライフル弾でラピッドファイアをしている感じだ

「なんてすばしっこいんですの…当たり前さ、よ！」

独り言を言っているが声が大きくてこちらにまで聞こえてきている

リビエルは霊界の召喚術を行って他の機械達を相手取っている

しかし多勢に無勢、次第に押され始めていた

「うう、数が多すぎる…！」

このままでは危ないかもしれない

一か八かではあるがローレットを無力化して助けに向かうとしよう

昨日と同じように石を蹴り上げて手に収める

そしてタイミングを測って指で弾いた

弾かれた石はまっすぐローレットの銃口へ向かって飛び、そのまま詰まった

「な……!?!」

銃弾の発射を慌てて止めるローレット

もしも撃つていたら銃が暴発していたかもしれない、早く詰まった石を除去する必要がある

「なんて、小癩な……!」

ローレットは一旦下がりが、石の摘出に取り掛かった

その隙に私はリビエルの元へと戻り、彼女を取り囲んでいた機械達を協力して破壊していく

「助かりましたわ!では私もローレットと……」

「いえ、貴女はフェア達と合流して下さい。貴女ならこの水路を飛び越えられるでしょう?」

「それじゃ貴女が一人になってしまうじゃないの!」

「あのローレットという機械人形はどうやら私に恨みがあるようです。見境がなくなっていますし、近くにいと巻き込まれて危険ですよ」

「でも……!」

「大丈夫、あの射撃間隔なら十分避けられます。さ、早くフェア達の援護を。貴女の治癒

の力で彼女達をサポートしてあげて下さい」

「…分かりましたわ。だけど貴女が危ないと感じたらこちらに戻りますからね！」

リビエルもフェア達の所へと合流した

ローレットはとにかく私を自分の手で始末したいのかこちら側にはさつきリビエルを囲んでいたのを除くと機械達はいなかった

その分フェア達の方へと数が行っているため、一人でも多くあちら側に行かせたいのだ

「やつと取れましたわ…さあ、お覚悟なさい！」

「その前に一つ聞かせてはくれませんか？」

「…良いでしょう、遺言として聞いてあげますわ」

「何故貴女はそんなにも私を目の敵にしているんです？」

「なぜ、ですって…？」

一瞬ローレットは完全に固まった

正直隙だらけではあるのだがさっきの問は隙を作る為ではなく純粹に聞きたかったものなので待つことにする

するとローレットはわなわなと震えだした

それは怒りに震えているように見える

「とぼけるなあ！アプセツトを！私の妹をあんな姿にしておいて！！」

アプセツト、私の妹、あんな姿

…なるほど、昨日襲ってきた緑髪の機械人形のことか

確かに大量の石で穿たれたアプセツトは故障寸前といった状態に見えた

そんな妹の姿を見て怒り狂っているということらしい

しかし、まあ…いきなり乱射して襲ってきたのはそつちだし明らかにこちらを殺す意図のある攻撃をして来ておいてやられたら復讐しようだなんて

逆恨みにも程があるし、何よりも…

「先に攻撃を加えてきたのはそのアプセツトという者の方です。それに殺そうとするのなら殺される覚悟もしていて然るべき。殺し殺され、大切な者が死ぬなど戦いでは当たり前のことでしょように…そんな覚悟も無しに戦場に立つな」

最後に殺気を込めて睨む

覚悟を決めることも出来ずに戦いに赴くなど愚の骨頂、あの弱気なルシアンですら覚悟を秘めた瞳をしていたというのにこの人形は…

戦いを神聖視するつもりはさらさらないが、それでも覚悟のない者の存在は許されな
い

そういった者の辿る道はただただ悲惨で、時には味方をも巻き込んで悲惨さを増して

しまう

称えられるようなことも何も無く、ひたすらに無駄死にするのみ

そんな哀れな存在を出したくなどない…故に私は覚悟の無い者が戦場に立つことを認めない

そしてローレットにはその覚悟がない

妹を無残な姿にされて怒るのは分かる、しかし死んではいけないのだし機械の身体ならばいくらでも修理は可能のはずだ

戦場ではそうなるなど普通のこと、そんなことに一々取り乱し、冷静さを失っている様子から覚悟が出来ていないと判断した

「覚悟が、ないですって…？馬鹿にするのも大概に…ひっ！」

更に怒りを湛えた目でこちらを睨んでくるが、私の目を見て言葉に詰まって身体が竦んだようだ

今の私の目はおそらく真紅に染まっているはず

そう、呪いの力だ

私を持つ元来の殺気に加えて屍の持つ死の気配そのものを真面に見てしまったローレットは動けないでいる

この娘には少しお灸を据える必要がある、殺しはしないが死ぬほど怖い目に合っても

らう

私はローレットに向かつて一歩ずつ近づいていった

「や、いや……来ないで！」

悲鳴に近い声を出しているがお構い無しに近付いていく

「来ないでえええええ!!」

絶叫した後に銃を乱射してきた

目も慣れたしローレットの癖もある程度分かっていた私はその全てを避けながら近付く

あくまでもゆっくりと歩いてだ

やがて弾切れを起こしたのか銃弾は飛んで来なくなり、ローレットの顔が絶望に染まる

「あ、や……やめて、来ないで……」

そしてローレットの目の前まで来た私は彼女の顔を片手で掴む

しかしそれだけでも恐怖に震えている

そのまま少しだけ持ち上げて殺気を送り続けた

やがて思考回路がショートしたのかローレットは気を失った

私はローレットを降ろすとなるべく優しく抱き抱えて老人の元へと向かった

「この娘はまだ戦場に出すべきではありません。出すなら出すでしつかりと覚悟を決めさせてください。もしもまた覚悟もなく戦場に出るようなことがあれば…その時は問答無用で破壊しますよ」

「うぬぬ…」

優しさと怒りの両方を込めて忠告しておく

教授と呼ばれていた老人は殺気に圧倒されたのか何も言っていなかった

本当に殺したりはしませんが脅しとしては十分だろう

そのままなるべく傷が付かないように地面に横たえてから、殺気も呪いも霧散させてフェア達と合流した

☆・☆・☆・☆・☆フェア視点☆・☆・☆・☆・☆

アウルさんが戻ってきた

ローレットや教授と呼ばれてた人と何かしら会話してたけど何を話してたんだろ

う…後で聞けばいいか

今はそれよりもこいつらを

「こうなつては致し方あるまい、儂が直々に手を下すしかないようだな？」

ずつと後ろで見ていた教授が前に進み出てきた

見たところあまり体力は無さそうだし杖や本を持つてるから多分召喚士ね

これだけの数の機械を率いてるからにはかなり高位の召喚士のはず：そんな人が放

つ召喚術はとんでもない破壊力を持つてるからヤバイ

召喚術を放たれた時点で終わりになるかもしれない

でも逆に言えば召喚術さえ使わせなければ良い、相手には満足に動ける機械は殆どい

ないしこつちは逆にみんな動ける

そんな状況で何か出来るとも思えない

「アウルと言ったか、お主も強いがその小娘も中々のものだ」

「…どうも」

一応褒めてくれてるけど敵に褒められたってあんまり嬉しくない

寧ろ皮肉にしか聞こえないから不機嫌気味に返事を返した

その後に教授の口から出てきた言葉は私をとつても驚かせた

「くふくふふ、なるほど。その生意気な態度、あの冒険者にそっくりじゃわい」

「お父さんを知ってるの!？」

この前のレンドラーに続いてこの教授つて人まで…お父さんはいったい何人の人に迷惑をかけてるの？

「ああ、知っておるとも。光学兵器の集中砲火を剣一本でぶった斬って高笑いしてのける…あんな理不尽な男、忘れたくても忘れられんわい」

「デタラメだ…相変わらず」

私はついこの状況を忘れてお父さんのバカバカしいまでの強さに呆れた

その隙を見逃すほど教授は甘くなかった…

「じゃが、娘であるお前はどうかかな？」

「え？…なあっ!？」

一瞬のうちに召喚術が発動したのか、いつの間にか教授の背後の上空にいくつもの兵器があった

みんな紅い光を放つ銃口をこっちに向けてていますぐにでも発射しそうな勢いだ

「フェアちゃん、逃げてええええ!!」

「虚空からの一撃じゃ、避けれるわけがあるまい!」

これは、無理…

滝割りの修行、もつとちゃんとやるとけば良かったかな

もう…手遅れだけど

覚悟を決めた私は目を閉じてその時が来るのを待った

みんな、ごめん…

やがてレーザーが発射されるような音が大音量で響き渡る

……………あれ？

おかしいな、何処も痛くない

もしかしたら痛みを感じる暇もなく死んじやったのかな

「馬鹿な…なぜ……………」

教授の驚きに染まった声が聞こえた

教授の声が聞こえるって…うそ、私死んでないの!?

恐る恐る目を開けると最初に見えたのは真っ白で綺麗な髪だった

だれ…??

その白い髪は漆黒のロングコートとの対比で良く映えていて、より綺麗に…つてアウ

ルさん!?

なんで髪が白色に…つていうかもしかして

「…あの馬鹿げた真似をあやつ以外にも出来る者がおるとは」

「追い込まれば人間、意外となんでも出来るようになるんですよ」

お父さんみたいに、大量のレーザーを剣で斬り伏せたんだ…

空いた口が塞がらないでいるとアウルさんが振り返った

「はい、これ。勝手に借りちゃってごめんなさい」

「あ、うん……いいよ」

どうやら私の剣を使ってたみたい

驚きすぎて自分の剣がないことにすら気付かなかった

「これ以上の戦闘続行は無理じゃな……致し方あるまい。ローレット、帰るぞ」

「は、はい……転移装置、発動！」

いつの間にか目を覚ましていたローレットが何か言ったかと思うと一瞬にして敵が全員消えてた

「なんだったのよ、もう……」

疲れきったリシエルの眩きが聞こえる

気持ちは分かるけど、取り敢えず今はみんな無事でリビエルともちゃんと合流出来たことを喜ぶべきだと思う

そんなことを考えていると少しの間無言が続いた

みんなアウルさんを見る

正確にはその髪と目を

髪が真っ白になってるのはさつき見たけどよく見たら目が真っ赤になってる

人間味がなくなつてちよつと怖い……

でもさつきは助けてくれたし、今までだつて守つてくれてた

何か危険な力を持つてたとしてもきつと大丈夫

「言いたいこと、聞きたいことは山ほどあるが……まずは帰ろう。話をするにも疲れちまつてて正常な思考が出来そうにない」

「そうですね……私も一度家に戻つて資料を見たいですし」

「……そうですね」

「よし、みんな帰ろう！美味しい物食べてしつかり寝て、話はそれからだよ」

そうして私達は帰路に着いた

その途中、アウルさんの髪と目は元に戻つていった

どういふ仕組みなんだろう……気になるけど今はいいや

疲れてるからあんまり手の込んだものは作れないし、晩ご飯はパスタにしようかな

その後簡単なものでごめんね、といつて出したパスタを食べたアウルさんはいつも通り夢中で食べてくれて「これで手が込んでいないなんて嘘でしょう？」と驚いてた
相変わらず良く食べてくれて嬉しいな

第十五話 秘密の暴露

翌日もまた忙しい朝と正午を過ぎ、客もいなくなる昼過ぎ

関係者全員が集まり、話をする事となった

主な内容は二つ

一つはリビエルが隠していたラウスブルクの現状について、もう一つは私の隠していた力について

まずは私から話す事となったので、隠すのをやめて全て話した

地球のこと、オラクルのこと、そして屍のこと

それらを聞いたみんなはかなりショックを受けているように感じた

暫く沈黙が続いたが、グラッドがそれを破る

「それじゃあ、その…貴女は実質不死身と言うことですか？」

「ええ、少なくともこちらの世界の者では私を殺すことは不可能でしょう。私を殺すには私の未練を消失させ、屍としての死を迎えてから身体を殺して人としての死を与える必要がありますから。しかし私には少なくとも元の世界へ戻りたいという未練があります、これがある限り不死身と言っても差支えはありません。私のいた世界には屍の未

練を消失させる退魔の剣もありますが…これは考えなくても良いでしょう」

「なんて言うか…凄く頼もしいんだけど、よくよく考えると怖いよね。800年以上引き続きた屍もいるって言ってたし、それって死なないと言うより死ねないでしょ？」

「まあ、そうですね…とは言え私は屍の特性を得ただけで、あくまでも人間であることに変わりはありません。寿命も人より少し長いくらいで終わる可能性もありませんよ」

「詳しくは分からないの？」

「ええ。私のような存在はあちらの世界でも前例がないのでどうなるかは実際に時が経たないと何も…」

「それよりも私が気になったのは見た目の変化です。髪と目が変わっていましたがあれは屍というものの特徴なのですか？」

ミントが神妙な面持ちで質問してくる

普段のほんわかしている雰囲気とは打って変わって真剣な様子だ

「いえ、あれは屍とはあまり関係ありませんね。先程言った通り私は呪いという力を使えるのですが、その力が強大すぎるために一時的に髪の色素が抜けているんです。目は…正直なところ私にも分かりません。あと全力を出すと黒い靄が発生し、身体に文様も浮かび上がりますが、こちらと同様何なのか分かりません」

「なるほど……」

「てことはあれつて本気じゃなかったってこと!？」

「そうなりますね。そもそも私の力の本質は人を殺すことにありますし、あのようない方では元来の力を出すことは出来ません」

「そんな……」

話を聞いたリシエルとルシアンの顔が曇る

するとリビエルが顔を一層険しくさせてこちらを見る……いや最早睨んでくる

「一つだけ聞かせてちょうだい。貴女は……悪魔なの？もしくはそれに連なる者？」

悪魔

霊界サプレスの住人で天使の宿敵

もしも私が悪魔なら敵対すると言うのだろう

しかし

「悪魔ではありませんし、それに類するとも言い難いですね。先程も言った通り屍とはそもそも死んだ人間……死体が強い未練によって再び動き出したもの、そこに深く関与するのは縁と業です。人間が生まれながらにして持ち、生きていく中で育み増やしていくもの。そこに悪魔の介入はありません。強いて言えば仏という……リインバウムで例えるならエルゴのような存在が関与しているくらいです」

エルゴと言うのはリインバウムとそれを取り巻く四つの世界にそれぞれ存在する神のようなものだ

一説によればこれら五つの世界に在るもの…生物非生物に限らず全てのものはこのエルゴと境界線と呼ばれるもので繋がっているのだという

召喚術はエルゴに働きかけ、この境界線を利用することでその効果を発揮している私の話を聞いたリビエルはまだ少し訝しんでいた

「それに私は名も無き世界と呼ばれる場所から来た者らしいですし、貴女の世界の常識や感覚で捉えられても困るのですが…」

「…それもそうでしたわね。いいわ、信用してあげる。でも少しでも悪魔の片鱗を見せたり御子様には危害を加える素振りでも見せたら…」

「その時は全力で私を攻撃して構いませんよ。勿論抵抗はしますが」
取り敢えずは納得してくれたようで何よりだ

時間は有限なのだしいつまでも私の話をし続ける訳にもいかない

早くラウスブルクがどうなっているのか、これからどうしていけば良いかの話をしなければ

「では次に私の話ですわね…」

それからリビエルは知っている全てを話してくれた

まずラウスブルクは敵の襲撃を受け、守護竜が死亡した

それにより今は完全に敵の手に堕ちており、ラウスブルクは敵の住処と化している
本来ラウスブルクに住んでいたはぐれ召喚獣達は捕虜同然のようだ

そして守護竜は命を落とす前になんとか卵と御使いを地上へと逃し、後事を託したのだという

そして御使いはそれぞれ一つずつ守護竜の遺産を持っている

この遺産は死に瀕した至竜が最後の力を振り絞ることで生成可能なもので、その遺産に込められた魔力を継ぐことで子は短期間で大人の至竜へと至るといふ

当然リビエルもその内の一つを持っており、それが理由であの機械達…「鋼の軍団」に追われていたらしい

事のあらましを聞いた皆の顔は暗い

竜の子は親を殺されていて更に帰るべき家まで敵に奪われた

極めつけは敵の目的の為にその身を狙われている

その目的が何かまでは分からないが、碌でもないことだけは確かだ

産まれて間もない子が背負うには荷が重すぎる

私も不憫に感じた

「本当は遺産のことは隠しておくつもりだったのだけど…状況が状況だしね。早いとこ

る継承の儀をやつてしまひましょう」

「そうだね…お願いね、リビエル」

リビエルと竜の子を抱えたフェアが庭へと出ていくのに合わせ、皆も出てきた

フェアは竜の子を地面に優しく置いて離れる

リビエルはその前に立ち魔力を高めた

暫くするとリビエルの口から詠唱のようなものが聞こえてくる

「守護竜の鱗よ…汝が子へと力の継承を行い給え。守護竜の名に於いて、疾く為し給え

！」

瞬間、辺りが光に包まれて何も見えなくなる

その光が晴れるとそこには、いつか見た女の子が立っていた

「……。」

状況が良く掴めていないのか、少し呆けている

「これで、儀式は完了ですか？」

「ええ、問題なく終わりました。突然の事で御子様は動揺なさっておられますが、直に落ち着きを取り戻されるでしょう」

それは良かった

フェアが竜の子に近付いていくと、腰を屈めて視線を合わせながら話しかけた

「えと…貴女があの子なんだよね？よろしくね」

「…ママ」

「へ？」

「ママあー！」

「え、ちよ…きやあー！」

なんと竜の子がいきなりフェアに飛び付きながら抱きついた

その衝撃でフェアは尻餅をつき、困惑した表情をしている

それはそうだろう、私だってこれは予想外だ

「物凄く懐かれちゃって…でもまあ良かったんじゃない？嫌われるよりは余っ程マシ

よ」

「それはそうだけど、だからっていきなり…恋人もいないのにママって色々すつ飛ばしすぎでしょ!？」

「…ママは私のこと、嫌いななの？」

「…え？」

「そうなんだ、やっぱり嫌いなんだ…」

フェアの動揺振りを嫌われてると勘違いしたのかその瞳に涙を溢れんばかりに貯めた竜の子がじつと上目遣いでフェアを見つめる

あれはきつい…あんなことをされてはフェアが突き放すなど出来るはずもない

「そ、そんなわけないでしょ？もしそうだったら貴女を今まで守つたりなんてしてないよ」

「…じゃあ、好き？」

「ええ、好きよ？大好きだよ！」

「わあ〜い」（ノ*＞▽＜）ノ」

あの喜びよう…なんて可愛らしいのだろうか

それはそうと騒動続きで忘れていたが、一つ早急に決めなければならぬことがある
それは…

「そうだ、あんたその子に名前付けなさいよ！」

「え、わたしが？」

「あんた以外に誰がいるつてのよ。こんなにも懐かれてるのよ？そんなあんたが付けた名前が良いに決まってるじゃない」

そう、名前だ

いつまでも「竜の子」では不便だし不憫だ

これから長い付き合いになるだろうし意思疎通の為にも、そして何よりも竜の子を一人の仲間として同等に扱う為にも名前は必要不可欠だ

「そ、そうね…ねえ、貴女は私が名前を付けるのもいい？」

「うん、良いよ！ママに名前付けてもらいたい！」

「そっか、じゃあね……」

フェアは考え込んだ

そんなフェアを竜の子は「早く、早く！」と期待に輝いた顔で急かしている

うーむ、私があの子の親代わりになれなかったのが惜しい程に可愛い

とは言え私はいずれこの世界からいなくなるのだし、あの子の為にもフェアがそう
なったのは良きことだろう

…惜しいけど

「貴女の名前はミルリーフ…ミルリーフよ！」

「わぁ〜い、私はミルリーフだ〜！」

フェアが意を決して名前を告げると竜の…ミルリーフは喜びびよんびよんと跳ねて
いる

下にいるフェアは少し苦しそうだ。満更でもない顔をしてるし問題はないだろう

「私はお仕える身だと言うのに、御子様を可愛らしいと思つてしまうだなんて…これ
も私が未熟故に…」

私の隣でリビエルが悶えながらもそんな自らを責めている

「いえ、あれは誰が見ても可愛いと思つてしまひますよ。公私の区別さえ付けければ可愛がつても良いのでは？」

「そういう訳にもいきませんわ。あの方はいずれラウスブルクを継ぎ、守護竜となられるお方…誰かがこうして厳格にお相手をしなければならぬの」

「そこまで言うなら止めませんが…貴女も難儀な役目を負つていますね」

「…貴女には言われたくありませんわ」

「…それもそうですね」

「それはそうと貴女にお渡ししておくものがありますの。本来はフェアに渡すべきなのでしょうけれど…御子様の邪魔はしたくありませんし」

「ん、これは…先程の儀式で用いていた鱗？」

リビエルが私に渡して来たのは綺麗な蒼色をした鱗だった

継承の儀でも用いられており、これに先代守護竜の知識が全て込められていたらしいとんでもない遺物である

「ええ、儀式が完了したことで力の大半を失つてはしまひましたが…それでも守護竜様のお身体の一部ですもの、その加護は消えてはいませんわ」

「要するに強力な御守りのようなものであると…なるほど、ではありがたく貰つておきますね」

守護竜の鱗を受け取り懐に仕舞うとその加護とやらの効果なのか活力が湧いてくる

ふむ…これは思っていたよりも重宝しそうだ

「それと私もこれからは御子様との教育係としてここに居させてもらおうわ、構わないかしら？」

「私は別に良いですが…私ではなくフェアに聞くべきでは？」

「…それもそうでしたわね」

そう言つてリビエルはフェアの所に行こうとして…止めた

フェアは未だにジャレてくるミルリーフの相手をしているし、ミルリーフは言うなればまだ産まれたばかりの子供

少しくらいはしやがせてあげたいと思つたのだろう

ミルリーフがフェアを解放するまで待つことにしたようだが、それが夜になるまで続くとはいないなかつたのである

第十六話　ミルリーフの初めての散歩、しかし…

明くる日の午後、私は一人で道の整備を行っていた

最初に来た時は土が剥き出して石が突き出ていたりして歩きづらく、ただの坂道であつたのだが今はかなり歩き易くなっている

まず突き出ていた石を掘り起こしていき、土を均して凸凹だった坂道を平らにする

そして次に平らにした道に敢えて凹凸を作り階段状に形を整えてから石や木を用いて固定する

そして最後に手摺を作れば取り敢えずは完成

これが私が思い描いていた作業内容で、今のところ順調に進んでいる

既に道を平らにするのは終わっているので今は階段を作る段階で、これも半分ほど出来た

あと数日もあれば全ての階段は完成するだろう?? 勿論、この作業のみに没頭出来ればの話ではあるが

因みにフェアは手伝おうとしてくれたがミルリーフが街を見てみたいと言いつ出したのでリシエルとルシアンと共に行かせた

気持ちには嬉しかったが、ミルリーフと一緒にいてあげるべきだしそもそもこの作業に
関してフエアが力になれるかは怪しい

教えれば出来るようになるのだらうがそこまでやるとなるとキャパオーバーしてし
まうかもしれない

彼女は十二分に頑張っているのだし、こんなことまでさせたくはない
それにその内戦いは激化するのが目に見えている

今の内にミルリーフと穏やかな時間を過ごさせてあげたいという想いもある
そんなこんなで私は黙々と道の整備を続けるのだった

何時間か経っただろうか

フエア達の気配と足音が聞こえてきたので作業を止めて宿屋に戻る
手を洗い汚れを落とし、作業用の服から着替えて珈琲の用意をする

何故かは知らないが大人二人分…おそらくはミント、ポムニツトの気配もしたのでそ
の分も合わせて用意しておく

ミルリーフにはまだ早いだろうしミルクだけにした方が良いだろうか
そんなことを考えながら用意を終えると丁度フエア達が入ってきた

「お帰りなさい、皆さん。珈琲を淹れましたが如何ですか？」

「ただいま、アウルさん。ん…貰おうかな。ありがとね」

：何だかやけに疲れている

それに生傷もあちこちにあるし一体何があったのだろうか

敵との戦闘：にしては何処か不自然だ

この傷の付き方は戦闘行為によるものではない

まるで幼子が外で遊んで転んだりして出来たような：そんな傷だ

大人達も真剣な面持ちをしているし、本当に何があったのやら

「聞きたいことは色々ありますが：まずは珈琲を飲んで落ち着いて下さい。その後傷の
手当をしてから話は聞きますので」

「そうね：その方が良いわね」

「かなり疲れたしね：」

「じゃあ、また後ほどここに集まることにしようか」

「ミントの言葉を合図として各々自由に動き始めた：とは言っても殆どやっているこ
とは同じだ」

皆まずは珈琲を一杯飲んでから傷の手当を行っている

私もフェアの脚に出来た傷の手当をしている

ポムニットはリシエルとルシアンを、ミントは自分でやろうとしていたが呆れ顔をし
ながら上の階から降りてきたリビエルが手当を始めた

ミルリーフは皆に守って貰えたのか傷らしい傷は何一つ負っていない

だがその顔には明らかに不満を湛えていた

暫くして各々の治療が完了し、落ち着きも出たところで何があったのかを聞いた

曰く、最初はただ普通に散歩をしていてちよつとしたトラブルはあったものの平和に過ぎしていたらしい

しかし街の出入口付近の広場…この街の流通の要であり様々な物資が行き交う場所で事件は起こった

なんとミルリーフが物資運搬役の召喚獣達を繋いでいる手綱を全て解いてしまったのだ

召喚獣は人間に無理矢理言うことを聞かされ仕事を強要させられていたためこれを好機と捉え、逃げるために暴れ回った

フェア達や偶然付近の見回りをしていたグラッドが何とか暴れる召喚獣を取り押さえ、獣属性召喚士であるミントの介入により事態は収束したようだ

疲れきった皆は宿に戻ることにしてグラッドは事後処理に動いているらしい

話を聞き終えた私はなるほどと納得すると同時に軽い軽蔑の念を感じずにはいられなかった

フェア達の行動は間違っていない

周囲の人になるべく被害が及ばないようにしていたのだし、その行動によって助かった人は大勢いるだろう

ではミルリーフの行動が間違っていたのかというとそれも否だ

故郷から無理矢理連れ出され、別の世界の者の為に強制的に働かされる…それも「物扱い」と言っても過言ではないほどの扱いでだ

恐らくはそんな憐れな召喚獣達を助けたいと思つたのだろう

その心は間違っているはずなどなく、思うだけで留めずに行動に移したその勇氣も評價出来る

惜しむらくは誰も傷付けずに、そして確実に救えるように手段を考えたり期が熟すまで待てなかつたことだが…それを自我が生まれたばかりの子に求めるのは酷だろう
ならば私を感じている軽蔑は誰に対してのものなのか

それは個人ではなくこの世界の者全てに対してのものだ

召喚獣は物扱い、それが当たり前で人権などない…それがまかり通るこの社会に対して怒りを感じる

出来ることなら変えたいが太古の昔より続くものを変えるのは並大抵のことではなく、私には不可能だ

怒りを感じつつも何も出来ない自身に対しての軽蔑も含まれていた

「ねえミルリーフ…どうしてあんなことをしたの？」

「……。」

「言ってくれなきや分からないでしょ？」

「…可哀想だった」

「え？」

「人間に繋がれて命令されるのはもう嫌だ、故郷に帰りたいたい…そう叫んでた。だから助けたの！ミルリーフ、何にも間違ってたない！」

「そうは言っても、召喚獣は個人の資産ってことになってるしそれを勝手に逃がしたりしたら……」

「そんなのおかしいよ！どうしてそんなことが出来るの？人間だったら偉くて召喚獣だったら偉くないの？違うよ、そんなの間違ってる！」

「御子様の仰ることは正しいですわ。ですが、人間は決してそれを認めたりはしないでしょう…今までずっとそうして来ましたし、これから先も変わりはないのですから」

「おかしい、おかしいよ…そんなことしちやいけないのに…どうして……」

「っ……」

ミントヤリシエルにルシアンが悲痛な面持ちになる

彼らとて分かつてはいるのだ、こんな社会間違っていると

召喚獣には何の罪もないのにこんな扱いを受けるのはおかしいと

しかし自分達が産まれる遥か前から連綿と続いてきた風習だし、自分の力で変えることなど出来ない

それに心の何処かでそれを当たり前のことだと認識してしまっている部分もある

その事実を突き付けられて平然としてはいられない、それ程には彼らは善人だった

「…言いたいことは、それだけ?」

そんな中、フェアの口から冷たい言葉が放たれた

「…え?」

「ミルリーフ、貴女の言い分は分かるよ。確かに私だってこんなのおかしいとは思う。

でもね…そういうのは自分で責任が取れるようになってからやりなさい!」

「…っ!」

確かに、ミルリーフのしたことの責任を取ったのはフェア達だ

駐在騎士であるグラッドや召喚士のミントのお陰で罰されることはなかったものの、一歩間違えれば全員牢屋行きになりかねないことだった

そうなれば当然事を起こしたミルリーフも捕まるし、素性がバレればそのまま研究施設へGOだ

状況を考えると軽率であつたことは否めない

「良い？ミルリーフ。世の中の理不尽に対して疑問や不満を抱くのは良い事だよ。それがあるからこそ少しずつ世の中を変えていけるの、良い方向にも悪い方向にもね。けどそうやって変えていくにはどうしても力がある。これは単純な力強さじゃないよ、人生経験による知識や知恵、思慮深さとか…そういう色んなものが必要なの。それがないまま行動に移すと何にも変わらない、変えられたとしても悪い方向にしか転ばない。そして貴女はまだ産まれたばかりの子供だからそういった力はまだないでしょ？」

「でも…」

「まだ分からない？貴女が今回した事で誰か笑顔になった？色んな人に迷惑かけただけで終わったでしょ。貴女が助けようとした召喚獣も助からなかった。勿論そうしたのは私達だけ…でも例えあのまま逃げ切れたとしてもあの子達は絶対に幸せにはならなかったよ」

「どうして…？」

「はぐれ召喚獣になるからよ。そうなった後にもしも人を襲ったりしたら殺されちゃったりもするんだよ？それに襲わずに隠れたとしても、見つかったら逃げ出した罪としてかなり重い罰が課される…理不尽だけどこの社会はそうなってるのよ。この社会の仕事を変えずにあんなことをしたらあの子達を救うどころか追い詰めかねない…分かる？」

「難しいけど……なんとなく……」

「なんとなくでも、ちよこつとだけでも分かれれば良いよ。まだまだ分からないことも多いと思うけど忘れないで。誰かを助けるには力がある、けれど力じゃどうにもならないことだってある。そういう時にはグツと堪えることも大事なんだ」

「うん……ごめんささい」

「……驚きましたね。ここまですっかりと論すことが出来るとは。初日から既に立派に親らしいじゃないですか」

「そ、そうかな……なんだか照れるや」

「私も驚きましたわ……御子様のご教育係として負けてはいられませんわね」

「……なんか、一番大人っぽいわよねあんな」

「私まだ15なんだけど……」

「良い意味ですっかり者つてことですよ。そうならざるを得なかったとしても、それは貴女の力です。誇つていいですよ」

「そう？……ありがと、アウルさん」

「いえいえ」

フェアの見事な説教によりミルリーフは己の非を認め、その後は一瞬不穏な空気が流れそうになったがなんとか穏やかなものに出来た

しかしそんな時間は長くは続かなかった

平穏な時間の終わりはグラッドの叫び声と共に訪れた

「大変だ、商店の近くで乱闘騒ぎが起きた！治めるのを手伝ってくれ!!」

「はい？」

第十七話 第二の御使い

グラッドに先導されて向かった先では、乱闘が…いや、一方的な戦いが行われていた。髪が赤くカンフー服のようなものを着ている男性が私達を最初に襲ってきた鎧連中に剣を向けられている。

しかし誰が斬り込もうとも

「ふうううう…ほわつちやああああ！」

「ゲバアツ！」

あんな風にやられている

しかしあの動き…敵を近付けない遠距離型の体捌き

もしかして劈掛拳か？

両腕両足をまるで鞭のように振り回しているしどう見ても劈掛拳だ

相手は剣を持っているのが複数人いるのだから近付けない為に劈掛拳を使うのはそんなに悪手ではない…だがこの世界に私の世界と同じものが存在するとは思わなかった

「なんか…すつごく強そうだよあの人」

「そうねえ。しっかしあの喧しい叫び声はなんかのよ!」

ルシアンとリシエルが緊張感もなく感想を言っている

野次馬じゃないんだから…

「あれはストラの息吹だね」

「すとら?」

「うん、呼吸によつて体内の機能を活性化させて治癒力を上げる技だよ」

「それだけではありませんわ。本来ストラとは肉体強化法の一つです。ああして強化したセイロンの蹴りは巨岩をも粉微塵にしますのよ」

「うっへえ…ん?なんであの人の名前知って…まさか!」

「ええ、あの者の名はセイロン。御使いの一人ですわ!」

「なんだって!」

とんだ偶然もあつたもの…いや、リビエルの話には道中守つてくれた冒険者にこの街へ集まるよう言われた旨もあつた

となると他の御使いもこの近くへと来ている可能性が高い

「でもあの人一人で何とかなりそうじゃない?これなら加勢しなくても…」

「そういうわけにはいかんっての!」

フェアの言葉にグラッドが反応する

「このまま乱闘が続いて規模が大きくなれば商店や人への被害が出ちゃうよ。そうなる前に……」

「止めるってことね。もう、しょうがないな」

ミントの言葉を受けて仕方が無いと覚悟を決めたようだ

確かに今回暴れている敵は練度も低く、大した脅威ではない

だからといって油断するのは良くない……後できちんと言っておかないと

そうこうして私達は御使いのセイロンへ加勢することになった

まずはセイロンにこちらが味方であることを知らせなければならぬ

今セイロンのいる場所と私達がいる場所は花壇や鉄柵等で妨げられている

セイロンが強いとはいえ多勢に無勢、敵には斧を持ったものや投げナイフを持った者

もいる以上一人でいるのは不利極まりない

合流を急ぐ必要がある

「この……邪魔よ……」

フェアが斬りかかってきた敵の剣を自分の剣で受け止めて鏢迫り合いになる

そこから押し返して焦った敵の足を払う

「のわーがっ……」

姿勢の崩れた敵の頭を掴んで地面に叩きつけた

フエアだけじゃなく皆それぞれ敵を相手にしている

思っていたよりも敵の数が多くて進軍しにくい

いち早くセイロンと合流したい私は目の前のナイフを持った敵の顎を蹴り上げて失神させてから皆に声をかけた

「私はセイロンの元へ行きます！こいつらを任せましたよ」

「行くつてどうやって…ちよちよちよ、嘘でしょお?！」

「うっはあ…圧巻だなあ」

皆が驚いているのは私が跳躍で一気にセイロンの近くに向かったせいだ

空中で身を翻して体勢を整えてから着地、セイロンの後ろから手斧を振り下ろそうと
していた敵の手へ蹴りを放って斧を叩き落とす

「ぬ、お主は?！」

「この騒ぎを治めるため加勢します。面倒な説明は省きますが御子の味方です」

「なんと、そうであったか!うむ、苦しゆうないぞ。ハツハツハツハツハ!」

笑いながらナイフを持った敵の横つ面を掌で打って一撃で失神させている

剣を脇に抱えるようにして固定した敵が私へ向かって突撃してくる

剣が突き込まれる直前にすり足で斜め前へと移動して相手の手首と首を掴んでそのまま地面へと叩きつける

鼻が折れて血が出ているが命があるだけマシだろう

悶絶している敵の首を片手で締めて数瞬で落とす

「ふむ、強いなお主」

「貴方も中々の功夫ですね」

「そうであろうそうであろう、ハッハッハッハッハ！さて…」

笑顔から真面目な顔になったセイロンは私の後ろを見ている

私も振り返り同じ方を見ると少し離れた位置にリーダーと思しき剣兵とその側近のように見える槍兵

そして…長いフード付きローブを着込んだ召喚士と思われる人物がいた

「彼奴から僅かに妖気が漂っておる…おそらくは鬼妖怪の召喚士だ」

「なるほど…優先的に倒すべきですね、しかし」

「ああ、彼奴等が妨害してくるのであるうな」

「そうですね。ま、すぐに片付けますよ」

「ハッハッハ、頼もしい限りだ。して、どちらを取る？」

「では槍の方を」

「我は剣だな、承知した。では往くぞ！」

「ええ」

打ち合わせを終えた私とセイロンは三人に向かつて突進する

特攻をしかけて来るとは思つてなかつたのか多少の動揺はあつたものの、すぐに氣を取り直して劍兵と槍兵が前に出て召喚士を守りに来た

召喚士は後ろで何やら詠唱を行っている

途中飛び出してきたナイフ使いは飛び膝蹴りをかまして移動のスピードを緩めることなく排除した

打ち合わせ通り槍兵の前へ出ると槍兵は槍を突くのではなく前に向けて構えた

私のいる方向を正確に捉えて向きを素早く調整してくる

一対一で槍袞擬きをして来るか：しかしその判断は正しい

突きや払いをすればその直後の隙を利用して接近、そのまま関節を取ったり無防備な顔を攻撃したり出来る

だがこうして牽制されるとこちらも攻撃されないが槍兵を倒せない

そうして時間を稼いでいれば召喚士の詠唱が完了してしまう

そうやってちまちまと削ってくるつもりだろう

セイロンは劍兵の懐に入り混むことに成功していたが、直ぐに劍を手放し短劍へと持ち変えられたことで凌がれていた

あの練度の低い鎧集団と同じ奴らとは思えないほど良い動きをしている

動きを封じられてしまったが時間をかけてはいられない、ここは多少強引に突破させてもらおう

私はバックステップで一度距離を取ってから直ぐに真つ直ぐに走った

当然槍兵は槍を構えているしこのまま突つ込めば槍で刺される

別段刺されたとて死にはしないが辺りに鮮血が多量に吹き出すのであまりよろしくない

私は槍の目の前まで迫ると同時に手を槍の穂先の上に置き、下に向けて寸勁を放つ

槍の先端に強い力が加えられたことで槍兵は槍を支えることが出来ず、槍の穂先が地面に叩きつけられた

そのまま槍を使えなくする為に槍の上を走り敵の目の前まで迫る

槍から地面に降りる最中に両膝で槍兵の頭を挟み込んで上体を捻じる

腕を伸ばして地面に着いたら捻った身体を戻すようにして膝で挟んだ槍兵を頭が激突しないように地面へと叩きつけた

腕は折れたかもしれないが命に別状はない

槍兵を無力化した私はセイロンと戦っている剣兵を倒そうとした

だがその必要はなかった

セイロンは先程までの長距離型の戦い方から急激に動きを変えて超近距离型に切り

替えた

その動きについてこれなかった剣兵は掌底を真面に喰らって意識を失う
劈掛拳と八極拳の合わせ技

基本的だが効果の高い連携技だ

そのまま二人で召喚士へと迫ろうとするが…少し遅かったようだ

召喚術が発動し、呪いの藁人形が巨大化したような召喚獣が出てくる

しかもその手には釘を打ち込む木槌を持っていた

まるで釘を打ち込まれ続けた藁人形が怨嗟の念で動き出したような、不気味な召喚獣だ

「こやつは“ノロイ”か！厄介な者を…」

「奴の特徴は？」

「何処からともなく巨大な釘を出現させ打ち込んで来る！また、憑依して対象の肉体的な強さを大幅に下げてくるのも厄介だ」

「それはそれは…御免蒙りたいです、ね！」

上空から突然釘が何本も降って来る

それを避けて召喚士へ接近しようとするが今度は獅子舞のような召喚獣が突撃して来た

その突進を片手で止めるが、後ろからノロイが木槌で打とうとしてくる

咄嗟に跳躍して獅子舞の上に乗って回避すると同時にノロイに獅子舞を打たせる

獅子舞は怯み、味方を攻撃したことで動揺したノロイに向かって跳ぶ

それに気付いたノロイが左手で掴もうとしてくるがセイロンが飛び蹴りでそれを防いでくれた

私はノロイの左肩に右足を付けてそのまま強く踏み込むと同時に左膝で顎（顎っぽいところ）を、両肘で脳天（ここも脳天っぽい）を撃ち抜くくらいの強さで挟み込む

人間が真面に喰らうと確実に頭がグシャグシャになる威力の攻撃だが、ノロイはそうはならず倒れ伏した

それを見た召喚士が慌てて詠唱をしようとするがそれよりもセイロンの正拳突きが炸裂する方が先だった

鳩尾に喰い込んだその突きにより召喚士は10mほど吹っ飛んで失神した

フェア達の方を見ると皆鎧達や騒ぎに乗じて暴れだした荒くれ者達を倒していた

腕や足や腹を抑えて地面に倒れ伏している男達から上がる苦悶の声は不協和音となつて中々に不気味だったので全員締め落として周った

その後男達はグラッドが縛り上げて拘置所に連れて行き、戦闘の余波を受けて損壊した道や壁といった箇所は私が行った

街の人達も協力してくれたのでセイロンをフェア達に託し、宿へと戻ってもらった。街の人達は一瞬怪訝な顔をしたが、荒くれ者を取り押さえたことで疲労しているだろうしその中心にいたセイロンに話を聞かなければならないからと言えば納得してくれたみたいだ。

人間同士の戦いで壊れた部分は大した手間も無くすぐに修繕出来たが如何せんあのノロイが打ち込んだ巨大な釘が厄介だ。

まず抜くだけで重労働となる

大の大人が5人いてやつと抜くことが出来るほど重い

それを片手で抜いたら化け物を見るような目で見られてしまった

そして抜いた跡の修繕がこれもまた面倒臭い

道の整備をしていた経験がなければかなりの時間を要しただろう

因みに巨大釘は他の街の製鉄所へと格安で売り、そのお金を手伝ってくれた人や被害に遭った建物の所有者へと渡しして事態を穏便に解決した

私も受け取るべきだと言ってくれる人が大勢いたが、私戦闘を行った一人だからと言つて断つた

それでも渡そうとする人がいたので今私が厄介になつているフェアの店に明日の昼にでも来て売上に貢献してくれと言い含めてなんとかなつた

しかし戦闘のみならずその後にもまで厄介さを残していくとは……まったく

修繕作業のせいで日も落ちかけた時分に帰った私は新たな御使い、セイロンが仲間になる（居候する）ことと遺産は無事に守りきったことを聞いた

因みに夕飯ではハンバーグが出たのだがこれがまた絶品だった

一口サイズに切り分けられそこから肉汁が溢れ、口に運ぶと噛む度に肉本来の旨みが肉汁と共に口中に広がる

別で分けられていた特性のソースをかければ味が一変し、これまた幸せに溢れる素晴らしいものであった

バランスを取るために添えられたサラダはシャキシャキとしていて仄かに味が染みているので濃い味のハンバーグとの相性は最高だ

この食べる幸せだけは元の世界へ戻ることを私に躊躇わせる力を持っている

……向こうでもこの味が食べられるようフェアに弟子入りしようかな？

第十八話 新たな敵

「それよりもあたしらが気になるのはさあ」

「うむ。我らが何者を相手にしておるのか、だな」

「分かつてるなら最初から話しなさいよ……」

「ハツハツハ、そうむくれるでない小娘よ」

翌日、セイロンから話を聞く為に集まってまずは自己紹介から始めたのは良かった

しかしセイロンの話が長かったためしびれを切らしたりシエルに中断させられていた

セイロン自身それを分かっていたというのだから質が悪い

曰くセイロンは龍人でやんごとなき身分なんだとかラウスブルクには客人としてもてなされていたとかその流れで次代の御子が守護竜となるまで御使いを務めることになったとか……重要なことも言っていたのだが如何せん長い

しかもやんごとなき身分が事実なのか妙に偉そうな言葉遣いをしておりシエルなどは少しイライラしている

まあ偉そうな割には不快にならない不思議な人物であるので私としては構わないの

だが

それにそんな産まれであるが故か、ミルリーフに対しては大変に畏まっております最大限の礼節を持つて接している

それよりも今は情報が欲しい

敵の情報は非常に有益であり、その有る無しでは勝利のしやすさに雲泥の差が出る「話を聞く限りお主らは既に『剣の軍団』と『鋼の軍団』に遭遇しておるようだ。それぞれには『将軍』レンドラー、『教授』ゲックという者が頭目として存在している。ここまでは良いかな？」

「ええ。私達はそれら複数の軍団を束ねる更に上の者がいると踏んでいます」

「正解だ。彼らは『姫』と呼ばれる者を中心に集まり、活動しているようだ」

「ならその『姫』って奴が諸悪の根源なわけね」

「はて、それはどうであろうな」

「何よ、言っていることが違うじゃないのよ」

リシエルの言葉にセイロンは少し自信の無い表情を浮かべて否定とも肯定とも付かないことを言った

『姫』が全ての頭目…にも関わらずセイロンのあの言葉

考えられるのは

「確かなことは我にも分からぬ。だがラウスブルクで戦った時、実際に彼らを率いていたのはクラストフと名乗る青年だったのだよ」

「なるほど、やはりそういうことですか」

「クラストフ…それって家名ですか!？」

「ああ、そうであったと記憶しているが」

名前を聞いたミンントが珍しく驚愕に染まった顔をしており、声を少し荒らげている

「お姉ちゃん、知ってるの？」

「ええ…無色の派閥の一派でね、『魔獣調教師』って呼ばれるほど幻獣界に精通してるらしいの」

「無色の有力者が相手の可能性があると…これは厄介ですね」

無色の派閥…蒼の派閥や金の派閥と同じく召喚士による組織の一つ

だがその性質は両派閥とは大きく異なり、破壊活動に傾いている

一応召喚士が全てを支配する世界の構築を理念に掲げてはいる

しかし過去の大戦等の影響により今では殆ど形骸化しているらしい

それによって無色の派閥としてよりも各家系でのやりたいことをやりたいようにやろうとしているため、活動の予測や対応が寧ろ難しくなっている側面もあるようだ

更に無色の派閥では家系ごとに受け継がれてきた古代の召喚術がある

それらは非常に強力で、一族の者以外扱えないよう秘匿されてきた

つまりは事前に対策のしようのない強力な切り札を持っていることになる

そしてそんな無色の派閥と協力関係にある組織が存在する

それは『紅き手袋』という名の組織で、端的に言えば殺し屋集団だ

金さえ積めば強盗や誘拐、殺しなどなんでもやる

組織名も血に染った手袋に由来するほど危険な組織である

そんな相手が敵にいるという事実は厄介なことこの上ない

「なんてこったよ…そんなの俺らにどうにか出来るのか？」

グラッドが不安を口にした

気持ちは分からなくもない

現状を考えれば普通はそうなる

「やる前から諦めていたら出来ることも出来なくなりますよ、グラッドさん」

「それは、そうですが…しかし」

「それに、もう賽は投げられました。後戻りは出来ません。出来るか出来ないかではな

く、最早やるしか選択肢は残されてないんですよ。そんな不確かな心で戦えば…死にま

すよ」

「大袈裟、とも言えないのが辛いところだな…よし、分かりました！本官も覚悟を決めま

すー！」

グラッドは力のある笑みを浮かべて敬礼した

そこまでやる必要はないが、気合いを入れる為なのだろう

「そうそう、一つ言い忘れておった」

セイロンが手を叩きながら言った

「お主らは幸いなことにまだ出会しておらぬようだが、『獣の軍団』には気を付けた方が
良い」

「獣の軍団…メイトルパの軍団ですか？」

「ああ、そうだ。亜人や魔獣のみで構成された凶暴さでは比類なき部隊でな、尋常ではな
いしぶとさと破壊力を持つ『獣皇』なる者が率いておる。まともに戦うことは避けるべ
き相手だな」

「それはまた厄介な…」

「全くだ。遭遇しなければそれに越したことはないが、いずれ相見えるかもしれん。想
定はしておくようにな」

「ええ、分かりました。取り敢えずは他の御使いがこの街に来ることを祈るしかありま
せんか」

「そうだな…それしかあるまいて」

そうして私達は思い思いに過ごすことになった

「ふう…今日はこんなものですかね」

私は誰に言うでもなく独り言ちた

やっているのは最早言うまでもないだろう、道の整備だ

物資の集まりが良くて思いの外進んでいる

というのも意外なことにテイラーが私の行っている道の整備に対して協力的なのだ

整備したおかげで売上が上がり、効果が出ていることを認めたから援助をしてやるだ

けだ…と、そう言っていた

どうやら結果を出せばそれをしっかりと受け止めて真つ当な評価をするばかりか、その頑張りに対してのご褒美のようなものまで惜しみなく送る人物であつたらしい

こういう人物が上役についているなら頑張り甲斐があつて仕事も楽しく出来るだろう

それを知っていたからこそフェアはテイラーに苦言を呈する私を止めたのだろうか
だとすると…いや、どちらにしても私はテイラーを少し誤解していたようだ

結果を出さなかった時の姿しか見たことがなかったからと言えばそれまでだが……それに明らかに言い過ぎであるのも確かだし

とまあそんなことはどうでもいい

階段を作る作業も残り5分の2といったところだ

今日はこれで切り上げて階段作りが終わった後の作業となる手摺の作成をどうしていくかを煮詰めることにしよう

ある程度構想を固めておけば階段が終わってからすぐに作業に取り掛れる

その初動の差は意外と大きな違いを産む

これからの工程を考えながら私は宿に戻り、手洗いや着替え等を終えた

さてこれからどうしようかなと思案しながら廊下を歩いているとリビエルの部屋から話し声が聞こえてきた

「……ですからして、保護者である貴女がお手本を」

「わ、分かった！分かったからさ、リビエル……もうこの辺でお説教は勘弁してくれないかな？」

「まだ話は半分も終わってません!!」

「は、はんぶん!?!」

どうやらフェアガリビエルにかなり長い時間説教を喰らっているようだ

どれくらい続いてるかは知らないがもしも私が作業を始めた時からだとすれば二時間間は……うん、流石に止めた方が良いかな

そう思っていたが私が出る幕もなかったようだ

ルシアンが部屋に入っていくのが見えた

「いいですか？そもそも貴女の立場は……」

「今日のところはその辺にしておいてあげてよ」

「ル、ルシアン……」

「そうはいきませんわ。これはとても大事なお話なんですのよ」

「いくら大事な話でもいつぺんに聞くのは無理があるってば。せつかく話したって、それが反映されなきや意味がないでしょ？」

「それは……まあ、そうですね」

ルシアンが中々上手いこと言い含めている最中にフェアがこっそり部屋から出てきた

目が合ったので少しジト目で睨んでやるとちよこんと舌を出しておどけてきた

くそ、可愛いじゃないか

そうしている間にも部屋の中では話が続いている

「残りの話はまた日を改めてついで。フェアさんもそれで良いですよね？……ついで」

そう、そこにはもう誰もいないのだ

「あ、あれえっ!？」

「ルシアン？ 貴方もしかして逃がす時間をかせいで…」

「ちちっ、違うよ!？ 僕、そんなつもりじゃないって…」

「責任取って、貴方が代わりに聞きなさい!」

「ええ!？」

おっと、これでは余りにルシアンが不憫だ

フェアを助けてくれたし、助け舟を出そうかな

「リビエル、それは流石に理不尽でしょうに。ルシアンに聞かせても意味がないですし」

「それはそうかもしれませんが!!」

「それは単に貴女が説教をしたいだけの独り善がりになってませんか？ 果たして知識を

司る天使がそれで良いのでしょうか」

「うぐ…そ、それは」

「それよりもリビエル、少し相談したいことがあります」

「私に？ 为什么呢?」

「今作っている階段を作り終えたら手摺を作るのですがその設計で…」

そうこうしている内にリビエルの意識が完全にこちらに向いたのでルシアンに軽く

目配せして離れるように促した

ルシアンは察したのか軽く頭を下げて部屋を出ていく

因みにリビエルに設計の相談をしたかったのは本当だ

なのでそれから真面目に話し合い、意見を出し合って取り敢えずの方針を固めることが出来た

：本当はリビエルに召喚術に関して教えて欲しいのだが彼女はまだ人間に不信感を抱いている節がある

私達のことは信じてくれているようだが、それでも召喚術を人間に教えるとなるとまだ抵抗があるだろう

まずは個人的に仲良くなって彼女の心からの信頼を得る必要がある
それまでは我慢だ

リビエルの説教事件から暫く経った後、私達は皆でシリカの森にいた
シリカの森はトレイユの街の南西部にある自然豊かな森だ

そこには綺麗で澄んだ池もあり、弁当でも持つていけばとても良い森林浴が出来るだろう

そして何故そんな場所にいるかと言うと

「この前は結局ドタバタしてしまいましたから今度はゆっくりとピクニックを致しましょう！」

というポムニツトの発言が発端である

どうやらリビエルを見つけた際に行っていたピクニックが最終的に戦いで締められたことに不満を持っていたようだ

フエアが店の管理をするようになってから会う機会がかなり減ったらしく、更には一緒に遊ぶことが殆どなくなってしまったことに寂しさを感じていたらしい

そんな中訪れた折角の機会が戦闘で終わりというのは確かに納得いかないだろう、ということで御使いの二人も巻き込んで今此処にいる

「しっかしこの森に来るのも久し振りね〜」

「そうだね。昔は偶に三人で来てたよね」

「懐かしいね〜。どう、ミルリーフ？歩くだけで退屈じゃないかな」

「ううん、楽しいよ！それにここなんだか心がスーッとして落ち着くんだ」

「御子殿は元来メイトルパにおわす御方故、自然豊かなこの地にまだ見ぬ故郷を重ねて

おられるのでしょうか」

「なるほど……」

「私もメイトルパの召喚士だからかここは好きだな。最近はずいぶんあんまり来れなかったけど、来れて良かったあ」

「ムイムイッ！」

ミントも羽を伸ばしているようだ

私も自然は好きだ

木々が優しく生い茂っている森は特に好みで、ログハウスを建てたくなる

静かで空気が綺麗で………静か？

いや、風切り音が聞こえる

これは…矢？

矢が空気を切り裂いて飛んでいる

誰かが訓練をしている、というわけでもないようだ

風に運ばれてくる血の匂いが狩猟、もしくは戦いが起きていることを私に知らせてくれた

ただ狩りをしているだけならば良い、巻き込まれないようにするだけだ

だがもしも戦いで、更にミルリーフが関わるような戦いなのであれば……嫌な予感が

する

「こういう時の勤は何故か良く当たるものである

「あの、リビエル。つかぬ事を聞きますが…」

「あら、なんですか?」

「御使いの中に弓矢を使う人はいますか?」

「ええ、いるわ。アロエリっていうセルフアンの、有翼亜人の女性が…何故そんなことを聞きますの?」

「…本当に、悪い予感ほど良く当たるのはなんなんでしょうね。おそらくそのアロエリという人が戦っていますよ」

「なんと、それは真か!」

話を聞いていたのかセイロンが驚いた様子で声を上げた

その声にみんなも気付いてこちらを見たので事情を説明してすぐにその方角に向かった

「りやああああ!」

「ギャウウ!」

「む、あれはアロエリだな。アウルの言う通りであったか」

向かった先では南米民族のものに似た衣装を身にまとった女性が矢を放っていた。放たれた矢は毛むくじやらで大柄な亜人の右肩に突き刺さり、持っていた斧を落とさせた。

あれでは少なくとも治療しなければ戦うことは出来ないだろう

必要以上に傷を与えず、確実に戦闘能力を削ぐような位置に当てている

正確無比な射撃精度だ

「アロエリは弓の名手でその腕前は百発百中と言っても差し支えないですわ。でも、あれだけの数に囲まれては……」

「冷静に分析してる場合!? 仲間なら助けに行きなさいよ!」

「うむ、尤もだ。往くぞ、店主よ!」

「ええ!」

セイロンは何故かフェアのことを店主と呼ぶ

正確には雇われ店長なのだが……今はそんなこと気にしてる場合ではないな

私達は武器を構えて亜人達の元へ走り出した

「フウウウウ……ホアツチャアア!!」

「グオオン!」

「くっ……！」

アロエリは悔しそうに下唇を噛んだ

「セイロンの言ってた獣の軍団ってのはこいつらみたいだな」

「気をつけて！魔獣や亜人は人間より力が強いから！」

グラッドが納得したように呟き、ミントがみんなに注意を促した

「それなら、やられる前にやるだけよ……かかって来なさい!!」

こうして新たな敵『獣の軍団』との戦いは始まった

第十九話 VS 獣の軍団

見たところ相手は亜人と魔獣と召喚士で構成されているようだ

私達は池の周りにいて獣の軍団も含めてその池をグルッと囲むような位置取りになっっている

このままだと両側から挟み撃ちにされてしまっって不利だ

こちらを二部隊に分けて同時に迎撃するか片方に戦力を固めて突撃するか…左側は魔獣三体に亜人二人がすぐそこにいる

その先にある高所には魔獣二体に亜人三体、召喚士が一人

右側は魔獣二体に亜人一体

その先に魔獣三体に亜人二体、召喚士が一人…数的にも亜人の割合的にも左側の方がキツイだろう

亜人は力が強いだけではなく武装もしているので魔獣より厄介な存在なのだ

となると…よし、決めた

「フェア、リビエル。私と一緒に右側を速攻で破りましょう。その後左側を挟撃します！」

「なるほどね、分かった！」

「かしこまりましたわ！」

「そうなる和我らで左側を抑えておけば良いのだな？」

「ええ、頼めますか？」

「なに、お安い御用さ。アロエリも、それで良いな？」

「俺は人間の言うことなど……」

「現状を考えるにこれが最も無難と言える。それが分からぬお主ではなからう。そなた個人の感情は捨て置けと言ったはずだぞ？」

「くっ……！」

「分かりはしましたが、そつちが三人だけなのは良いので？ 貴女の強さは知ってますが数で不利なのは違いありません」

グラッドが心配してくれている

尤もな話だがそれも言っていられない

「私を見くびつてもらつては困ります。それにもう悠長に話してはいられません。敵が来ます！」

「そうね……行くわよ！」

そうして私達は右側へと突撃を開始した

「フエアは魔獣二体を頼みます」

「オツケー！リビエル、援護よろしくね」

「任せなさい！」

私はまず斧を持った亜人を倒すことにする

「グオオオオオオ！」

雄叫びを上げながら振り下ろされる斧を私は両手で挟んで止める

「!？」

「ふっ！」

驚愕に染まった亜人の顎を下から蹴り上げた

怯みはしたが意識を奪えはしなかった

未だ斧から手を離さずに力を込めてくる

なるほど、人間とはやはり頑丈さが違うらしい

斧を持つ手へ膝蹴りを叩き込んで斧を離させる

次に相手の腕を真上へと跳ね上げてから超接近し、胸に右手を当てる

そのまま右足を踏み込みながら右手へと力を流し込んでいく

次の瞬間亜人は血を吐きながら倒れた

浸透勁：寸勁の中でも強力な技の一つだ

後ろを振り返るとフェアが魔獣を蹴りで倒していた

「アウルさん…は無事だよ。流石だね」

「言ってる場合ではありませんよ。次が来ます、傷付いたら頼みますよりビエル」

「ええ！」

見ると前方から魔獣が三体一塊になって突撃してきている

素人相手には効果的だろうがプロ相手には悪手だ

先程倒した亜人の持っていた斧を拾う

「アウルさん、その斧で何を…」

「はああああー！」

「…相変わらずだね」

拾った斧を本気で横に薙ぎ払うと突撃してきていた魔獣達が衝撃波で飛ばされる

控えめに発生させた真空派もあって多少の切り傷を与えられた

致命傷には…良かった、なっていない

「…貴女、どういう強さしてますの？」

「今はそれよりも、ほら」

「そうですね…私も攻撃に周りますわ！」

見ると槍を持った亜人がこちらに来ている

更に弓を持った亜人が正確な射撃をしてきてこちらの動きを妨害してくる

一応手斧で弾いていくが、わざと当てずに足元へ撃ち込んでくるのもあってやりづら
い

そこへ更に召喚士が召喚術で攻撃してくる

「リビエル、私が貴女を守るので召喚術で槍の亜人を。フェアは周りこんで後ろの弓兵を！」

「分かりましたわ！」

「分かった！」

撃ち込まれてくる矢を弾きながら地面に斧を振り下ろして土煙を上げる

これで敵の視界を遮って弓で狙いづらくすると同時に意識をこちらに向けてフェアから視線を外す

更に斧を振って土の塊を召喚士に飛ばして妨害した

「行きますわよ、雷精霊タケシー！」

リビエルが宣言するとポワンという音と共に黄色くて丸っこい何かが現れた

それはケヒヒヒと笑うと電気を纏い始めた

「ゲレレサンダー！」

リビエルの言葉と共に強烈な電気の奔流が上空より亜人に降ってくる

「ギャオオオオオン！」

雷に打たれた亜人は身体を痙攣させて怯んだ

その隙に私は召喚士に突進してそのまま飛び膝蹴りを叩き込む

土煙の向こうから急に現れた私に対応出来なかった召喚士は真面に喰らって吹っ飛んだ

弓を持った亜人は私に矢を放とうとするが死角から現れたフェアに斬りつけられて弓を落とした

更に私が掌底で気絶させる

「終わったわね、向こうは……」

「まだ余裕がありますわ。今のうちに！」

「ええ、急ぎましょう」

片側を全滅させた私達は急いでもう片方へと向かい、敵を挟撃する

敵を倒すことより時間稼ぎに注視していた為か三体ほどしか倒せてはいなかったが、それでいい

体力を温存していたセイロンやグラッドが一気に盛り返して一瞬で敵は瓦解した

それから少しした後、獣の軍団は撤退したのでアロエリの保護を優先することにした
「なんとか追っ払えたわね…」

「ええ、三人目の御使いも無事に合流出来ましたし上出来でしょう」

「そうだね。つと…アロエリ、だったわね。無事で何よりだよ」

「別に、人間に身を案じてもらっても俺は嬉しくない」

「なっ…」

「ちよつとあんた!? 助けてもらつたという随分な態度ね!」

あまりの物言いに我慢出来なかつたリシエルが突つかかった

「喧しいぞ、小娘」

「こむ…っ!」

「小さな嘴でびいびい囀るのは貴様の勝手だがな。独り善がりな善意を押し付けてくるな。俺には迷惑だ」

「ぐぎぎぎ…」

「ね、ねえさん! 落ち着いて!」

ふむ…これは流石に見過ごせないな

「リビエル、御子さまはいずこにおられる？」

「え、あ…ほら、こちらですわ」

「お待ちなさい」

「なんだ、人間に用はない」

「流石にあれは言い過ぎでしょう。貴女がどう思っていたとしても助けられたことは事実です。感謝することも真面に出来ないのでは貴女の嫌う人間と同等かそれ以下なのでは？」

「なんだと!? 貴様…!」

「いい加減にしろ、アロエリ!!」

「っ…!」

未だ喰つてかかろうとしてくるアロエリをセイロンが怒声で止めた

「この者の言うことは尤もなことだ。どういう経緯であれ我等は助けられている。その事実に感謝も出来ないような阿呆ではなからう。それとも、お主の御使いとしての誇りはその程度のものなのかね？」

「くっ…!だが俺は、人間の助けなど…」

「ならあのまま死んでいた方が良かったと? そんな馬鹿げたことを思つてはいないでしょうね?」

「……ちっ」

アロエリは悔しそうにしているが反論のしようがないことを認めただろうリシエルの元へ行くと

「…さつきは言いすぎた。助けてくれたこと、感謝する」

「え、ええ…」

リシエルは先程とは180度違う言葉に戸惑いを隠せていないが、怒気は消えていったしこれで良いだろう

そしてアロエリは改めてミルリーフの元へ行き

「遅くなつてしまつて申し訳ありません、御子さま」

「ピイツト」

「御使いが一人アロエリ、ここに参上致しました。此度の災難、未然に防ぐこと叶わず真に申し訳……」

「これこれアロエリ。そういつた話は後でゆつくりとしよう。取り敢えずは、腰を落ちてかけられる場に向かおうではないか」

「いや、しかし…」

「善哉善哉。ほれ、我が案内してやろう」

そう言うときアロエリはアロエリの腕を掴んでそのまま街の方へと歩いていく

「な…っ!?セ、セイロン!」

「もはや断りもなく、あんたの家が溜まり場になってるわね」

「流石に慣れたわよ、もう…」

呆れ気味に言ったりリシエルの言葉にフエアは笑いながら応えた

そのまま私達も宿へと戻るために歩き始める

しかし御使いと合流出来たのは良いものこれは前途多難だなあ…

「けど、どうしてアロエリはあからさまに喧嘩を売ってきたのかな?」

道中、フエアが何気なく呟く

「人間のことが大嫌いだからですわ」

「え?」

「彼女たちの祖先は、人間の都合で労働力として召喚されてきた。あまりに酷い扱いに耐えかね、逃げ出して今に至っているの」

その問いにリビエルは顔を伏せ気味にして答える

「つまり、はぐれ召喚獣の子孫だってこと?」

ルシアンがそう尋ねるとリビエルは顔を上げて

「貴方たちの考え方で言えば、そうですね。けど私たちからすれば、気の毒な被害者たちですわ。『ラウスブルク』とはそういったもの達が守護竜の庇護の下に人間と関わらないで隠れ住んでいた場所：彼女にしてみれば、この状況は不本意でしかないでしょうね。関わりたくない人間と関わらざるを得ないのでですから」

「理解は出来たわ。けど、だからってはいそうですね。納得は出来ないわね」
「フェア…」

「ミルリーフのことを守るためには、力を合わせなきゃダメなもの。私たちだけでも、貴方たちだけでも、きつと守りきれない」

「ええ、そうですね。フェアさんの言う通りですよ。召喚獣とか人間とかそんなことを気にして仲間割れしていたら、ミルリーフちゃんが可哀想ですよ」

「…ですわね」

ポムニットの言葉に表情を緩めたりビエルは、しかしすぐに真剣な顔になり

「でも、アロエリ達が人間に抱いてる敵意はとも根深いものよ。ことに、彼女は一途に思い詰める性分ですし：簡単に割り切ることは出来ないでしょうね」

「……」

グラッドやミントの顔が暗くなる

人間で、召喚術と深く関わっているからこそやるせない想いもあるのだろう

しかし、だ

「…だからといって人間そのものに敵意を抱くのは間違ってますけどね」

「え？」

「酷い扱いをしてきた人間に対して恨みを抱くのは当然でしょう。しかしそうでない、そんなことをしていない人間に対してまで憎しみを向けるのはお門違いというものです。それこそ独り善がりで勝手な敵意でしかない」

「そうかもしれない、ですけど…」

「そして見た感じ、彼女はそのことに気付けないような馬鹿ではありません。きつと先祖からの話や人間に扱われている他の召喚獣を見聞きして来てどうにもならないところまで来てしまったのでしょうか。なればこそ、その固まった心を溶かしていきさえすればとても心強い仲間になりますよ。大丈夫、きつと分かり合えます。分かり合えなかったその時は…まあ、ミルリーフを守れないで終わるだけですな」

「…最後の一言は余計よ、あんた」

「そこも大事ですからね。あれだけ御使いとしての責務を重く受け止めているならその役目を果たすために分かり合わなければならぬということにも気付くでしょう。後は彼女のそんな気持ちを利用するような形にならないよう気を付けて友情を育めば良いだけです。口で言うほど簡単ではありませんけど…希望にはなるでしょう」

「なるほどねえ。あんたってやつぱ凄いわ」

「褒めてもコーヒー位しか出ませんよ」

「十分よ、それで」

その後は他愛ない雑談をしながら帰路についた

しかし、ああは言ったものの内心私は不安である

ああいう盲目的な敵意というのは中々修正出来ないし、大抵の場合何かしらの問題を呼び込むことになる

先程結果的に自分から謝罪と感謝を述べることが出来たことを鑑みるにそこまで心配する必要はないかもしれないが：警戒はしておくことにしよう

そして宿に着いた私はその警戒心は正しかったことを不本意ながら実感することになるのだった

第二十話 獣皇との邂逅

「拾った…だと？」

「ええ、そうよ。たまたまこの子を拾ったから私達はこの一件に深く関わってきたの」
「ピイツ♪」

忘れじの面影亭にてアロエリへの事情説明が行われている

ただあまりに突飛な始まりにアロエリは不信感を丸出しにしていた

「信じられん…それだけの理由でわざわざ俺達の戦いに関わるとは、かえって不自然だ」
「あんたねえ…人間のここといったいなんだと思ってるの？」

「敵以外の何者でもない」

リシエルの苦言を一刀の下に斬り伏せたアロエリは更に続ける

「人間というものは傲慢で、欲深くて、油断がならない。俺達はずっとそう教わってきたんだ」

「でも、それは貴女たちの立場が特別なものだったせいだ…」

「この世界の同胞達の多くは、その特別な立場とやらにある。都合良く使われている、道具同然の立場にな」

「…っ」

ルシアンの言葉もあっさり突き返す

「否定するなら試しに尋ねてみるといい。きつと俺と同じ考えを持つ仲間達が沢山いるはずだ」

それを聞いて思い出されるのはあの時のミルリーフの言葉

（繋がれてるみんなが嫌がってたから助けたの…自由になりたい、生まれた世界に今すぐ帰りたいって…なのはどうして助けてあげたらいけないの!?)

「そうかもね…」

目を閉じていたフェアがそう呟くと、目を開けて真っ直ぐにアロエリを見た

「でも、それとこれとは話が違うんじゃないの?」

「なんだと?」

「貴女がどう思おうとも関係なく私達はミルリーフのことを助けたいって思ってるの。理屈なんかじゃなくて、そうしたいって思ったからやってるの。それだけなのよ」

「信じるも信じないも、結局は本人次第と言うことになるわけか。試されておるのはそなた自身だぞ、アロエリよ」

「くっ…」

セイロンに諭され、それを否定出来ないのか悔しそうに顔を歪ませている

そこにリビエルが言葉を掛けた

「関わるだけの理由がどうしても必要だと言うのであれば、少なくともフェアにはそれがありますわよ」

「理由だと?」

「ほう、それは初耳だな」

恐らくはフェアの父親の話をするつもりなのだろう

御使い達は冒険者をしているフェアの父親に助けられたと聞く

その娘であるから関わる理由はある、と…筋が通っていないこともないだろう

「話してあげてもいいかしら?」

「別に、良いけど」

フェアに確認を取ったりリビエルはアロエリとセイロンに向き直ると話し始めた

「先代がなくなつた時、私達を逃がすために戦つてくれた冒険者、彼女はあの男の娘よ」
「!?!」

瞬間、二人の顔が驚愕に染まつた

そしてセイロンは神妙な顔になり、アロエリは…一切の表情がなくなつた

これは、危ないかもしれない

「詳しい事情を聞いたわけじゃないけどさ、あのバカが関わつてる以上知らんぷりも出

来ないのよ」

「その話は…本当なのか？」

絞り出すといった感じでアロエリが言葉を口にする

そして腕に力が入り始めているのが分かる

「え、ええ…そうですけど…」

二人が何故こうなっているのか分からずに戸惑いながらもリビエルは肯定した

「そうか、ならば…」

アロエリは決意を固めた表情をして、右手を握りこんだ

間違いない、本気で殴るつもりだ

「償いは貴様の命でもらうっ!!!」

そう叫んだ直後アロエリは机をなぎ倒して状況が飲み込めていないフェアに向かっ

て拳を突き出した

しかしその拳はフェアに届くことは無い

私が横から彼女の腕を掴んで止めているからだ

「え、ちょ…なに!?!」

フェアは前振りなく突然襲われたことに混乱しているのかまだ動けていない

咄嗟にグラッドがフェアの前に出てきて彼女を庇う

「人間が…邪魔をするなあああ!!」

私に攻撃を防がれたアロエリは反対の手で私の顔を殴ろうとしてくる

私はそれを当たる直前で躲してから伸びきった腕を掴んだ

するとセイロンがアロエリの後ろに周り込んで私に目配せをしてきた

それを受けた私は掴んでいた彼女の両腕を下に振って離す

そして彼女の元へ戻った腕を今度はセイロンが掴んで後ろへと回し、擒拿術で抑え込んだ

これでもうアロエリは動けない

「離せ、離せえええっ!!殺してやる、殺してやるううっ!!」

「やめよ、アロエリ!!」

アロエリが抑えられている間にフェアはグラッドやミントに連れられて少し離れた位置に移動していた

「なぜですの!?!どうして、そこまでこの人を憎むの!?!」

リビエルが声を荒らげて聞くとアロエリは

「仇だからだ…」

そう、答えた

「え?」

「俺はこの目で見た！先代様の首を跳ねたその張本人は…コイツの父親だっ!!」
「なあ…!?!」

その言葉にフエアの目は見開かれ、空いた口は塞がらない
「ウソ…そんな、だつて……」

リビエルも同じような顔になっており、困惑している

「事実だ、リビエル」

そこにセイロンが落ち着いた声でリビエルに告げた

「だが、あれにはやむを得ぬ事情が…」

「聞きたくない!!どんな理由であろうと、コイツの父親が先代を殺したんだぞ!?!先代さえご存命なら、『ラウスブルグ』も守れたはずだ…なにもかも、みんな貴様の父親によって壊されたんだ!!」

アロエリの言葉にフエアは悲痛な顔になり、何も言えなくなってしまった

「そんな男の娘の言葉など、俺は信じないっ!!」

「ぐうっ!」

アロエリはそう言い放つとセイロンの膝に蹴りを入れて体勢を僅かに崩してから肩を自ら外して無理矢理脱出した

関節を嵌め直すとそのまま文字通り店を飛び出していつてしまった

「待つて、アロエリ!？」

「ピイツ!」

そしてリビエルとミルリーフが後を追って行ってしまう

…いや、ミルリーフが行っては駄目だろう

そう思いはしたが、まずはこの場を収めないといけない

単純にあれた机や椅子を戻すだけじゃなく、セイロンから事情を聞いてフェアの心を
落ち着かせなければ

私はミルリーフの無事を祈りながら場の収束の為に動くのだった

暫くして、また食堂に集まった私達はセイロンから話を聞くことにした

「ねえ、本当のことなの？セイロン…バカ親父が、先代の命を……」

「ああ、事実だ。しかし、それは先代自身が望まれた結果なのだよ」

「え？」

セイロンから告げられたのは先代が死ぬことを望んでいたという事実だった。

「お主の父親は、請われて介錯を務めたに過ぎぬ。そこに悪意はない、その場に立ち会った我が保証しよう」

「そっか、そうだったんだ…」

フェアは安心とも悲しみともつかない表情を浮かべている

「でもどうして自分から死ぬことを選んだりしたの？ 守護竜の力つてとてつもなく凄いものなんですよ？」

「そうよ、そうよ！ 戦ってたら勝てたかもしれないのに」

ブロンクス姉弟の質問にセイロンは真剣な眼差しで答える

「確かにアロエリが言ったように、先代が本気で力を用いれば『ラウスブルグ』を守ることは可能であったやもしれん。だが、先代にはそれが出来ぬ理由があったのだよ」

「理由？」

「争いの火種を外から持ち込んで来たのは、クラストフの一味だ。だが、実際に反旗を翻したのは…『ラウスブルグ』で共に暮らした、同胞達だったのだよ」

「内紛ってことか!？」

「長きに渡って守り、慈しんできた民達に牙を向けるなど先代には出来なかつた。戦う以前に、気持ちにくじかれていたのだ」

「だからって自分から命を絶つなんて…」

「敵の目的が己の力であると、先代は知っておられたのだよ。故に、それを確実に防ぐ決断をされた。命を絶ち、力の全てを形見に封じ込めて、後継者として眠っておられた御子殿と共に逃がされたのだ」

「そこまでして止めようとした敵の目的ってなんなのよ？」

「それは我にも分からぬ。ただ、残された最後の一人…先代の側近を務めた御使いの長ならば、あるいは」

「最後の一人…御使いの長…」

「うむ…アロエリも本当は分かっておるのだ。先代が、自分の意思でお主の父親の刃を受け入れたことを。だが、納得するには彼女は余りにも若い。そなたに理不尽な怒りをぶつけねばいらぬほどにな。すまなかつた…」

そう言つてセイロンは頭を下げた

普段の快活で少し偉そうな振る舞いからは考えられないが、この男は本来こういう真面目な気質をしている

だから身内がある意味恩人である男の娘を理不尽に殺そうとしたことに誰よりも責任を感じ、心を痛めていたのだろう

「……………」

フエアはそんな様子にも何も言えなかった

自分自身は怒っておらず、許してはいても事の重さ的にそう簡単に結論を出していいものではない

普段とは全く違うセイロンの態度も相まってどうしていいのかわからなくなっているようだ

流石に十五の娘に背負えるものではない、そう思って私が口を開こうとした、その時「…ん？」

外から羽音が聞こえてきた

アロエリのものでなく、リビエルだ

リビエルは相当に慌てた様子で食堂に転がり込んで来ると、大声を上げた

「た、大変ですわ!!」

「ど、どうしたんですかいったい?」

その様子に戸惑いながらもポムニツトが尋ねる

「アロエリが御子様を連れて出ていってしまっただけです!!」

「なんですすって!!」

…いくら頭に血が上っているとはいえ、そこまで考え無しの行動に出るとは

色々と言いたいこと、やらなければならないことはあるが…今するべきことはただ一

つ

「わ、私、必死になって止めたんですのよ!!でも、でもっ……!全然、聞いて……くれなくて……っ」

「アロエリの奴め、軽率な……」

リビエルは泣いているし、セイロンも流石に余裕がない

フェア達も完全に同様している

ここは私が纏めた方が良さそうだ

私はリビエルに近付くと首筋に指を当てて血流を制御して心臓の鼓動を抑える

「取り敢えず落ち着きなさい、リビエル」

「え、ええ……そうですわね」

「向かった方角は分かりますか?」

「えっと……街の東で草原の向こうまで行っていたような……」

「フェア、その方角には何があります?」

「街の東、草原の向こう……それって!?!」

「墓地……よね?」

フェア達の回答にみんなの顔が一瞬暗くなる

が、ここで立ち往生している訳にもいかない

早く連れ戻さなければ

「分かりました、では行きましょう。道案内は頼みましたよ！」

「わかったわ！絶対に連れ戻してひっぱたいてやるんだから！」

そうして私達はフエアを先頭に墓地へと向かった

その先に最悪の敵がいるとは露知らずに

「見つけました！」

ポムニツトの言葉通り、私達はアロエリとミルリーフを見付けた

しかしアロエリは巨大な体躯の亜人と戦闘しており、膂力の差もあってか分が悪い

アロエリ達との距離はかなり空いている上にこの墓地は中々高低差の高い段々畑の

ような構造になつているのですぐに接近が出来ない

「獣皇だ?!?よりによつてこのような時に…」

「あのままじゃ、二人ともすぐにやられちゃうよ!」

「くそつ、どうすりゃいいんだ!?!」

私が跳躍で一氣に…とも考えたが周りには鬱蒼と木々が生えておりそれが邪魔で上手く行けるか分からない

しかし考え込んでいてもどうにもならないので私は走り出した

「アウル!?!いくらそなたでも無茶だ!!」

「ならこのまま黙つてやられるのを見てますか?違うでしょう!!」

セイロンが止めて来るが正論をぶつけて黙らせる

すると後ろの方でフェアの声がした

「ミルリーフ!よく聞きなさい!貴女が、アロエリを守りなさい!!今の貴女はもう、守られるだけの存在じゃないはずよ!貴女の為に必死に戦つてるアロエリの想いに応えてあげたいなら…ありつたけの力を振り絞りなさい!!」

「っ!?!」

フェアの声に呼応してか、フェアから不思議な力の波動を感じた

召喚術の魔力?

いや、違う…そういった私が知っているものとは全く異なるものだ

それが何なのかは分からないが私のやることは変わらない

しかし、アロエリ達までまだ距離がある…しかも今アロエリが吹っ飛ばされてしまった

「ぐあ、がつ…」

アロエリはそのダメージでまだ立ち上がれていない…急がなければ！

その時、アロエリと獣皇の間にミルリーフが入った

「ピギヤア！」

「!？」

「ピギヤアアアア…っ、ギユアアア!!」

ミルリーフの体が光ったかと思うと人型となったミルリーフがその小さな拳で獣皇を殴り飛ばした

「グガアアッ!？」

獣皇は三段上にまで飛ばされている

見たところ多少のダメージはあるようだが、すぐに立ち上がってこちらに突進してくる

同時に私は二人に合流した

「はあっ、はっ、はあ…やった……やったよ、ママっ♪」

ミルリーフはフェアに向かって手を振っていた

その可愛さに和みたい所だがそうは言っていられない

私はミルリーフの頭を撫でながら話しかける

「良くやりました、ミルリーフ。成長しましたね」

「うんっ！」

「ご褒美をあげたいところですが今はそういう状況じゃないのは分かりますね？では、

貴女はアロエリを連れてフェア達と合流して下さい」

「…アウルお姉ちゃんは、どうするの？」

「私はあいつと戦います。なに、心配は要りませんよ」

「でも…」

「それに、周囲には獣の軍団や召喚士がいます。獣皇との戦いに水を刺されないよう彼

らをフェア達と共に足止め、及び撃破をお願いしたいんですよ。一人前の貴女に、ね？」

「アウルお姉ちゃん…分かった、任せて！」

そう言うミルリーフはアロエリを支えながら近付いてきたフェア達と合流を果たした

途中亜人達の攻撃があつたりしたが、それは空を飛べるリビエルの召喚術によつて撃

退されている

それにしても、お姉ちゃんか…なんだかんだミルリーフに名前を言われるのは初めてだったのでこの呼ばれ方も初めてだ

悪くないな、そう思いながら轟音を上げて迫ってくる獣皇の拳を躲す

さて、他は彼女達に任せて私は私のやるべきことをしようか

そして私は獣皇と対峙した

その予想外の強さに驚愕するのは、それからすぐのことだった

第二十一話 屍人VS獣皇

獣皇の拳を避けた私はそのままその腕に組み付いて関節を破壊しようとして試みるのだが、あまりに頑丈な獣皇の腕は人の身で破壊出来るものではなかった

私が離れるよりも早くもう片方の腕で私の顔に向けて拳を放ってくる

それを顔を横に倒してなんとか避けるが、頬に掠って血が流れた

すぐに腕を離して距離を取る

獣皇の攻撃はどうやら力任せで技量など度外視されている

しかしそれを補って余りある膂力があるため油断は出来ないし、タフネスさも備えていると見て良いだろう

これを破るには相手のタフネスを上回る程の勁力を与えるかヒューイのように投げ飛ばし続けたり脳を揺らすかしないと駄目だろう

それを実行しようにもこいつは巨体に似合わない速さも持つてるから厄介だ
さて、どうするか…迫り来る剛腕を避けながら私は考えていた

☆・☆・☆・☆・☆
☆
☆
☆
☆
☆
☆
☆
☆
☆

アウルさんが飛び出して行ったあと私達も急いで後を追ってアロエリとミルリーフと合流出来た

アロエリは獣皇に殴られたことで自分の足で立てないほどのダメージを受けてる
そんなアロエリにリビエルが近付いて

「癒しの光よ……」

そう言うのと翼が淡く光ってアロエリの身体を優しい光が包み込んだ
傷が癒えたのかアロエリは立ち上がってリビエルにお礼を言っている

何にせよ戦えるならそれに越したことはないよね

顔が暗いからちよつと不安はあるけど…四の五の言ってられない

アロエリを加えた私達は襲いかかる獣の軍団相手に武器を取って立ち向かった

あれから暫くしたけど、まだ敵は残ってる

とは言えその数は少なく、私達の人数の方が多いくらい

早く全員倒してアウルさんの援護に行かなきゃ：

そんなことを考えてたら槍を持った亜人と斧を持った亜人が連携して突撃して来た

私達の方が多いとは言っても多方向にいる獣の軍団を倒すために二手に別れてるか

ら私の近くには御使いの三人しかない

振り下ろされる斧を横に避けた私はその斧に向けて剣を振り下ろして上から抑えつける

亜人の力には適わないけど少しは動きを制限出来るはず

この予想は的中して斧を上げようと必死になった亜人の顔を側面からセイロンの掌底が叩く

そんなセイロンを槍で貫こうとしたもう一人の亜人はリビエルの召喚術で怯んだ隙をアロエリが矢を二本放って武器を落とさせた

痛みに苦しむ亜人の顎をセイロンが蹴り抜いて気絶させる

その間に私はふらふらになった斧を持つてる亜人の腕を斬りつけて武器を握れなくして、それから跳躍して剣の腹を思いつきり脳天に叩き込んだ

「今ので最後かな？」

「どうやらそのようだな。あちらも丁度最後の一人を倒したようであるし」

「ならば…」

「ええ、後は獣皇だけですわ！」

そう言つて皆が一斉にアウルさんと獣皇が戦つてる方を向いた

その時見たのは血を吹き出しながら宙を舞うアウルさんの姿だった

「アウルさん!？」

アウルさんはそのまま私達とグラッドお兄ちゃん達がいる場所の間の地面に受け身も取れずに落ちてきた

アウルさんの周りに流れ出た血が広がって…

「リビエル！」

「わ、わかつてますわセイロン！」

セイロンとリビエルはいち早くアウルさんの元へと走り出した
それを見て我に返った私達は皆我先にとアウルさんの元へ集う

「酷い…こんな傷…」

「ちよつとアウル、しつかりしなさいよね！あんだこんなんで死ぬようなタマじやないでしょ!？」

ミントお姉ちゃんやグラッドお兄ちゃんは顔を蒼くしてるしリシエルやルシアンはもう泣いている

そんな中セイロンがアウルさんの傷を確かめた

「…これは酷い、内蔵にまで彼奴の爪が達しておる。今すぐ治療せねば助かるまい」

「なら私の癒しの光で！」

「本来なら好ましくないが…致し方あるまい、頼む」

「その必要はありませんよ」

「え?」

リビエルが癒しの光を使おうとする直前、アウルさんが声を発した

その声はとも落ち着いていてこんな大怪我をしていることを微塵も感じさせない
するとアウルさんは驚いている私達を他所に軽快に跳ね起きて獣皇の元へと歩き出した

「な、なにを考えておる!?!アドレナリンの過剰分泌で痛みを感じていないのかもしれないかもしれぬ
が今のお主は重症なのだぞ!!」

「そうです！今すぐにも私が癒して…」

「今の私にとつてはこんなの怪我の内にも入りませんよ。心配しなくても勝手に治りますから」

「何を馬鹿な……なっ!？」

セイロンはそんなアウルさんを止めようとするけどアウルさんの傷が塞がってるのを見て……え？

うそ、そんな……なんで塞がってるの!？」

そう言えば以前屍の再生力がどうか言ってたけど……これがそうなの？

皆が呆気にと取られているといつの間にか獣皇が間近に迫っていて、走りながら全体重の乗った一撃をアウルさんに向かって放とうとしていた

「っ!?!アウルさん、あいつが!!」

「大丈夫ですよ、フェア」

アウルさんは獣皇の攻撃を見もしないで止めてみせた

それどころか指二本しか使っていないんだけど……

「っ!?!」

これには流石の獣皇も目を丸くして驚いている

その直後、アウルさんから言い様もない威圧感……いや、殺気が立ち上った

それに危機感を抱いたのか獣皇が離れようとするけどそれよりもアウルさんの拳が炸裂する方が先だった

「ギャオオンッ!?!」

吹き飛ばされ段差に叩きつけられた獣皇が悲鳴を上げる

見るとアウルさんの髪が白くなって肌に赤黒い紋様が浮かんでる

これってあの時おじいさんの召喚術を叩ききった時の…でもあの時は紋様は浮かんでなかった

てことはこれが本当の本気?

「比類無きパワー、スピード、タフネス、何よりも破壊衝動を備えているある意味最も警戒しなければならぬ存在だと聞いてどんなものかと思いましたが…確かに予想以上に強くて焦りました。ただの怪力で屍の力を使わざるを得ないとは恐れ入ります。です…」

アウルさんはそこで言葉を切ると獣皇に向かってゆっくりと歩き出した

「グルル…っ」

獣皇はそんなアウルさんから距離を取ろうとするけど後ろが壁のように高い段差だから逃げられないでいる

「あの魔人の方が余程強かったですよ。まあ数万年の時を生きた者と比べるのは無情か

もしれません。私が私を殺したいなら天変地異を起こせる程の強さがなければ無理ですよ」

魔人？

数万年？

なんのことだろう。よく分からないけどアウルさんのいた世界にはそんなおつかないのが居たのかな……

それにしても天変地異は言い過ぎなんじゃ。でも内蔵が損失するような傷がすぐに治ったし、それくらいの破壊力がないと倒せないのかも

……考えたら恐ろしくなってきた

この人が敵にならなくて本当に良かったと思う

「さて、そろそろ止めとしましょうか。安心して下さい、決して殺しはしませんから。ただそれなりの怪我はすると思いますので覚悟はしておいて下さいね」

そう言うアウルさんは右手で拳を作って腕を引いた

獣皇の顔が心なしか引きつってるとような気がする

そしてそのままアウルさんの拳は獣皇の胸へ叩き込まれて、それを真面に受けた獣皇は後ろの壁にめり込んだ

「ん……うん、致命傷になるような傷はありませんし放つておいても死ぬことはまずな

いでしよう。軽く手当だけして後は敵が回収するのに任せますか」

そう言つてアウルさんは獣皇を壁から引きずり出してその身体を横たえてから手当をした

自分を殺そうとした敵なのに殺さないように手加減するだけに留まらず倒した後に傷を診て手当までするなんて…優しいのかおつかないのかどっちなんだろう

いや、アウルさん自身は優しい

ただ命に関わる戦いだから殺しはしないという一線を守りつつ容赦しないだけなんだ

このままじゃ勝てないって思うまで自分の力を使わなかったくらいだし、ひよつとしたら戦いたくもないのかもしれない

そんなことよりミルリーフとアロエリのことだよ…そう思つて後ろを振り返つた瞬間、ミルリーフが私にしがみついていた

「わわっ…とと」

「ママア〜！怖かつたよお…」

「もう…あんなに頑張つたのに泣かないの」

「だつてえ…っ」

うん、まあ…初めての戦いの上に相手はあの凶悪な獣皇だもんね

そりゃ怖くて仕方ないか…

私はミルリーフの抱き締めながら頭を優しく撫でる

それを続けながら言葉を紡いだ

「そうだね、怖いのに良く必死になって戦えたね…本当に頑張ったよ、貴女は」

「…うんっ♪」

ミルリーフは目一杯の笑顔で応えてくれた

ああ可愛い…じゃなくて、これならもう平気かな

でもすぐに離すのは可哀想だし私自身もう少し一緒にいたいと思ったからそのままいてあげた

そうしながらも顔をアロエリの方に向けて様子を見ると、丁度ポムニットさんが手当をしようと近付いた所だった

「お怪我の方は平気ですか？」

そう言いながら手当の為にアロエリの腕を取ろうとしたけど

「触るなっ!!」

アロエリはその手を払い除けた

ちよつと…それは流石にないんじゃないかな

「ちよつとあんた！ポムニットになんてことすんのよ!？」

「そうだよ！怪我を心配してくれただけじゃ…」

案の定ブロンクス姉弟が嘸み付いた（嘸み付いてるのは姉だけの気はするけど）

それでもアロエリは

「心配してくれなんて、誰も頼んじやいない！俺の事など放っておけ！」

…あれかな？

反抗期の子供なのかな？

「アロエリさん…」

怪訝にされても尚アロエリを心配しているポムニツトさんは本当に優しい

私もあんな風になれるかな…

「人間なんかは、助けられたりはしない…人間なんかは…哀れみの目で見られて、たまるかあぁっ！」

「…っ」

大人達はそんなアロエリの様子を見て顔を伏せてる

やっぱり召喚術に関わる者として辛いところがあるんだと思う

でもいつまでもそのままじゃいけないと思うんだ

これから前向きに考えていかないかと…

「いっそ、あのまま殺されていた方がマシだった…」

…なんか、今物凄いいこと言ったような気がする

リビエルも目を見開いて驚いている

「御使いの誇りに殉じた死であるならば、俺は……ぐあっ!!」

アロエリが最後まで言うよりも早くセイロンの蹴りが腹に入った

「巫山戯るなよ、小娘」

その声は普段の快活な様子は微塵もなく、途轍もなく低くて怒りを押し殺したような声だった

「この状況を招いたのは誰だと思っておる!？」

「……っ!」

「お主が何処で犬死にしようとも我は構わぬ。だがな…御子殿を危険に晒すことは許されぬ!!」

「つつ…つう………」

「私情に流された拳句守るべき使命を忘れて自暴自棄に振る舞う…そんな貴様がどの口で御使いの誇りなどを語れるというのだ? 恥を知れ!!」

「う…つう………」

アロエリは目に涙を浮かべてる

色んな想いが混ざり合って自分で消化しきれないんだと思う

私もそうなったこと何度もあるから…

「アロエリ…」

「守れなかった…御使いなのに、俺は守れなかった…守護竜様も、里も何一つ守ることが出来ずに…っ」

「貴女だけじゃないわ、アロエリ…私だって悔しいです。情けなくてたまらない。でも、だからこそ私達は命を粗末にはいけないの。千代様のご遺志を無駄にしないために」

「リビエル…」

その時、不気味な音が…何かが胎動するような音が聞こえてきた

「っ!？」

その音は段々と早くなっていく

「なんなの…この不気味な音は？」

「あいつの鼓動だよ！もう動けるようになったんだ！」

私の間にミルリーフが答えてくれる

アウルさんのあの攻撃を受けてもう回復したっていうの!？」

やっぱり獣皇も化け物じみてる…

「ガルル…ツガハツ、ガ……ッ」

獣皇は唸りながら身体を起こしていく

それを見てアウルさんは皆の前に出て、その他の皆も私とミルリーフを守るように陣取った

勿論私もミルリーフの前に立って剣を構える

「グルルガアアアアアアアアアアアッ!!」

「まだ立てるなんて、しぶといわね!」

「ギャオオオオオオオオオオン!!」

獣皇も殺気を剥き出しにして襲いかかる一歩手前だ

正に一触即発、また戦いが始まろうとしたその瞬間

「え…:笛の…:音?」

心地良い笛の音が何処からか聞こえてきたの

「ガロロロロロ…」

見ると、獣皇の目から明らかに殺気が霧散していて身体力も程よく抜けていた

そしてそのままどこかへ去っていった

「なんか、帰っちゃったみたいですね??」

「た、助かったあ…」

ポムニツトさんの気の抜けた声とグラッドお兄ちゃんの心底ホッとしたような声で

ようやく本当にこの日の戦いが終わったことを悟る

皆身体の力を抜いて武器を下ろした

「これでようやく一段落って所かな…さあ皆、帰ろつか？」

「うんっ！」

そうして私達は家路に着き始めた

その頃アロエリ達は…

「……」

「ああいう人なのよ、フェアって。過ぎたことには拘らないし、責めたりもしない」

「けど、俺は…」

「御使いたる者は、御子殿の側へと控えその身を守るべし。何度も言わせるでない、この

馬鹿者め」

そう言うセイロンの顔は穏やかで、僅かに笑みを浮かべてさえた

「セイロン…ああ…分かってるさ…」

そうこうして結局アロエリは帰ってきた

私は何も言わずに彼女を迎え入れた

「なんで怒らないのよ」ってリシエルはぶんすか腹を立ててたけど…怒れるわけない

じゃん

だって、私とアロエリはある意味で似た者同士だったんだから

理不尽な境遇に対して何も出来ないもどかさや、覆せない自分の非力さが悔しくて

…当たり前散らすことでしか紛らわせない

今よりももっと小さかった頃の私もそうだったと思う

いや、大人になったつもりで一丁前なことを言っている…今も昔も私は私で変わってないのかもしれない

やっぱ、自分じゃよく分かんないや…

夜、なんとなく眠れなくて庭をぶらぶらしてたら人影が見えた

多分大丈夫だとは思って泥棒とかだったら困るし宿にいる誰かなら話し相手になつてくれないかなと思って近付いていくと、そこにいたのはセイロンだった

「あれ、セイロンどうしたのこんなところで」

「ん、お店主殿か！お主こそどうしたのかね」

「私は…なんとなく眠れなくて」

「そうか、我も…似たようなものか。少し考え事をしておつてな」

「考え事？セイロンもそんな風になる時あるんだ」

「ハツハツハ、似合わぬかね？」

「んー考えてみたらそんなこともないかな？でも私はそうやって陽気に笑ってるセイロンの方が良いかな」

「うむ、笑顔でいるのが一番！それは人も召喚獣も変わらぬことだろう」

「そうだね…」

私は手頃な切り株に腰掛ける

それから少しの間話してたけど、次第にお互い無言になっていった

なんとなく気まずくって何か話そうかなって思ってたらセイロンが徐ろに口を開いた

「店主殿は、怒らないのかね？」

「え、なにが？」

「アロエリがしでかした一連の出来事だよ」

「怒ったところでもうすんじやったことじゃん。それに…そうさせない為に貴方、先にアロエリを蹴ったんでしょ？」

「あつはつはつは！やれやれ、しつかりお見通しか」

「私だって伊達に宿を切り盛りしてないってことだよ」

「そうであつたな。まあ人間の言葉にはあやつもただ反発するだけだろうが、私の叱責であればいくらかは堪えるだろうと思つてな」

「でも、ちよつとやりすぎだつたんじやないの？いくら何でも女の子に蹴りは…」

「そういう物言いは、彼女にとつては逆に侮辱になるぞ。アロエリは女であることよりも御使いであることを選んだ。それほどの覚悟をもつて、彼女は使命に当たつていたのでよ」

「なるほどね…」

女であることよりも、か…女の子として扱われた私には、その気持ちはよく分からないかも

でも、ミルリーフを守るために女の子としての幸せを捨てなきゃならないつてなつたら…うん、その時は迷いなく捨てるのかもしれない

そんな状態になつてないから結局分からないんだけどね

「あの時…彼女は罰せられることを望んでいた。だから、はっきりと目に見える形で罰してやつたのだよ。ずっと引きずつてきた自責の念から解放してやるために、な」

「うくん…よく分かんないなあ、それも」

「まあ、御使いの中でも我は少しばかり特異な立場であるからして冷めた目を持ち続けていられるのやもしれんな…」

「特異な立場？」

セイロンの独白のような言葉に少しひっかかるようなものを感じた私は思わず聞き返してた

そして返ってきた答えは予想外過ぎるものだった

「我は『ラウスブルグ』の住人ではないのだよ」

「え!？」

「故あって、世話になっていた客人なのだ」

「ちよ、ちよつと待って!?!なんでよそ者が御使いなんて立場になつてるの!?!」

「先代から頼まれたのだ。御子殿が後継者となるまでの期限付きで、な」

「そう…だったんだ……」

説明してもらつて納得は出来たけど…でも、それつて

「お主の考えている通りだ。約束が遺言となつた今、違えるわけにはいかぬ。そして、願わくば先代の仇を討つ!…:そうすることで賜つた恩義に報いたい、今の我を動かしておるのはそうした願いであるのだよ」

「セイロンにとつては、それが譲れない想いなんだ…」

「ああ…」

そつか…:それなら私が言えることなんて何も無いよね

でも、それって本当に良いのかな？

仇討ちをしたいほどに憎む相手や都合がない私には良く分からないけど…相手を殺すのだけは間違つてると思うんだ

こんな時、アウルさんならなんて言うんだろう

そんなことを考えているとセイロンがいつもの陽気な雰囲気に戻って話を切り上げた

「さて、もう夜も遅い。そろそろ寝るとしよう。店主殿ももう寝ると良い、夜更かしは肌
に良くないしな」

「…そうだね、そうするよ。お休み、セイロン」

「ああ、お休み」

考えるにしても今日は疲れてるし、また明日からで良いよね

宿のお仕事もやらなきゃいけないんだし、ちゃんと寝ないと

そうしてセイロンと別れて部屋に戻った私はベッドに入る

自分で思ってる以上に疲れてたのか、考え事をする暇もなく私の意識は眠りに落ちて
いった

第二十二話 紅き手袋と少年剣士

☆・☆・☆・☆・☆フエア視点☆・☆・☆・☆・☆

翌日、いつも通り継承の儀を終えてこれからの方針を固めた私は街の外にある泉に来ていた

ここは忘月の泉って呼ばれてて素敵な名前なんだけどとっても汚れてるのよね

水は濁って汚い色だし周りの木々も枯れてて鬱蒼とした雰囲気を出してる

でも何故だか私はここにいと落ち着くの

なんでこんな所でって自分でも思うけど、人が殆ど来ないから考え事とかする時には重宝する

そして今考えてるのは最後の御使い、クラウレのこと

意外なことに最後の御使いはアロエリのお兄さんらしく、御使いの長も務めるくらい優秀らしい

私はてつきりロレイラルの人かと思ってたんだけど……まあロレイラルの召喚獣がはぐれ化することは殆どないから可能性は元から低かったのかな

だけどそれだけ優秀なのに未だに姿を見せない

セルファン族最強の戦士って言ってたしかなりの規模の追っ手がかけられてるのかもしれない

だから私達はこつちから探しに行くことにしたの

「それにしても…」

私はふと今朝のアロエリのことを思い出す

昨日のことを謝りに来たんだけど全然素直じゃなくって…まああれはちよつと可愛らしいと思ったから怒りは感じないし、それにもう気にしてないしね

そんなことを考えてると泉に花束が浮かんでるのを見つけた

「あれ、また浮かべてある。時々見かけるけど誰がやってるのかな…なにか意味でもあるのかな？」

「ああ、それはきつとおまじないのつもりなんじゃないかな」

「っ誰!?!…ってルシアンか、びつくりさせないでよ」

「あはは、ごめんごめん」

急に後ろから声が聞こえてきたと思ったたらルシアンが少し離れたところに立ってた女の子の独り言に聞き耳立てるなんて褒められないぞ？

それは良いとしてさっきの続きを聞こう

「おまじない? なんの?」

「あの泉にはね、不思議な言い伝えがあるんだよ。月の煌めく夜に輝く泉の水を汲んで病人に飲ませると、たちまち元気になっちゃうんだって」

「飲むってこの濁った泉の水を??？」

私は泉を見た

濁った水はねずみ色になってとても飲めるようには見えない

私の言いたいことを察してカルシアンは笑いながら続けた

「この場所がまだ汚れていなかった頃の話だよ。今そんなことしたらお腹壊しちゃうってば」

「だよね……」

「病気が治った人は感謝の気持ちを花束に込めて泉に捧げたんだった」

「へえ……」

「きつと、ずっと昔に泉のお陰で病気が治った人が今もお礼の為に花束を捧げてるんじゃないのかな？」

「なるほどね……素敵な話だね」

「うん、そうだね」

それから私達は少しの間話をした

?・??・?・??・?・アウル視点?・??・?・??・?

「大変だぞ、おい…って何してるんだ？」

店の天井に張り付いて埃を拭き取っていたら慌てた様子でグラッドが駆け込んできた

が、その直後私を見て呆れたような理解出来ない事態に脳機能が停止したみたいな顔をして聞いてきた

因みにグラッドはいつからか私に対して敬語を使うことを辞めていた

私としてもその方が気楽で良い

「ちよつと普段中々掃除出来ないだろう天井の掃除をしています」

「だからって普通張り付かないわよ…ほんと、呆れるほど凄いわよねあなたは」

私の言葉にリシエルが返してきた

それは…まあ確かに普通はこんなことしないだろう

しようとも思わないだろう

「鍛えればなんとかならないこともありませんよ、つと」

粗方掃除の終わった私は天井から降りてグラッドの所まで歩く

「それで、何が大変なんですか？」

「ああ…今しがた軍本部から通達があつたんだが、なにやら帝都方面で『紅き手袋』が暗

躍をしてるらしいんだ」

「なんですって!?!」

「紅き手袋…確か犯罪代行組織でしたか」

「ああ、そしてその構成員は暗殺者でもある」

「暗殺者って…つまり殺し屋!?!」

グラッドから告げられた言葉にリシエルが過剰に反応している

…いや、普通はそうなるのか

「そういうことだ。奴らは常に背後から隙を狙って襲いかかってくる連中だ。敵に回したらこれほど恐ろしい相手もない」

「騎士のように情けをかけてくることもありませんね。確実に息の根を止めるための一撃を常に繰り出してくる」

「ああ…」

「……」

場の空気が重くなってしまった

「ここはなんとかしなくては

「でもそれって帝都での話なんですよ? だったら私達には関係ないんじゃない?」

いつの間に居たのかフェアが私たちの後ろから声をかけてきた

「帰って良かったですか、天井の掃除粗方終わりましたよ」

「ん、ありがとねアウルさん」

「つてことはそんなに重く構えなくてもいいってことじゃない！びつくりさせないでよね」

「まあな。しかし、これから先も無関係でいられるとも限らないからな」

「『無職の派閥』との協力関係、ですか」

「ああ、もしもクラストフ家が支援を要請したなら…」

「『紅き手袋』から暗殺者が派遣される可能性もある」

「そういうことだ」

そうなると本当に急がないとならない

私にとっては日常だったがこの子達…特にリシエルとルシアンには荷が重いだろう

もしも戦うことになったなら最大限警戒しなければならぬ

そしてそうなる前に最後の御使いを見つければ一番だ

そう結論付けた私達は仲間たちを集めてさっそく街の外へと繰り出した

「待てっ!」

街の東から南東に向けて広がる広大なシトリス高原を歩いている途中、アロエリが急に鋭い声を発した

「な、なによ急に…」

「血の匂いだ、かなりの深手らしいな」

「!？」

その言葉を聞いた皆の顔が引き締まる

私も意識を鼻に集中させると、確かに微かに血の匂いを感じ取れる

だがそれは本当に微かなもので、傷の状態までは分からない

流石に亜人というべきか、こういった感覚器官の性能は私よりもいいようだ

「クラウレなのか？」

「いや、兄者ではない。これはおそらく人間のものだな」

「……っ!？」

それを聞いたフェアが駆け出そうとするのをアロエリが止める

「どこへ行く!?!今の俺達には無関係だぞ!」

「うるさいっ!だからって知らんぷりしてられるもんですか!!」

「行きましょう、アロエリ」

「アウル？しかし…」

「どちらにせよ手掛かりなんてないんです、闇雲に探し続けるよりトラブルに首を突っ込んだ方が何かしら得られるかもしれない」

「そう、だな…」

私の言葉に納得したのか拘束を解いたアロエリが先導してその場所へ向かった

アウル達が見点

アウル達が向かっている場所では一人の少年が大勢の大人達に囲まれていた

どうやら少年は足を負傷しており立ち上がることが出来ず、方膝立ちで身体を支えている

「クソ…つこの足さえ、やられてなかったら…」

「……」

取り囲んでいる者達は言葉を発しない

まるで獣の狩のようにじわりじわりと少年を取り囲んでいく

「泣き言は、騎士には似合わないよな…うん。おいらは最後まで諦めないぞ！」
「シヤアアアアツ！」

少年が剣を構えると同時に奇声を発した男の一人が後ろから少年へとナイフを繰り出す

覚悟を決めた直後の一瞬の隙を狙った迷いのない一撃

うなじへと突き出されたナイフはそのまま氣道まで達し、確実に少年の命を奪ったであらう

横槍が入らなければ、だが

「させませんよ」

「ツ!?!」

男の目の前にいきなり女性が現れ、ナイフを奪う

男は機敏に対応し、距離を取ろうとするが女性が動く方が早かった

手足の腱を断たれたことで動けなくなった男は地面に伏した

「大丈夫か!?!」

そこへ続々と新たな者達が現れる

人間と召喚獣の入り交じった団体…フェア達だ

「ちよつとアウルさん、いきなり飛び出さないでよ！」

「失礼、しかしああしなければ間に合わなさそうだったのね」

男を戦闘不能にしたアウルは負傷した少年を庇うように立つ

フェア達も人数を活かして少年を取り囲んでいた者達を退かし、包囲を解くことに成功していた

「君達は、いったい…」

「いいから怪我人は大人しくしてなさい。私が代わりにぶっ飛ばしてあげる!」

「無茶だつて! そいつらは野党なんかとは違うんだぞ!」

「暗殺者でしょう? それも『紅き手袋』の」

「え…? なんで知つて…」

「あいつらの殺気を見れば暗殺者であることは分かります。そしてあの紅い手袋…: 血染めの手袋をしているとなれば答えは明白でしょう」

「危険な相手なのは分かっていますから、心配しないで、ね?」

アウルとミントに諭され、少年は何も言えなくなつた

その隙に暗殺者達も体勢を建て直し、陣形を組んでいる

さつきのアウルの鮮やかな手並みを見た少年はこの人達なら大丈夫かもしれない、そう思い頼ることにした

「おいらは足を負傷して満足に動けない…: 申し訳ないけど、頼つても良いかな?」

「任せて下さい。そもそも正面からの潰し合いになった時点で暗殺者としては負けも等しい。貴方を狩れないと分かれば勝手に退散することでしょうしね」

「要するにこの人を守りつつ適度に撃破していけばいいってこと？」

「そういうことです。今回は敵を皆倒す必要などありません」

「…悪いがそういうわけにもいかないんだ、俺の立場としてはな」

アウルがフェアに説明しているとグラッドが割り込んできた

グラッドは警察のような業務もしているためこんな奴らを野放しには出来ないのだ

「俺は奴らを捕まえる気でいく」

「それは止めませんが、十分に気を付けて下さいね」

「ああ、分かってるよ」

そう言葉を交わしたグラッドは先頭に立ち、高らかに宣言した

「帝国陸戦隊所属、トレイユ駐在武官グラッドだ！『紅き手袋』の走狗め、真聖皇帝の名の元に裁きの刃を受けよ!!」

こうして戦闘の火蓋は切られた

第二十三話 將軍と黒騎士

「取り敢えずこんなものですかね。彼等自身の力では抜け出すことは不可能です」
「ありがとう。わざわざ済まないな」

私は今グラッドの駐在所の地下にある牢獄にいる

勿論投獄されているわけではない、牢に入っているのは先程相手した暗殺者の内の三人だ

あの子の暗殺者達との戦闘はすぐに終わった

私が速攻で5人ほど戦闘不能に追い込むと彼等はあっさり撤退を開始した

おそらく目的を果たすことは出来ないと思惑通りに事を運ぶことが出来た

気絶させた内の三人は回収されたが最初に手足の腱を切断した者を含めた三人はこちらで捕らえることに成功した

そして今はその捕らえた者達をどう足掻いても脱獄出来ないように拘束し終えてグラッドに報告しているところだ

因みにフェア達はミントの家に先程の少年剣士を運んで治療を行っている

「それで、本国からの移送部隊はいつ頃到着しそうですか？」

「ここは首都から結構離れてるが、捕らえた奴が紅き手袋だからな。三日もあれば来るだろう」

「ふむ…では暫くは私もここに滞在することにします」

「おいおい、なんでまた」

「簡単なことです。あいつらは強大な犯罪組織の下っ端、捕まったともなれば当然口封じの為に殺しにくると考えて良いでしょう。そうなれば貴方の身にも危険が及びます。流石にいつ来るかも分からない暗殺者を相手に一人で気を張り続けるのは骨が折れますしね」

「なるほどな…しかし、良いのか？ 仮にも俺は年頃の男なんだが」

「貴方はそんなことする人ではないでしょうし、それに…」

「それに？」

「私に手を出せるとお思いですか？」

「…無理そうだな。殺される未来しか見えん」

「そこまではしませんよ。では私は一度フェア達に説明するために戻りますね。流石にまだ来ないとは思いますが暗殺者が来るかもしれないので呉々もご注意を」

「ああ、分かった。任せてくれ」

私は一度駐在所を出てミントの家に向かった

そしてそこには見知らぬ人物が二人いた

「どうやら少年剣士（名をアルバというらしい）の仲間だそうで、任務の途中で逸れてしまつて探していたようだ

「貴公がアウルか。仲間の命を救つてくれたこと、感謝する。おかげで大事な部下を失わずに済んだ」

二人のうちの大柄で黒い大鎧を着込んだ男、ルヴァイドが頭を下げてきた

「いえ、お氣になさらないで下さい。あの状況で助けようとするのは当たり前のことですし」

「…普通はそう思つても行動に移せる者は少ない。君のその勇氣に救われたのだ。どうか、受け取つて欲しい」

イオスと名乗る白い服の男も頭を下げてくる

ここで受け取らないのは流石に失礼に当たるのだろうか

私は素直にその気持ちを受け取った後、フェアに数日間グラッドの元に滞在することを告げた

最初は驚いていたが理由を話すと納得してくれた

そして今回の件に関してルヴァイドとイオスから事情聴取を行う必要性があることからグラッドに宿屋まで来るようにとの伝言を頼まれた

「てことは暫くは私がまたオーダーとか取らなきゃいけないのね…仕方ないけどちよつと憂鬱かも」

フェアが何気なく呟いた言葉に申し訳ない気持ちでいっぱいになった

大丈夫、きつとりシエル達が手伝ってくれるよ…助けになるかどうかは分からないが

☆・☆・☆・☆・☆フェア視点☆・☆・☆・☆・☆

「それで、なんで私のお店で事情聴取することになってるの？」

今私達がいるのは私の店の中

アルバの仲間だつていうルヴァイドとイオスの二人から事情を聞かなきゃいけないからつてのは分かる

そのためにグラッドお兄ちゃんも呼んできて貰ったし

でもどうして私のお店になるのか説明を受けてないのよね

するとイオスさんが表情を変えることなく答えてくれた

「任務上、我らが所在を公にするのはあまり好ましくないからだ」

「それで盛り場から離れた宿を探してたのね」

「そういうことだ」

実はこの二人と私は今日会うのは二回目だったりする

備品の補充の為に商店街に行つてたらキョロキョロしてるイオスと目が合つて、街の外れに宿がないか聞いてきたの

それも人気の少ない所が良いって言うからどうということなんだろうって思つてたけど……暗殺者に関わる任務に携わつてたなら納得ね

「それ以前に怪我人が寝てる側で話すのもあれでしょ？」

「たしかに……」

リシエルの言葉にも納得した私はグラッドお兄ちゃんに目配せして始めるように促した

因みにミントお姉ちゃんの家には万が一の為に御使いの三人とミルリーフが残つてくれている

「しかし、聴取の場に本当に子供達を同席させるのですか？ 込み入った事情もあるよう

ですが…」

グラッドお兄ちゃんの懸念も分かる

けど関わった以上は私も話を聞かないと納得出来ない

するとルヴァイドさんが尤もなことを言った

「場を借りているのだ、出て行けと言える立場ではあるまい。それに関わった以上説明をせねば彼女らも納得がいかなだろう。ならば又聞きになるより俺から直に聞いた方がいいはずだ」

「…分かりました。では、まずは貴方達が何者であるのか説明を聞かせて下さい」

「俺の名はルヴァイド、連れの名はイオスだ。共に『巡りの大樹自由騎士団』の末席にその名を連ねている」

「巡りの大樹自由騎士団?!」

え、嘘でしょ?

巡りの大樹自由騎士団って聖王国に出来たって新しい騎士団のことよね

普通の騎士は国に使えて国を守るのが使命なのに対して自由騎士団はそこにいる民を守るのが使命っていう

何が違うのって思いかもしれないけど全然違うの

騎士は国を、ううん国の「利益」を守るための存在だから場合によっては国民を犠牲

にすることもある

国に仕えている以上国からの命令には逆らえないの

でも自由騎士は仕える主君を持たないからそういうことがない

完全に弱き人達を、世の平穩を守るために剣を振るう高潔な騎士達なんだ

「では、あのアルバという少年剣士も自由騎士なのですか？」

「彼はまだ見習いだ。事情があつて任務に同行させていたが…途中で予期せぬ事態が起こつてしまつてな」

「と、いうと？」

「軍属の貴公ならば伝え聞いているはずだ。帝国領内にて紅き手袋が不穩な動きを見せている…巡回視察の旅の予定が急遽、奴らの企みを調査することになった。そして敵と交戦する事態に陥り、アルバとはぐれてしまつた」

「で、運良くあたしらに助けられましたと」

リシエルが茶化すように言う

そこで茶化すようにいうのはちよつと不謹慎なんじゃないかな…

「そういうことだ。改めて礼を言おう。おかげで部下を失うことなく済んだ…」

そういつてルヴアイドさんは頭を下げてきた

うわあ、大人だなあ…つてそんな呑気な感想言つてる場合じゃないよ！

「良いってば! たまたま、成り行きで助けただけなんだしそれに…」

「…それに?」

「お礼ならやつぱりアウルさんに言つてよ。暗殺者達の心理を捉えて誰にも危害が及ばないよう速攻で勝負を決めた上に下手人を捕まえたんだから」

「…そうだな。その捕まえた賊は何処に?」

「今は私の駐在所の独房に入っております。念の為件のアウル氏が監視等の為に残つてくれています」

「その者の実力は確かなのか? 疑うわけではないが、聞いておかねばならなくてな」

「心配ないわよ、あいつなら。正直あたしらが束になつてかかつて片手でやられちゃうだろうし」

「うん、あの人は不気味な位に強いよ。鎧を素手で破壊するくらいだし…」

「おいおい、そんなことまでしてたのかよ…今になつて怖くなつてきたぞ」

「大丈夫だよ、あの人自身はとつても優しいから。相手に必要以上のダメージを与えずに戦意を喪失させたり、それが無理でも動けなくなるまで攻撃した相手を治療したりしてたし…本当は戦いたくないんじゃないかなつて思う時もあるよ」

「なるほどな…」

「ふむ…それならば安心して良いだろう」

「話が逸れてしまいましたね。ここまでの経緯は分かりました。では、これから先はどうされるおつもりなんですか？」

「今すぐにも任務に戻りたいところではあるのだが…」

「彼の怪我を見るに、それも難しいですね」

「うむ…」

ルヴァイドさんとイオスさんが難しい顔で悩み始めた

私は少し考えてから、意を決して口を開いた

「取り敢えず今日はここに泊まっていきなよ。もともとそうするつもりだったんでしょ？」

「いや、しかし…」

「遠慮しないで！暗殺者が来たって私ならちゃんと言を守れるしさ。それに…明日、もう一回アルバに話をしてやって欲しいの」

「それは…っ」

「話してくれなきやさ、やつぱ納得出来ないことつてあるし…突き放されることで成長することだつてあるかもしれないけれど、それつて大人のずるい逃げ道のような気がしてね…」

「フェア、あんた…」

「そうだな…では、今日のところは世話になるとしよう」

「よろしいのですか？」

「ああ。逃げはしない…俺はあの墓の前で、そう誓ったからな…」

「ルヴァイド様…」

なんだろう、ちよつとだけ場が暗くなつちやつたな…折角泊まってくれるのに暗いのもなんだし、盛り上げないと

そう思つてた矢先だった

バタバタと忙しない足音と共に扉が勢いよく開いてある人が入つてきた

「た、大変ですフェアさんっ!!」

ポムニットさんだった

「まさか、もう紅き手袋が襲つてきたの!？」

「いえ、襲つてきたのは襲つてきたんですけど…えつと、その…」

そう言つてポムニットさんはルヴァイドさんとイオスの方を見た
なるほど、部外者のいる前で言つていいのかどうか悩んでたのね

確かに不味いかもしれないけど事態によつてはそんなこと言つてられないし…

「ポムニット!構わないからはずきり言つちやいなさい!!」

リシエルがそう言つてくれたおかげでポムニットさんも決心が付いたのか、襲来者の

名前を覚えてくれた

それはこの状況では出来れば聞きたくない名前だった

「は、はい！襲ってきたのは剣の軍団の方々なんですよ！」

「なんですつてえ!？」

「何もこんな時に来なくてもいいのに……」

ルシアン言う通りだよ、空気読んでよねレンドラーのおじさん！

「おい、なんだ？何が起きてるんだ？」

イオスさんが尋ねてくるけどこれは言えない

剣の軍団のことはともかく、あいつらがなんで襲ってくるのか……つまりはミルリーフのことを教える訳にはいかないもの

「ごめん、こっちにも事情があるの……追求しないで」

「本当にごめん、でもこらだけは教えることが出来ないの！お詫びに戻ったら美味しいご飯作っただげるから待っててね」

そう言つて私は剣を取つて店を飛び出した

「急用にて、失礼させていただきます！」

「すぐに戻ってきますす！」

「お、おい……!？」

後ろではグラッドお兄ちゃんとルシアンも慌てて飛び出した

リシエルはもうなんにも言わずに私の後ろを走ってる

「なんなんだ…いったい??」

店には困惑顔のイオスと何かを察したのか厳しい表情をしたルヴァイドが残されていた

見えた、ミントお姉ちゃんの家!

そこにはポムニツトさんの言う通りレンドラーが軍団を率いて攻めてきていた

見たところかなり本格的にここを落とすつもりでいるみたい、陣形も人数も前とは比べ物にならないもの

セイロンとアロエリが抑えててくれるけど突破されるのは時間の問題だ、急がなきゃ!

「このまま攻め込んで竜を捕らえるのだ!」

「そうはさせないわよ！」

「出おつたな、小娘め」

「それはこつちが言いたい台詞だわ。呼びもしないのにわらわらと湧いてきて…面倒くさいからとつととやられて帰ってちょうだい！」

「そうはいかんぞ？なぜなら吾輩が直々に貴様らの相手をしてやるからだ!!」
「なっ!？」

レンドラーから以前にも感じた、いやそれ以上の鬨気を感じる

この人、本気だ…前にも増して

しかもこつちにはレンドラーとタイマンを張れるアウルさんがいない…分かりやすいピンチだね

「見たところアウルがいないではないか。あの者との死合が出来ぬのは物足りぬが、都合は良い」

グラッドお兄ちゃんですら一步も動けないでいる

そりやそうよね…下手に動いたらあの大斧で真つ二つにされちゃうもの…

「攻めて来ないのなら、我輩からいくぞ！」

レンドラーが斧を構えて突進してきた

だめ、やられちゃう……覚悟して目を閉じかけたその時だった

「ぬうつ!？」

誰かが私とレンドラーの間に入って斧を受け止めてくれた

一瞬アウルさんかとも思ってたけど違った

紺色の大鎧、ルヴァイドさんだ

「なるほど…：これがお前達の言う事情とやらか」

「ルヴァイドさん…」

「部下の命を救ってもらった礼をしよう…：この戦い、我らも加勢させてもらおう！」

「さあ、ここは任せてお前たちは仲間のところへ急げ！」

「だけどっ！」

イオスさんの言葉にルシアンは従おうとしなかった

気持ちには分かるよ、こいつら普通に強いもの

それにこれはかなり個人的な事情による戦い…：そんなものに他人を巻き込みたくないもんね

そんなことを思っているとレンドラーが何やらルヴァイドさんに向けて話しかけていた

「ほほう、そうか…：貴様が、ルヴァイドか。その名前、はつきりと覚えておるぞ。『傀儡戦争』で滅びた旧王国の崖城都市、デグレア。その特務部隊である『黒の旅団』を率い

た苛烈なる猛将…『黒騎士ルヴァイド』、それが貴様だな！」

「なんですって!？」

「そういう貴様達の鎧から削り取つてある紋章も旧王国の一つ、鋼壁都市バラム騎士団のものを見た」

「その名で呼ぶな!？」

「っ!？」

バラムの名前を聞いた瞬間レンドラーの表情が怒りに…ううん、憎悪に染まつた
なんでそこまで…

「今の我らは元老院の道具などではない…我らが姫のためだけに忠誠を捧げた『剣の軍団』だっ!!」

「そんな、あの二人が旧王国の騎士だったなんて…」

「自由騎士つてのは嘘だったのか!？」

「嘘ではない!!」

グラッドお兄ちゃんの言葉をイオスさんが鋭く否定した

「だが、我らがかつてそう呼ばれていたのも事実だ…だからこそ今こうして…」

結構深い事情がありそうだね…でもさ、それって

「関係ないよ、そんなの」

「え？」

「フェア……」

「過去の経緯なんて知らない、今はただ味方つてことだけはつきりしてれば十分よ。そうでしょ？」

「あ、ああ……」

「よし！それなら悪いけどレンドラーの相手は任せたわよ！」

「ああ！」

ルヴァイドさんの頼もしい声と共に戦いは始まった

？・??・？・??・？・アウル視点？・??・？・??・？

遠くから剣戟の音が聞こえる

おそらくは剣の軍団が攻めてきたのだろう

加勢に行きたいが、今はただフェア達が無事であることを祈るしかない
なぜなら……

「……」

「言葉を発することすら不可能にされましたか……外道な」

私は私で牢の中にいる暗殺者達を殺しに来た者と対峙していたからだ

それも人体実験の結果なのか明らかに発声器官を失っている

そいつは両腕に装着された鉄爪を巧みに操って私の目や喉を斬り裂こうとしてくる

私はそれを躲してカウンターを叩き込んでいる

だが、全然倒れる気配がない

壁にめり込むくらいに打ち込んで普通に出てきて一切鈍ることの無い動きでまた

致命傷を狙ってくる

おそらくは普通の暗殺者とは違い、厄介な相手を真正面から叩き潰すために「造られた」のだろう

私が正面からの戦いを最も得意としていなければやられていたかもしれない

しかしこういう存在と戦うのは初めてではないから対策など分かる

なまじ人体実験なんてしてるため、脳の力が弱くなっていて思考しながらの戦闘は出来ない

全ての攻撃が単調だ

その分脅力やスタミナが化け物になっているが、獣皇には大きく劣っているため脅威

にはならない

動きの癖さえ分かれば当たることはまずない

後は戦闘不能に追い込む手段を模索すれば良い

しかし…

「……」

一言も発することなく繰り返される鉄爪を防ぎながら奴の顔を見る

その顔は仮面に隠れていて見ることは出来ないが、きつとまともな人間の顔などして
いないだろう

こいつを真人間に戻すことなど出来はしない

一度破壊された脳は二度と直せはしないのだ

となると私がするべきは、こいつの救済…つまりは殺害だ

「あまりしたくはないんですけどね…」

独り言ちながら前蹴りで仮面を弾き飛ばす

下から現れたのは案の定ぐちゃぐちゃになった人間とはとても思えないような酷い
顔だった

鼻はもげていて唇がなく歯茎が剥き出し、目は窪み、その瞳は白濁していて視力など
失われているだろう

人のことは言えないが、吐き気のするような外道だ

その顔を見た私はこいつを殺すことに決めた

もうこいつを救うにはそれしかない

胴体に蹴りを放ち、一度吹き飛ばす

「道具として使われ続けるのももう疲れたでしょう……終わりにしてあげます」

私はそう言つて拳形を拳から貫手へと変えた

「……」

奴は何を思つてるのか、一時的に動きを止めた

そのまま少しの間膠着する

やがて奴が両腕を振り上げながら突撃して来た

私はそれを躲すことなく受け止めながら貫手を繰り出す

鉄爪が両肩を斬り裂いて食い込むが、途中で力が失われて止まった

奴の顔を見る

私の右手が下顎に突き刺さり、脳天を破つて貫通している

脳幹を破壊したので即死したはずだ

その顔は苦痛に歪んでいるようにも歓喜に震えているようにも見える

崩壊しているが故に思つていることが全く分からない

だが壊れたまま使い捨ての駒として利用され続けるよりはマシだろう
私は崩れ落ちる奴の身体を支えながら右手を引き抜き、床に横たえた

「お疲れ様です、安らかに眠りなさい」

そう言った私はせめて目を閉じさせてやろうとするも、瞼がなかつたので仕方なく仮
面を被せることで妥協した

こんなものを送り込んできたのだ、少なくとも今日はもう来ないだろう
さて、急いで掃除をしなければ

私の怪我はすぐに治るしなんならもう治っている

しかし床には大量の血が飛び散っているし、破壊した脳の一部も散らかっている
私はコートを脱ぎ捨てていそいそと片付けを始めるのだった

第二十四話 凍りついた湖

紅き手袋からの刺客を殺した日の翌日、私は一人で駐在所に居た
グラッドは朝の見回りに出ている

今私は普段グラッドが処理している書類の中でも簡単なものを代わりにやっている
のだが：暇だ

重要な書類は私がやる訳にもいかないから簡単なものをやるのはいい、しかし簡単すぎ
ぎてやり甲斐が無いのだ

勿論また刺客が来ても対応出来るよう気を張ってはいるが、その様子も見られない
更に宿屋の道の整備をやり残した状態で来ているのでそつちも気になって暇に拍車
を掛けてくるのだ

そうして暇と戦うこと数十分、思いもかけない訪問客が来た

「あ、アウルさん！グラッドさんは帰ってませんか!？」

「ミント？どうしたのです、息を切らせて」

なんとミントが慌てた様子で駆け込んできたのだ

どうやらグラッドを探しているようだが何があったというのか

「グラッドさんがアルバ君を連れ出しちゃったんです！」
「…なんですつて？」

アルバと言えば先日助けた少年剣士だ

暗殺者にやられた傷が骨にまで到達しており、まだ真面に歩けないはず…そんな彼を連れ出すなんて何を考えているんだ

「えっと、実はもう杖を付きながらだと歩ける程には回復したんです」

「幾ら何でも早すぎでは？リビエルの奇跡も足には使わないようにしていたはずですが…」

「ああ、それはセイロンさんのストラによる効果ですね。そのお蔭で自然治癒力がかなり上がっているんです」

「なるほど、しかしそれでは…」

「ええ…アルバ君の体力をかなり消耗します。だから私の家の庭の中だけって約束で歩くことを許可したんですけど」

「まったく…でもそういう事なら恐らくフェア達の所に行けばいると思いますよ。と言うより態々約束を破ってまで行く所が他に思い当たりませんか」

「そうですね…行ってみます。ありがとうございます」

「いえいえ、お気を付けて」

慌てた様子で駆けていくミントを見て、これは帰ってきたら説教が必要だなと思う私だった

フエアの料理が食べたい…

☆・☆・☆・☆・☆フエア視点☆・☆・☆・☆・☆

私は宿にグラッドお兄ちゃんとアウルさんを除いた皆を集めて相談をしていた
事の始まりはアルバが家に来たことだった

足を早く治して任務に戻りたいとリハビリに励んでいる彼を見て、私も力になりたい
と思っただの

でも私には何も出来ない…医術の心得なんてないしね

そう思つて落ち込んだところをあるお爺さんの言葉で私に出来ることが分かった人の身体を作っているのは普段口にしてる料理、だから私の得意なその料理で力になつてやればいい

そう言われて私は骨に良い料理を作ることを決心したの

だけどどんな料理を作れば良いのか分からない……だからそういうのに詳しくそんなミントお姉ちゃんやセイロン達に相談しようと思つて集めたのが今の状況ね

出来ればアウルさんにも聞きたかつたんだけど暗殺者達を見張り続ける必要があるから離れられないって言うから仕方ない

「うくん、薬草とかなら力になれるとは思うけど……骨に効く食べ物ってなんだろう?」

「牛の乳や魚の骨だ。特に魚は骨まで食べられる小魚が良い、骨を食べることで骨は作られるからな」

「詳しいんだね、アロエリ」

「こんなのメイトルパに住むものなら誰でも知つてる常識だ、自慢にもならん」
ミントお姉ちゃんの疑問にアロエリが答えた

ふむふむ、小魚に牛乳ね……

「骨まで食べられると来ればヒメミズハに勝るものはなからう」

「ヒメミズハ?」

「澄んだ淡水に住む、美しい魚だ。そのまま焼いてやれば丸っと食べるられるのだよ。確か、近くの湖でも獲れたと思うが」

セイロンが続けてそう言った事で今後の方針は決まった

取り敢えずお魚屋さんでヒメミズハを買ってそれを調理してアルバに食べさせる
リシエルとルシアンには試食係になってもおうかな

そう意気込んで買い物に行ったのは良いんだけど：

「売れないってどういう事よ!!」

「いや、そう言われてもな…うちの魚は皆ルトマ湖で獲れる奴なんだが、どういう訳か最近入荷して来ないんだよ」

「そんな…」

「そういう訳で売れねえんだわ、スマンな嬢ちゃん」

…てな訳で買うことが出来なかった

ここまで来て諦められなかった私は皆とルトマ湖に来た、のは良かったんだけど…

「湖が、凍ってる!?!」

そこには完全に凍りついたルトマ湖があった

「これでは確かに魚は獲れんな。そもそも、獲る気にすらならん」

「ここはこういう状態が普通なのかね?」

「そ、そんなわけないでしょ！」

「そうよね…この辺りは近くにある火山の影響もあって、冬でも完全に凍りつく事なんてないはずだもの」

セイロンの疑問に私とミントお姉ちゃんが答える

「そうなると考えられるのは異常気象か人為的なもの…街に影響が出てないことを鑑みるに人為的なものって線では決まりだな」

途中で寄った駐在所から着いてきたグラッドお兄ちゃんが見解を述べた

因みにアウルさんは残して来てる

「…湖が凍ってたつて魚はいるんでしょう？だったら氷に穴開けてでも釣ってやるわよ！」

「ちよ、ちよつとフェア？あんた目が据わってるわよ？」

「ここまで来て諦められるわけないでしょ…何がなんでもアルバに食べさせてやるんだから！」

「あわわわわわわわ…」

リシエルとルシアンが戸惑ってるけど関係ない、私は剣を抜いて氷に向かって突き刺そうとして…

「あはははははははははは、そんなことしても無駄ですよーんだ！」

「…誰っ!？」

唐突に聞き覚えのない声が聞こえて来た

その方角を見ると、以前に戦ったアプセツトやローレットに似た感じの人形が…ていうかアプセツトもいた

てことは…

「これはあなた達の仕業ね!」

「当然黙秘…」

「そうだよ、これは教授とミリイ達の仕業でくつす!」

「ミリネージ…」

アプセツトが黙秘しようとしたのにミリネージって呼ばれてた機械人形があっさりと自白した

なんだこれ…緊張が薄れるじゃないの

「相変わらず落ち着きのないことですわね、貴女…」

リビエルも呆れたように話しかければ

「あくデコ天使!」

「なっ!?!ぶ、無礼ですわよ!!」

「デコにデコって言って何が悪いのよ。ねえ、デ・コ・て・ん・し?」

「むきい〜！頭に來たしたわ！火中で爆ぜる木の実の如くバチバチと來ましたわ!!」
「落ち着け、リビエル」

ミリネージの挑発にいともし簡單に乗つたりリビエルをセイロンが捕まえて落ち着かせてる

ていうか…どちらかと言うとミリネージの方がおデコ広い気が…いやそんなこと気にしてゐる場合じゃないよね、うん

「敵と出会つた以上は見逃したりはしない、覚悟しろ!」

「イーッだ!それはこつちの台詞だよ!」

「交戦必至…: i n t e r c e p t 作戦開始。対象の逃亡を以て任務完了とする…: O K ?
ミリネージ」

「きやははははは♪みいんな纏めてえ、やつつけまあす!」

「馬耳東風…」

こうしてイマイチ緊張感のない中私たちと機械人形達の戦いは始まつた
戦闘つてもつと緊迫するものだと思うんだけどなあ…

第二十五話 不穏な勧誘

☆・☆・☆・☆・☆フエア視点☆・☆・☆・☆・☆

「奴らはここに入っていったのね？」

「ああ。空から確認した、間違いない」

あれからアプセットとミリネージを撃退した私達は閃光を発して逃げた2人(?)を追いついて洞窟の入口のような場所に来ていた

さっきの会話からも分かる通り追跡はアロエリが空からしてくれただけだから漏れはないと思う

「よし、それなら早速乗り込んで…」

「ちよつと待つて、フエアちゃん」

逸る気持ちのまま乗り込もうとした私をミントお姉ちゃんが留めてきた

どうかしたのかな？

「どうしたの、お姉ちゃん」

「ここが敵の拠点なら激しい戦いがあると思うの。さっきの2人が私達のこととも報告し

てるだろうし、しつかり準備を整えてからの方が良いんじゃないかな？」

「確かに：アウルさんも居てくれた方が良いだろうし、準備ついでに呼んで」

「いや、それはダメだ」

「え？」

グラッドお兄ちゃんが私の言葉を食い気味に止めてきた

いつも明るくて爽やかなお兄ちゃんにしては珍しく硬い表情をしてる

「どうしたのよ、戦いがあつてしかもそれが結構キツイものになるのも分かつてるんでしょ？ だったらアウルが居た方が良いに決まつてるじゃない」

リシエルの言う通りだよ

その事が分からないグラッドお兄ちゃんじゃないからきつと何か理由があるんだらうけど……

「確かにそうなんだがな……皆も知つての通りアルバを助けた際に紅き手袋の暗殺者を何人か捕らえたよな」

「ええ……今は彼らの監視と護衛についてるんですよね」

「ああ、そうだ。そして俺は既に本部へアイツらを捕らえたことを報告したし、帝都へと移送する護送隊も近日中に到着する。そんな状況でアウルを連れてきて見張る人がいない中、何かがあつたりしたら間違いない俺は失脚するだろう」

「何よ、自分の保身の為に戦いを危険なものにするって言うの?」

「ちよつと、リシエル…その言い方はあんまりだよ」

「だって」

「確かにお前の言うことも分かるがな…ただ考えてみてくれ。俺が失脚して辞令が出た場合、この街から出なきやいけなくなる。そして代わりの奴が派遣されるだろう…そうなる…この戦いのことを本部に隠さず報告しちまうんじゃないか?もしそうなつちまったら……」

「帝国が本格的に絡んで来て今よりずっと厄介なことになるってことね…納得したよ、グラッドお兄ちゃん」

「なるほどね…悪かったわ、保身の為だとか言っちゃって」

「いや、良いんだ。俺も言葉足らずだったしな」

グラッドお兄ちゃんの言うことは尤もなことだった

「ただアウルさん無しで敵が守りを固めている場所に乗り込まなくちゃいけないのか…いつもよりも子を引き締めないといけなないね」

「そなたの言うことには得心した。あまり時間をかける訳にもいかぬし、早々に準備をしに戻らぬか?」

「そうだな、もう遅いかもしれないが早くした方が奴らの不意を突ける可能性も高くな

るだろう」

「同時に時間をかければかけるほど私達が不利になる、ですよね……急ぎましょう！」
全員が状況を理解したところで私達は走って街まで戻って行った

?・??・?・??・?アウル視点?・??・?・??・?

先程グラッドが戻って来たかと思えば色々準備して慌ただしく出ていった

事情は聞いて把握している

まさか魚を求めて湖に行ったらそんなことになっていたとは……流石に予想外だ

状況的には私も同行したいところではあったがこの警備を疎かにするわけにもい
かず、それは皆も分かっているとのことだったので残ることにした

暗殺者達は相変わらず黙りだし、襲撃者も後を絶たない

私を殺しにくることもあれば捕まった仲間を殺しにくる場合もある

今のところそのどちらも未然に防げてはいるがいつまでもそう上手くいくとも限ら
ないので帝国の本隊には早く来て欲しいものだ

それにしても…

「さつきからここそこそここちらを窺ってどういうつもりですか？殺るならさつきと来な
やう」

「…やはりバレているか。流石だな」

未だに正確な位置は把握出来ていないが、誰かがいる

それも明確な悪意を持った者だ

位置を特定させない癖に気配を隠そうともしない辺り寝首を掻きに来たわけではな
さそうだが…何が目的なのやら

「我らの暗殺を幾度となく躲し、防いでいるだけはある。正直こんなことは初めてだ、こ
れほどのやり手は見たことがない」

「お褒めに預かり光栄です。そういう貴方も相当出来るようですね、位置の特定をさせ
ないで存在を感知させるなんてそうそう出来ることではありませんよ」

「ほう、わざとであることまで見抜かれたか。これはますます…」

「…ますます、何です？」

不自然に言葉を切った相手に聞き返す

返ってくる言葉は想像出来るが…

「なに、簡単なことさ。私が今日来たのは君を害する為ではないということだ」

「やれやれ…お断りします」

「…まだ用件を言っていないが？」

「仲間にならないか、でしょう？それくらい想定出来ますよ」

「話が早いのは助かるが、応じる気がないのは困ったものだな」

想像通りだったようだ

「私の見立てでは君は元同業者だと思ふのだが」

「ええ、その通りです。ですが私に戻る気はありません」

「二度と？」

「二度と」

そこで言葉が切れ、暫く沈黙が流れる

やがて相手側が徐に口を開いた

「一応、理由を伺つても良いだろうか。譲歩出来る範囲ならしてみせよう」

「残念ながら無理でしょうね。私が闇に戻らないのは利益の為に殺すことを辞めたからです」

「そうか…非常に残念だよ。建前などではなく本心からね。君ほどの使い手がいてくれれば我らが得られるものは莫大に増えるだろうに…」

その声は本当に残念そうだ

おそらく言葉通り演技などではないのだろう…その気持ちも分からなくはない

私だって同じ立場にいれば間違いないと勧誘するだろう、そして望んだ結末が得られないのならば…

「ならば仕方がない、次の妥協案だ。これから先お互いに不干渉とするのはどうだろうか」

「ん…意外ですね。てつきり問答無用で殺しにくるか仲間の命を脅かすかと思いましたが」

「勿論それも考えているし準備も済んでいる。だがそうしたらしたで君は黙って見えないだろう？正直なところ君とは敵対したくないと言うのが本音だ…だからそちらが我らのやることに関わらないでいてくれるのなら我らも君達に関わらない。お互い煩わしい相手のことを考えなくて済んでwin-winじゃないか」

「本当にそうしてくれるのならそれでも良いのですがね…でも無理だと思えますよ。私達の置かれている状況を分かっているでしょう？」

「そうだな…無色に協力を求められれば結局は争うことになるからな」

「こうなってしまった以上、もうどうしようもありませんよ。ただ1つだけ約束してあげます」

「なにかね？」

「私達は争いを望んでいません。ですから防衛目的以外での攻撃は一切行わないと……その代わりそちらが攻撃してきた場合は一切の躊躇いなく返り討ちにしますよ。貴方が取る手段が下劣であればあるほどに」

「なるほど……やるにしても正々堂々とやれと言いたいのだね？しかし暗殺者にそれを望むのは酷というものだろう」

「分かっていきますよ。しかし私としても譲れないのでね……さあ今日はもう帰りなさい、そろそろ駐在武官が戻ってくるかもしれないから」

「おや、見逃すと言うのかね？」

「今日の所は誰にも危害を加えずにただ話をしにただだけでしよう？なら殺す意味も捕らえる理由もありません。そんなことをすれば寧ろより険悪になって互いにとって良くないでしょうからね……」

「そうかもしれないな……相分かった、もう帰るとしよう。目的は叶わなかったが、有意義な時間だったよ。ありがとう」

「どういたしまして」

そう言つて声の主の気配は消えた

程なくしてグラッドが戻つて来たので結果を聞いたところ、どうやらゲックが暗躍してサモナイト石を人工的に製作していたらしい

ミント曰くこれはとんでもないことであり、過去に人工的に精製に成功した者は一人もいないとのこと

その為に強力な冷却装置が必要でその影響から湖が完全に凍りついていたらしい

装置は完全に破壊したのでもう大丈夫であることと、魚は事前に準備されていたと思われる生簀への避難が完了していたので無事に手に入ったことを聞いた

それと帝国からの護送隊は明日来るとのことなので明日の夜には宿屋に戻れそうだ

早くフエアのご飯が食べたい……

第二十六話 音色が運ぶ出会い

「ママ、こつちこつちちゅー！」

「もう、あんまり燥ぐはしゃぐと危ないわよ？」

私の前方をフェアとミルリーフが仲睦まじく歩いている。今私は彼女達と共に街の大通りへと来ていた。

「まあまあ、子供はこれくらい元気な方が良いものですよ」

「それはそうかもしれないけど……わわ、引つ張つちやダメだつてばー！」

ミルリーフが出掛けたがつてフェアが保護者として付いていき、万が一の為にセイロ
ンが隠れながら追跡する……ここまではいつも通りなのだが、今日は何故か私まで連れ
出されている。フェア曰く、『折角宿屋の方に戻つて来れたのにいきなり重労働なんて
させたくないよ。息抜きがてら一緒に街でも歩こう？』とのことらしい。確かに暗殺者の
身柄を帝国の護送隊に引き渡した私はフェアの宿に戻つて階段制作の続きをやらうと
していた。しかし彼女はそれが気に入らなかつたらしい。その私を氣遣つてくれる気
持ちは素直に嬉しかったし、息抜きが大事であることも確かであるのでこうして彼女の

提案を呑んで付いて来た訳である。

そのまま暫く街を散策していた私達だが、ふと聞き馴染みのない音が聞こえて足を止めた。

「なんの音だろう、これ……不思議な音色」

「うん……でも、とつても綺麗だよ」

……いや、聞き馴染みがないのはフェアとミルリーフだけだ。私はこの音を知っている。だがまさかこんな所で聞くことになるとは……

「あそこの人集りから聞こえてるみたいですね。行つてみますか？」

少し離れた位置に人集りが出来ていて、どうやらその中にこの音色を奏でている者がいるようだ。私の提案に2人は、特にミルリーフが強く賛同の意を示したため件の人集りへ向かうことにした。

「遠くから見てる時もあったけど凄く人数集まつてるわね」

「だつて凄く良い音色だもん……」

暫く歩いて人集りへ着いた私達は人の多さに吃驚し、またその美しい音色に魅了されていた。雅にして幽玄、そんな全く違う要素が一切喧嘩することなく見事に調和している……言葉で言い表せない程の演奏だ。しかし私が何よりも驚いたのはその奏者自身に對してだ。深い緑を基調として少しだけ赤で装飾された着物をゆつたりと着流して

おり、その手には三味線を持って曲を奏でている。どこからどう見ても日本人だ。それに、目立たないよう隠されてはいるがあの三味線にはネックに不自然な切れ込みが入っている……持っている三味線や演奏の腕からして、この男は間違いなく只者ではない。

「ミルリーの言う通り綺麗な音色……アウルさん？どうかした？」

「ん、いえ……あまりの演奏に圧倒されました」

「そつか。この演奏ならそうなるよねえ」

男を観察しているとフェアがそれを不審に思ったのか、声を掛けてきた。暫くの間暗殺者の監視と護衛などをしていた所為でそちの感覚に染まっていたらしい。咄嗟に取り繕ったが彼女は納得してくれたようだった。私がそういつたことに慣れているのもあるが、それ以上にこの演奏がそれ程までに素晴らしいお陰だろう。ミルリーなど目を閉じて完全に奏でられる音に集中している。あまり気を張りすぎるのも良くない、今は演奏を堪能しよう……そう思った矢先、その思いは打ち砕かれた。他ならぬ、演奏していた男によって

「あつ ㊦？ あ ㊦？ ? あ ㊦？ ㊦？ ㊦？ ㊦？ ㊦？ ㊦？ ㊦？ ㊦？ ㊦？ ㊦？ さ

とおゝじい ㊦？ ㊦？ ㊦？ まんのお ㊦？ ? ? ? ? ? ?

「 ㊦？ ㊦？ ㊦？ ㊦？ ㊦？ ㊦？ ㊦？ ㊦？ ㊦？ ㊦？ ㊦？ ㊦？ 」

(なんとという………音痴なのだろうか………)

そう、この男はどうやら奏者ではなく吟遊詩人のようで人が集まった頃合いを見て歌い出したのだが……途轍もない音痴だったのだ。折角の美しい演奏が全て台無しである。集まっていた人達も表情を驚愕に染めて我先にと散っていった

「ああ！皆様!?!どうして帰ってしまってしまふでありますか!?!」

そこに誰よりも深い困惑に陥った男を残して

「で、歌でお金を稼ごうとした……と」

「ええ、その通りでございます。しかし、皆様帰ってしまうとは……そんなに、自分の演奏はダメだったでありますか?」

男はそう言うのと悲しそうに眉を下げた。あの後私達はフェアが耐え切れずに男にツツコミを入れたのを起因として男の話聞いていた。それによると男の名はシンゲンと言ひ、各地を旅して廻る吟遊詩人だそうだ。しかしこの街へ着いた所で路銀が尽きたらしく、歌で稼ごうとしてこうなつたらしい。物腰は柔らかく何処か剽軽というか楽

観的というか、そういう印象を覚える男だ。今のところ害意や殺気などは一切感じられず、どうやら私たちとの会話を心から楽しんでるように見受けられる。しかし近くで見るとシンゲンの身体は相当鍛えられていることが分かるし、無駄な筋肉が一切ない……恐らくは剣客なのだろう、油断はしない方が良くもしいれない。

「いや、演奏『は』良かったよ、演奏『は』。この子だつて聴き入つてたし……ね？」

「うん！凄く不思議ですつごく綺麗だつたよ！」

フェアの言葉にミルリーフが目を輝かせてシンゲンを見詰める。しかしフェア……「演奏『は』」って……その通りだが強調しないであげて欲しい。シンゲンはミルリーフの純粹な褒め言葉と表情に喜んでいて気付いていないようだが。

「そうですかそうですか！いやはや、例えお世辞でもそう言つて貰えるのは嬉しいものですなあ♪」

「お世辞などではありませんよ。本当に素晴らしい演奏でしたし、そうでなければあんな人集りなど出来ませんから」

「そうそう、その通りだよ。だから次からは歌わなきゃ良いつてことね！」

「……はあつ!!」

シンゲンは見えない血を吐き出しその場で蹲つた。それはそうだろう……『歌が下手だから歌うな』なんて吟遊詩人にとってこれ程屈辱的なことはない。要は上げて落と

したのである、フェアも中々に恐ろしいことをするものだ。

「フェア、貴女……」

「ち、違うのアウルさん！別に私はトドメを刺したかった訳じゃ……！ただシンゲンさんの為を思つて！」

「ぐふう！」

「……悪意のない、誠意で言われる方がそりや辛いですよね」

「ああああああああああ!?ごめんなさいiiiiiiii!!!」

「おじちゃん、大丈夫？」

フェアの言葉で更に撃沈するシンゲン。そんな様子に己の失言を悟り、パニックになるフェア。優しく背中を擦るミルリーフだけが癒しだ。こういう状況を地球ではなんと言ったか……ヤムチャしやがって、だったろうか

「落ち着きましたか？」

「ええ。お見苦しい所をお見せしてしまつて申し訳ありません」

その後フエアを落ち着かせシンゲンを励ましてとした結果、なんとか場は落ち着いてくれた。シンゲンもちちらに謝罪してきたが彼が謝ることではないだろう、律儀な男である。しかし謝罪をしてもそこに重さはなく、寧ろ相手を明るくさせる不思議な感じがする……彼の朗らかさがそうさせるのだろうか。

「それで、貴方はこれからどうするのです？」

「何はともあれ金を稼がなければ食うことも出来ません。またどこかで歌いますかね」

……あれだけの目に会つたのにまだ歌おうとするとは、見上げた根性といふかなんというか。そんなことを思っているとシンゲンが突然両手でお椀を作るようにして差し出して来る。まさか

「というこで、もしよろしければお代の方を……」

「……………」

「ううう、無言の視線が痛い……!」

それはそうだろう。演奏は文句無しに素晴らしく、それだけであればお代を払うのに躊躇はなかつたかもしれない。しかしあの歌では……

「うんまあ、お金を払うのには抵抗あるけどさ。ご飯くらいなら食べさしてあげるよ」
「ほ、本当でありますか!?!」

「フェア……良いのですか?」

「うん、良いの。さっきのお詫びつてのもあるんだけど……」

フェアはそう言うのと隣にいたミルリーフの肩に手を置き、彼女の後ろに立った。

「その楽器、三味線だっけ?それをこの子に聴かせてあげて欲しいの。ここじゃ珍しくて中々聴けるものじゃないからさ、それがご飯代つてことでどう?」

「ママア!」

フェアは、やはり良い意味で大人だ。全員が喜べて丸く収まる、だけではない。まずシンゲンは見た目こそ人間にしか見えないが、その実彼は召喚獣らしい。この世界では召喚獣の地位は低く、差別的に見る者が大半である為シンゲンはこれまで沢山の苦勞をしてきただろう。その中に基本的に召喚獣はしつかりとした店で食事を摂ることは出来ない、というものがある。露天であれば「主人の命令で買いに来た」と言い訳が効くが食事処ではそうはいかない、だから彼は旅を始めてからちゃんとした食事を腰を落ち

着けてゆつくりと味わうことが無かったと思われる。これは短期であればさしたる問題にはならないが、長期になると大問題だ。生物の三大欲求の1つである食欲、これを満足に満たせない期間が続くと精神を蝕まれる。それに睡眠だつて碌な寝具で寝れていないだろう、だからフエアはきつとそのまま泊めるつもりだと思う。そこまで見抜いた上で「三味線の音色を聴かせてあげて欲しい」と彼にしか出来ないことを頼むことで相手が抱く遠慮の消去乃至減弱を行う。そしてミルリーフは喜ぶし他の者達だつて珍しい楽器の音色が聴けるとなれば嫌な顔はしないはず、寧ろ歓迎するのではないだろうか。こうした行動を躊躇うことなく実行出来る彼女はとても15歳の少女とは思えないほど大人びている。本当に、大した少女だ

「そういうことでしたら、喜んで♪」

「よし！それじゃあ一旦帰りましょ。アウルさんもそれで良い？」

「ええ、問題ありません。そう言えばフエア、最近セイロンからシルターンの料理を学んだと言つてましたよね？」

とあることを思い付いた私はフエアに質問を投げ掛けた。きつと彼女ならこれだけで私の言いたいことが分かるだろう

「え？うん、そうだけどそれがどうか……あ、そういうことね」

「シルターンの料理が作れるのですか!？」

思った通りシンゲンが食い付いた。この世界ではシルターンの料理は一般的ではなく、特定の地域でしか通常食べることが出来ない。そしてシンゲンはシルターンから召喚された人間だ、長らく故郷の味を食べてはいないだろう。それに話に聞く限りシルターンの料理は日本料理や中華料理に近いようだ、フェアがこれらの料理をマスターすれば私の食生活的にも非常に助かる。利害の一致である

「も、もしかこれは『りくえすと』なるものをしても?」

「うん、良いよ。でもシルターンの料理を学び始めたのは最近だから、無理だったらごめんね?」

「勿論ですとも!そ、それでは……」

彼が要求したものは凄く質素で、それでいてとても大切に温かいものだった

第二十七話 高潔なる騎士

……妙だ

自室で椅子に座りながら私は一人そう思う。シンゲンを宿屋に連れ帰り、飯を食わせた後私達は旅をして来たという彼にとある質問をした。その内容は『最後の御使いを見かけなかったか』である。どうやら最後の御使い、御使いの長はアロエリの兄らしく有翼巫人という目立つ容姿をしていることから各地を旅して来たシンゲンが見聞きしている可能性に掛けていることだ

しかし彼の返答は「知らない」であった。これまでのことから考えて御使いには追手が掛かっているとみて間違いはないだろう。そうなると彼はその追手と戦っているはずなのだ。それなのに旅人の耳にすら入らないのは奇妙としか言えない……既に敵の手に堕ちたか……いや、それならその身柄を利用すれば良いはずだ。レンドラー辺りは嫌がるだろうが敵の大將は殺し屋を手駒にしているのだ、慈悲など向けては来ないだろう。あるいは……

「んっ」の音は……

思案に耽っていた私の耳が聞き馴染みのある音を拾う。鎧が擦れ、土を叩く音。言う

までもなく劍の軍団の襲来だ。どうやらこちらの本拠地となつてゐる宿屋の位置を特定したらしい……殺し屋共の仕業か。武器としてゐるナイフを脚のシースから抜き、調子を確かめつつ椅子から立ち上がる。ナイフをシースに戻したタイミングで部屋の扉を開け放ちながらセイロンが入つて来た

「アウル！ その様子を見るに気づいておるようだな」

「ええ、劍の軍団ですね。他には？」

私の問いにセイロンは首を横に振つた

「アロエリが空から偵察したが見当たらなかつたそうだ。何か不安要素か？」

「いえ、見当たらなかつたのなら構いません。今はレンドラー達に集中しましょう」

私の言葉に頷いたセイロンと共に表に出た私達はレンドラーと対峙してゐるフェア達と合流した

「役者は揃つたようだな。こうして相見えるのは久方振りだな、アウルよ。待ちわびたぞ」

「私は出来れば会いたくはなかつたですがね。それはそうと一つ聞かせなさい、ここを特定したのは誰です？」

「ふんつ、☒そういうこと☒に長けた者達がいるだけだ。今はまだ情報収集しかさせては
いないがな。……だが、いつまでもその状態でいられる保障は出来んがな」

レンドラーの言葉にフェア達が少し怯む。殺し屋が戦いに加わってくる……それは彼女達には重いだろう、そうなったら私が対処しなくては

「そうなる前に、早く竜の子をこちらに渡すのだ！」

「出来るもんですか！ミルリーフは必ず守るわ！何があってもね!!!」

「ママ……」

フェアが見事に啖呵を切った。なら私はそんな彼女の想いを守るために裏表関係なく最大限協力するだけだ。彼女の言葉を聞いてお互いに戦う覚悟を決めたのか場の緊張感が高まっていく。やはり戦いは避けられないか……仕方がない、今は剣の軍団を——レンドラーを倒そう

「ふふ、ふはははははははははは！その心意気、最後まで貫けるものか……見せてもらおうか!!!」

レンドラーの裂帛の気合と共に剣の軍団の面々がそれぞれ武器を手に取り構え、それに呼応するようにこちらも皆が武器を構えた。レンドラーの意識は完全に私一人に向いている、タイマン勝負以外眼中にないらしい。やれやれ……竜の子が欲しいのか私と戦いたいのかどっちなんだ。仕方がない、相手をしよう。そう決めた私はレンドラーへ向けて一歩踏み出す

「ふ、流星はアウルだ。吾輩の誘いに乗ってくれたか」

「不本意ではありませんが、ね……それにしても今日は斧ではないのですね」

そう、今回レンドラーはあの巨大な戦斧ではなく大剣を持っていた。その大剣も常人では持ち上げることも出来なような程のものであるのだが……

「まあ、な。折角貴公と死合えるのだから万全の状態で挑みたかったが……生憎整備中なのだ」

「なるほど。それなら手加減した方が良いですか？」

答えは分かりきっているが、敢えて含み笑いをしながら私はそう言った。当然彼にもその意図は伝わったらしく、口の端を持ち上げて笑った

「ははは、思っていたよりノリが良いではないか。だが笑いのセンスはイマイチらしい」

「おや、それなりに自信はあったのですが……残念です」

「心にもないことを。まあよいわ、それよりもそろそろ……始めるぞ」

そう言うレンドラーは長大な大剣を鞘から抜き放った。どうやら時間稼ぎもここまでらしい。仕方がないと覚悟を決めた私は素手のまま彼に対する。そんな私の様子にレンドラーは疑問を呈してきた

「貴公は武器を使わぬのか？」

「生憎とこれが私の一番得意なスタイルでしてね。何か不満でも？」

「いや、手加減するつもりなのかとな。それが最も強いのなら何も言うまい……行くぞ

!

レンドラーが大剣を両手で構えながら突進してきた。構え方は脇構えに似ていることから横薙ぎしてくると予測、しかし彼はあの戦斧をまるで手足のように扱っていたことを鑑みると油断は禁物だ。私は動きを先読みしつつも決め付けることはせず、自然体で待ち構える。するとレンドラーは大剣をいきなり下段に構え直した直後に突き上げてきた。自然体で構えていた私はその突きに対して対応し、お返しに蹴りを放つが左腕を挟み込まれて防がれてしまった。前方への踏み込みもしていなかったので鎧の上からダメージを与えることは叶わなかったのだ

「あれを避けるとは、流石だな」

「それはどうも」

彼を相手に戦闘中の時間稼ぎなどしている暇はない。会話に意識が多少なりとも削がれたのを好機と見て私は踏み込む。一足飛びで懐へと入り込みまずは大剣を封じる。ここまで接近されては大型武器では分が悪い

「っ!？」

しかしそれでも流石は將軍といったところか。意識を刈り取る為に顔へ突き出した私の左手を身をよじることで回避した。だが、それこそこちらの狙いだ。私は右腕をレンドラーの胸へ向かって伸ばしつつ脚から腰、そして背中から肩へと変則的な力のかけ

方をして捻じる。そのまま避けた彼の左胸の辺りに指先を整えた右掌を当てて力を流し込んでいく

「ぬぐうっ……!!」

中国拳法の基礎、発勁。その中でも体内へのダメージが大きい浸透勁だ。鎧の上からとはいえこれならしつかりとダメージが通るだろう。その証拠にレンドラーは大きく呻き後退りながら胸を抑えている。このチャンスを逃す手はない、私はそのまま彼へ接近してハイキックを叩き込もうとした

「ぬおおおおおー！」

「っ!?!」

今度はこちらが驚く番だった。あの長大な大剣をレンドラーはあろうことか右腕一本で正確にこちらへ向かって振り抜いて来たのだ。横薙ぎに振られたその上に手を付き、跳躍しながら身体を回転させることで回避。そのまま全力で鉄山靠を放つことで彼の身体を大きく吹き飛ばす。そこそこの距離を飛んだ彼の身体は地面に打ち付けられ、息が詰まったのが見て取れる。これで沈んでくれれば楽なのだが……

「ぬ、ぐうう……流石、だな。鎧ごと吹き飛ばされるなど、初めての経験、だぞ」

「まだ立ち上がりますか……貴方本当に人間ですか？」

レンドラーは立ち上がった。大剣を支えにしながらではあるがそれでも立ち上がり、

言葉さえ放つたのだ。並外れたタフネスである、私も男に産まれればあれくらいになれたのだろうか……などと邪推しかけるも、すぐに意識を切り替える。彼は両手で柄を握っており、なんとか立っているという風貌だ。普通ならこの隙に畳み掛けるのが定石なのだが……油断は禁物だろう。ドイツの古流剣術にはあの体勢から一瞬で斬り上げてくる技がある、彼ほどの遣い手であればそれくらいしてきても不思議はない。冷静に観察し、状態を把握する

「ふ、冷静だな。まだ我一撃を放つ余力があることを見抜いたか」

「やはりそうでしたか。しかしこれで貴方の勝ち目はほぼ無くなりました、降参しては？」

レンドラーは私の言葉を鼻で笑った

「ふんつ、吾輩を甘く見るなよ？このような窮地、幾らでも切り抜けて来たわ。それに……一度挑んだ戦いから逃げるなど、騎士の風上にもおけんわ!!」

裂帛の気合と共に大剣を青眼に構え、こちらを見据えてくる。その眼はどこまでも澄み切っていて、確かな信念の色をしていた。これ程までに高潔な騎士が何故竜の子を狙う組織にいるのか、答えは簡単だ。それだけの忠誠を捧げるに足る主君がいるのだろう。彼の真つ直ぐな姿を見てその主君に興味が湧いた、機会があれば話してみたいものだ。だが、その前に……

「……分かりました。では」

「ああ、この戦いの決着を付けよう」

彼を、倒す

私は呼吸を整えて構える。どこまでも真つ直ぐな彼に敬意を表して真正面から倒すことにしよう。暫しの間膠着した私達だが、私の左後方から剣が弾かれ宙を舞う音が聞こえる。恐らくフェアアが弾き飛ばしたのだろう。その剣が地面に落ちる音がした瞬間、それを合図とした私達は同時に突進した

「つえりやあああああ!!」

レンドラーは全ての力を振り絞って大剣を振り上げ、大上段からの叩きつけを放ってくる。予想通りだ。それを見越していた私は予め内側に捻っていた右腕を大剣の横を滑らせるように突き出しながら捻れを元に戻していく

「っ!」

レンドラーの目が見開かれる。無理もない、私を真つ二つにする軌道を描いていた大剣が横に大きくズレ、私の開かれた右足よりも右側にまで動いたのだ。かつての日本で刀を持った武士に素手で対抗する為に開発された、古流空手の基本技である。大剣を逸らすと同時に突き出した拳はそのまま吸い込まれるように彼の顔面へと叩き込まれた

「いっはっ……!!」

明らかに鼻が折れたレンドラーが鼻血を散らしながら後ろに倒れ込む。彼に起き上がる様子はない、私の勝ちだ。手当をしようかとも思ったが、既に複数の部下がレンドラーの元へ向かって助け起こしている。彼等は歴戦の騎士だ、手当の心得くらい十分にあるだろう。そう考えた私はフェア達と合流すべく踵を返そうとしたが、前方から仇を取らんとばかりに武器を構える剣の軍団の面々が迫って来ている。これで彼女達と合流しようと後退すれば挟撃されてしまう、仕方がないのでこのまま前進して逆に彼らを挟撃することにした

☆・☆・☆・☆・☆フェア視点☆・☆・☆・☆・☆

「たりやああああ!!」

目の前にいる兵士が持っている剣を真上に弾き上げる。すかさずグラツトお兄ちゃんが槍の石突で側頭部を叩いて地面に転がした。レンドラーはアウルさんが引き受けてくれるから私達は剣の軍団の兵士達だけに集中出来る。勿論こいつらも一人一人が決して油断ならない猛者なんだけど、それでもレンドラーに比べれば脅威度は低い

らね

「フエア！レンドラーを倒したアウルがそのまま前進している。挟撃出来るぞ！」

槍兵が突き出してきた槍を剣で横に逸らしていると空中から矢を射つつ戦況を確認していたアロエリから報告があった。あのレンドラーを一人で倒すなんて流石……と感心してばかりもいられないね

「了解！みんな、畳み掛けるよ！」

「「「応っ！」」」

私の言葉に皆が応じてくれた。そのまま私達は一気呵成に攻めて、その勢いに押され始めた頃を狙ってアウルさんが後ろから思いつ切り暴れてくれたお陰であっけなく勝負はついた。私達は確実に強くなってる、それを実感した私はちよつとした高揚感に囚われていた

だからなのかな、これで今日の戦いは終わったんだって油断しちゃったのは……まさかあんなことになるなんて

「そこまでだ！」

突然響いたその声の先を辿った私達は、そのまま息を呑んだ――